

# 六波羅蜜寺境内・六波羅政庁跡

2012 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所







# 六波羅蜜寺境内・六波羅政庁跡

2012年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永く、そして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかむかしの、貴重な文化財が今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、校舎新築工事に伴う六波羅蜜寺境内・六波羅政庁跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

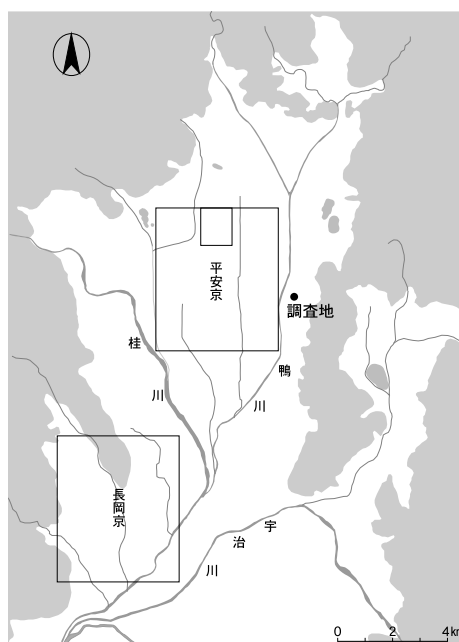
平成 24 年 3 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

# 例 言

- 1 遺 跡 名 六波羅蜜寺境内・六波羅政庁跡
- 2 調査所在地 京都市東山区松原通 大和大路東入2丁目轆轤町 82 (元六原小学校内)
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 門川大作
- 4 調査期間 2011年6月13日～2011年9月13日
- 5 調査面積 451 m<sup>2</sup>
- 6 調査担当者 田中利津子・菅田 薫
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図(縮尺1:2,500)「五条大橋」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI (ただし、単位(m)を省略した)
- 9 使用標高 T.P.:東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 種類ごとに通し番号を付し、土器類は番号のみとしたが、瓦類は「瓦」、金属製品は「金」、銭は「銭」、石製品は「石」、木製品は「木」、土製品は「土」をそれぞれ付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 田中利津子
- 14 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



(調査地点図)



# 目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の経過	1
2. 位置と環境	4
(1) 位置と環境	4
(2) 周辺の調査	4
3. 遺 構	5
(1) 基本層序	5
(2) 遺構の概要	5
(3) 東区の遺構	9
(4) 西区の遺構	11
4. 遺 物	22
(1) 遺物の概要	22
(2) 土器類	22
(3) 瓦類	38
(4) 金属製品	44
(5) 石製品	45
(6) 木製品	49
(7) 土製品	51
(8) その他の遺物	51
5. ま と め	52

# 図 版 目 次

図版 1 遺構	1 東区東半第1面全景（東から）
	2 東区西半第1面全景（東から）
	3 門1（南から）
図版 2 遺構	1 西区第1面全景（南西から）
	2 窯 100 検出状況（西から）
	3 土坑 120 検出状況（東から）

- 図版 3 遺構 1 西区第2面全景（北から）  
 2 溝 134 遺物出土状況（南西から）  
 3 堀 135 北端 石積み検出状況（西から）
- 図版 4 遺構 1 溝 204 東肩 石検出状況（南西から）  
 2 土坑 367 検出状況（南から）  
 3 埋納銭出土状況（西から）  
 4 西区第3・4面全景（南東から）
- 図版 5 遺構 1 井戸 255（西から）  
 2 西区南壁 堀 135・流路 335 断面（北から）
- 図版 6 遺物 出土土器 1
- 図版 7 遺物 出土土器 2
- 図版 8 遺物 出土土器 3
- 図版 9 遺物 出土土器 4
- 図版 10 遺物 出土土器 5
- 図版 11 遺物 軒瓦
- 図版 12 遺物 金属製品・石製品・土製品

## 挿 図 目 次

図 1	調査地および周辺の調査位置図（1：2,500）	1
図 2	調査区配置図（1：1,000）	2
図 3	東区調査前全景（東から）	3
図 4	西区調査前全景（南東から）	3
図 5	西区作業風景（東から）	3
図 6	夏期教室発掘体験風景（北から）	3
図 7	夏期教室発掘体験風景（西から）	3
図 8	現地説明会風景（西から）	3
図 9	東西セクション・北壁断面図（1：100）	6
図 10	南壁断面図（1：100）	8
図 11	東区第1面遺構平面図 [室町時代]（1：150）	9
図 12	門 1 実測図（1：40）	10
図 13	柱穴列 1 実測図（1：40）	10
図 14	落込 210 断面図（1：40）	11

図 15	西区第 1 面遺構平面図 [室町時代から近代] (1 : 150)	12
図 16	土坑 114・120・124 実測図 (1 : 40)	13
図 17	西区第 2 面遺構平面図 [室町時代] (1 : 150)	14
図 18	建物 1 実測図 (1 : 50)	15
図 19	門 2・柵 1 実測図 (1 : 50)	16
図 20	柵 2 実測図 (1 : 50)	16
図 21	溝 134 土器出土状況実測図 (1 : 40)	16
図 22	堀 135 石積み状況実測図 (1 : 50)	17
図 23	土坑 242・367 断面図 (1 : 40)	17
図 24	西区第 3 面遺構平面図 [平安時代から鎌倉時代] (1 : 150)	18
図 25	井戸 255 実測図 (1 : 40)	19
図 26	土坑 334 実測図 (1 : 40)	20
図 27	西区第 4 面遺構平面図 [弥生時代から奈良時代] (1 : 150)	21
図 28	土器実測図 1 [弥生時代から奈良時代] (1 : 4)	23
図 29	土器実測図 2 [平安時代] (1 : 4)	25
図 30	土器実測図 3 [鎌倉時代 井戸 255] (1 : 4)	26
図 31	土器実測図 4 [鎌倉時代 その他遺構] (1 : 4、86 のみ 1 : 6)	27
図 32	土器実測図 5 [室町時代 溝 204・堀 135] (1 : 4)	29
図 33	土器実測図 6 [室町時代 溝 134] (1 : 4)	30
図 34	土器実測図 7 [室町時代 その他遺構] (1 : 4)	32
図 35	土器実測図 8 [室町時代 整地層] (1 : 4)	34
図 36	土器実測図 9 [室町時代 整地層] (1 : 4)	35
図 37	土器実測図 10 [室町時代 整地層] (1 : 4)	36
図 38	瓦類拓影・実測図 1 (1 : 4)	39
図 39	瓦類拓影・実測図 2 (1 : 4)	41
図 40	瓦類拓影・実測図 3 (1 : 4)	42
図 41	金属製品実測図 (1 : 2)	43
図 42	銭貨拓影 (2 : 3)	45
図 43	石製品実測図 1 (1 : 4、石 25 のみ 1 : 8)	47
図 44	石製品実測図 2 (1 : 8)	48
図 45	木製品実測図 (1 : 4)	50
図 46	土製品実測図 (1 : 4)	51

# 表 目 次

表 1	遺構概要表 .....	5
表 2	遺物概要表 .....	22
表 3	錢貨一覽表 .....	44

# 六波羅蜜寺境内・六波羅政庁跡

## 1. 調査経過

### (1) 調査に至る経緯

今回の発掘調査は、京都市立開晴小・中学校第2校舎新築工事に伴うものである。調査地は京都市東山区松原通大和大路東入2丁目轆轤町82の元京都市立六原小学校内に所在し、六波羅蜜寺の西・北側、西福寺の南側に隣接する。『京都市遺跡地図台帳』<sup>1)</sup>では、六波羅蜜寺境内および六波羅政庁跡にあたる。

調査に先立ち、調査区の位置の確定や、京都市教育委員会環境整備課と重機掘削中に起きる震度の測定や、発掘調査中に実施するボーリング調査などの事前調整をした。

### (2) 調査の経過 (図1～8)

調査区は、校舎と講堂に挟まれた部分とグラウンドに続く、鍵形を呈した部分からなり、その間に南北の排水溝がある。この排水溝を境に調査区を東区とグラウンド部分の西区とし、調査を



図1 調査地および周辺の調査位置図 (1 : 2,500)

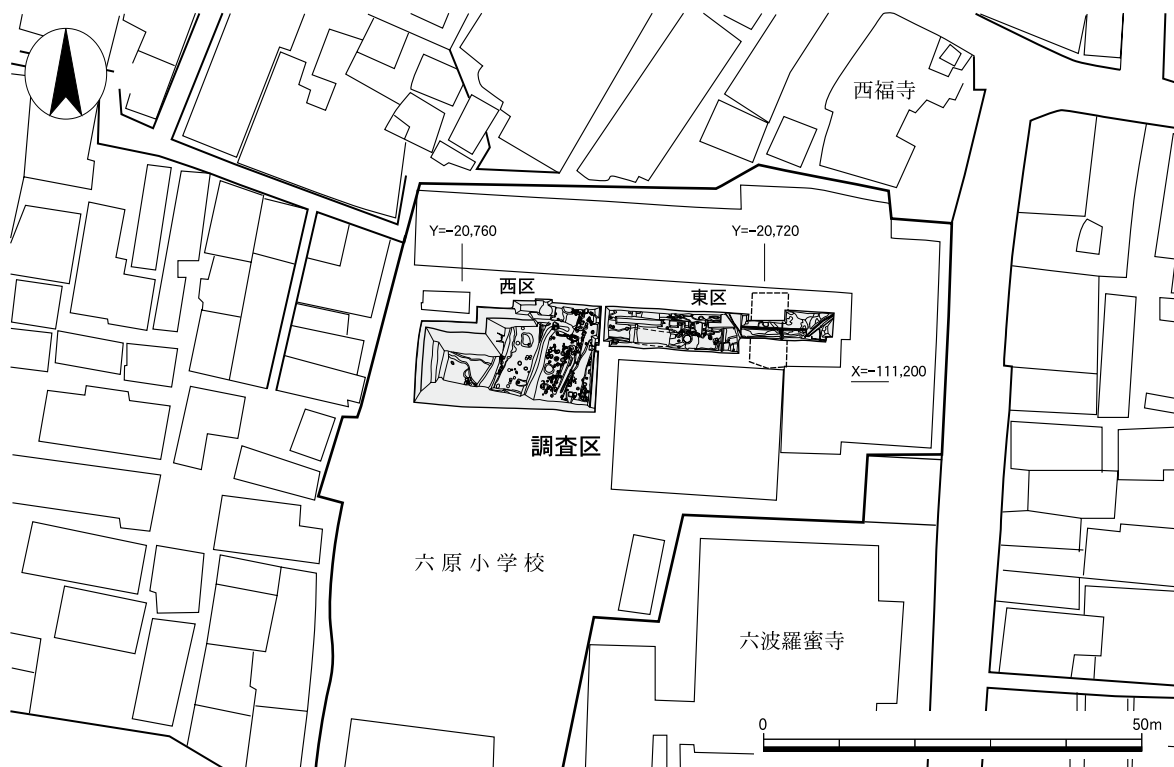


図2 調査区配置図 (1 : 1,000)

実施した。調査区は埋設管が多く、廃管と判明した管は切断・撤去して調査を進めた。

東区は、まずカッターでアスファルトおよびコンクリートを切断した後、重機で現地表面から0.6～0.7m前後まで掘削をした。その後は人力掘削により進めた。調査した遺構面は1面のみで、室町時代の遺構を検出した。

西区は重機で掘削したところ、東から西に向かって下がる急な斜面となり、掘り下げた深さは、東では地表下0.9m、西では地表下3.4mである。重機掘削後は人力掘削を行い、調査した遺構面は合計4面である。第1面では室町時代から近代にかけての遺構を検出した。第2面では室町時代の遺構を検出した。第3面では平安時代から鎌倉時代の遺構、第4面では弥生時代から奈良時代の遺物を包含する自然流路を検出した。

第1面の北端で検出した近代の窯跡の焼き口を確認するため、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）との協議を経て調査区を拡張したところ、0.4m北で既存の水道管を検出したため拡張を断念した。また、第2面で検出した堀135の北端が埋設管の下にあたるため、文化財保護課の指導で埋設管を固定して、その下を掘り抜いて調査を進めた。

なお、掘削土はすべて調査地内で仮置きし、埋め戻した。調査中に出土したコンクリートや土管・煉瓦などの産業廃棄物は分類して搬出し、調査を終了した。

調査中は適宜、文化財保護課の臨検を受けた。また、検証委員の高正龍氏（立命館大学教授）、鈴木久男氏（京都産業大学教授）の視察を受けた。

他に普及啓発事業の一貫として8月3日（水）・4日（木）に京都市考古資料館主催の夏期教室



図3 東区調査前全景（東から）



図4 西区調査前全景（南東から）



図5 西区作業風景（東から）



図6 夏期教室発掘体験風景（北から）



図7 夏期教室発掘体験風景（西から）



図8 現地説明会風景（西から）

で親子の発掘体験を実施し、2日間で50名の参加があった。また8月20日（土）には一般を対象に現地説明会を行い、約450名の参加があった。

註

- 1) 『京都市遺跡地図台帳【第8版】』京都市文化市民局 2007年

## 2. 位置と環境

### (1) 位置と環境

調査地は、東山から鴨川に至る斜面に位置し、地形分類図によれば、地質は古生層の山地から続く旧期洪積層からなる傾斜地に分類される。平地は花崗岩砂を含む砂質砂層から形成される。また、東山連峰から続く数本の谷筋は2つの断層によって南東から北西方向を示している。調査地一帯は古墳時代から続く鳥辺野とよばれる葬送の地であった。鳥辺野は、阿弥陀ヶ峰を中心に西に向かって扇状に広がる広大な地を占めており、調査地北東には5世紀頃の將軍塚古墳群が、南東の今熊野周辺にはやや時代の下がる古墳群が所在する。西の化野、北の蓮台野とともに葬送地として強く意識されるのは平安時代中期以降で、応和3年(963)、空也上人がこの地に建立した六波羅蜜寺の前身となる西光寺と関連する。六波羅の地名は髑髏原や東山山麓(麓原)が訛つたものという伝承があり、平安時代末期には平家一門の六波羅邸が築かれた。しかし、文治元年(1185)、壇ノ浦の合戦で平家滅亡後、源頼朝が頼盛の池殿の跡を接収し邸宅を建て、北条氏が鎌倉幕府の政庁(六波羅探題)を設けた<sup>1)</sup>。

### (2) 周辺の調査

周辺の調査では、昭和50年の六波羅蜜寺境内南側の調査(図1-1)で、平安時代末から鎌倉時代の柱穴や近世の土取穴を検出した。出土した遺物は、平安時代の緑釉陶器小片・土師器皿・軒瓦、中世の陶器・五輪塔、近世の塩壺などがある。昭和56年の六波羅蜜寺境内北側の調査<sup>2)</sup>(図1-2)では、地表下0.5mで平安時代後期の包含層、1.4mで古墳時代前期の流路などを検出した。出土した遺物は、流路から弥生土器片が、平安時代中期の包含層から土師器皿・須恵器・緑釉陶器の他に混入として出土した古墳時代の円筒埴輪片がある。平安時代後期の土坑や包含層からは土師器・瓦器・瓦などが出土した。平成5年度の立会調査<sup>3)</sup>(図1-3)では、地表下1.3～1.5mで鎌倉時代時代の包含層、地表下1.5m以下で鎌倉時代以前の路面を検出している。

註

- 1) 「六原学区」『史料 京都の歴史 第10巻 東山区』平凡社 1992年
- 2) 前田義明「六波羅政庁跡」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983年
- 3) 『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年



### 3. 遺 構

#### (1) 基本層序 (図9～11)

東区の基本層序は、渡り廊下の東側がアスファルト・コンクリート下、現代盛土が厚さ 0.1 ～ 0.3 mあり、直下が暗褐色粗砂～中砂の堆積砂層となる。西側はアスファルト・コンクリート下、現代盛土が厚さ 0.5 ～ 0.6 mあり、その下が黒褐色を主体とする江戸時代から近代の整地層で、厚さが 0.3 ～ 0.8 mある。この土層の下面が灰白色シルトの地山となり、標高は 37.2 mである。

西区は東から西に傾斜する地形となり、現グラウンド・旧グラウンドの整地土が厚さ 0.9 ～ 3.4 mある。その下面が褐色砂泥を主体とする室町時代の整地層で、厚さが 0.3 ～ 1.7 mあり、西に厚くなる。その直下がにぶい黄色シルトを主体とする地山となり、西側の Y=-20,760 付近は砂礫層となる。地山面の標高は、東区が 37.2 m、西区が約 34.7 mで、西に傾斜し高低差は 2.5 mある。

#### (2) 遺構の概要

東区は地山直上を第1面とした。室町時代面の1面のみで、門跡・溝・柱穴・土坑などを検出した。

西区は室町時代の整地層上面を第1面、整地層直下の地山上面では古墳時代から室町時代の遺構を検出したが、室町時代の遺構群を第2面、平安時代から鎌倉時代の遺構群を第3面、弥生時代から奈良時代の流路を第4面として、時代別に調査を行った。第1面で近代の窯、室町時代後期以降の土坑・柱穴を、第2面で室町時代の溝・堀・柱穴・土坑などを検出した。第3面では中央 (Y=-20,752 付近) 以西で平安時代から鎌倉時代の井戸・柱穴・土坑などを検出した。第4面では弥生時代から奈良時代の遺物を包含する南北方向の流路を検出した。

検出した遺構総数は 367 基である。ここでは主要となる遺構を検出面ごとに報告し、調査地の歴史的変遷はまとめて後述する。

表1 遺構概要表

時 代	遺 構
弥生時代 ～奈良時代	流路335
平安時代	土坑333・334
鎌倉時代	井戸255、土坑、柱穴など
室町時代	建物1、門1・2、柵1・2、柱穴列1、堀135、溝99・133・134・186・204・205、土坑114・120・124・160・204B・242・367、柱穴73・118・230・286、落込210、埋納銭など
近世以降	窯100、土坑、柱穴など

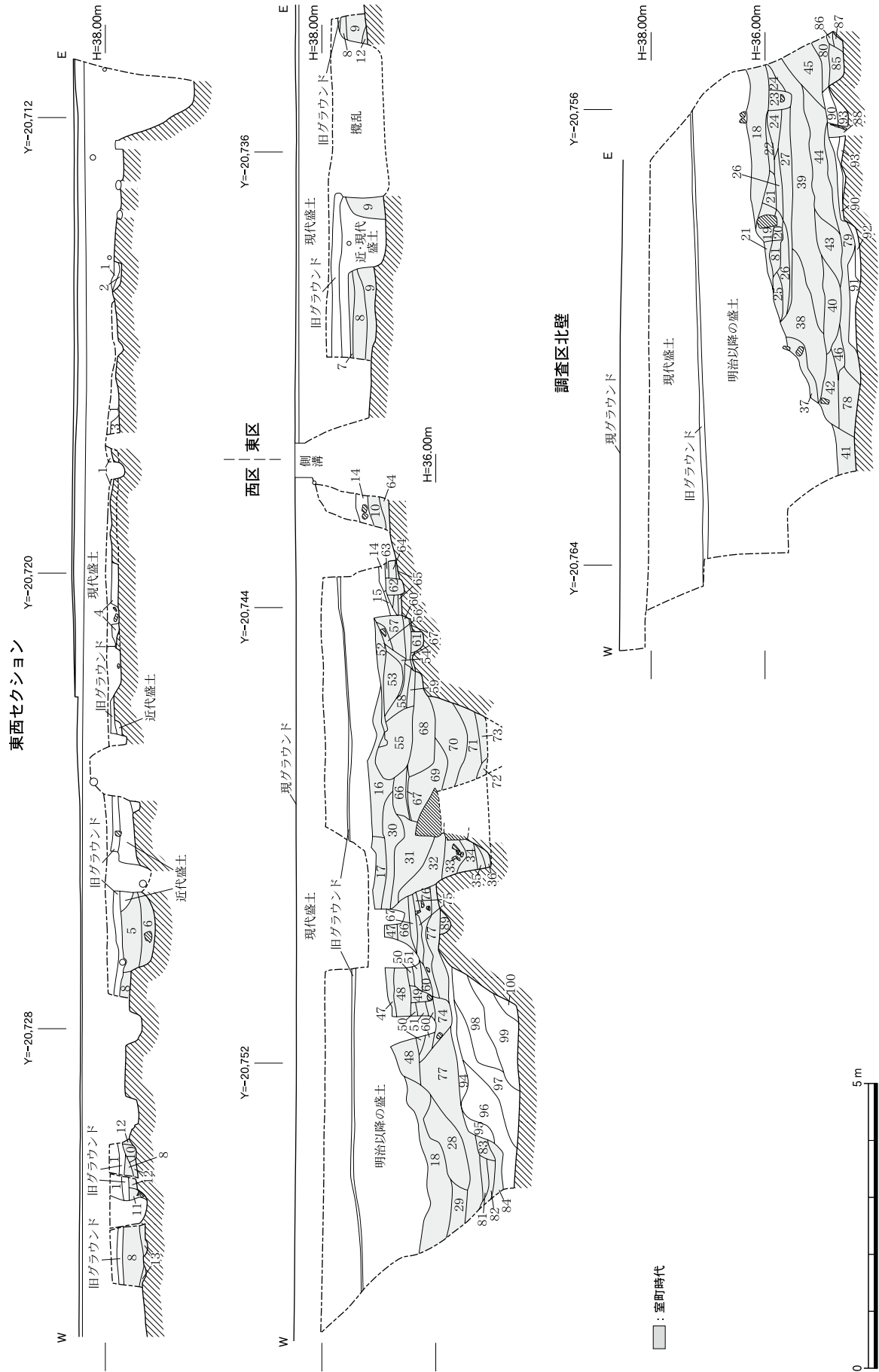
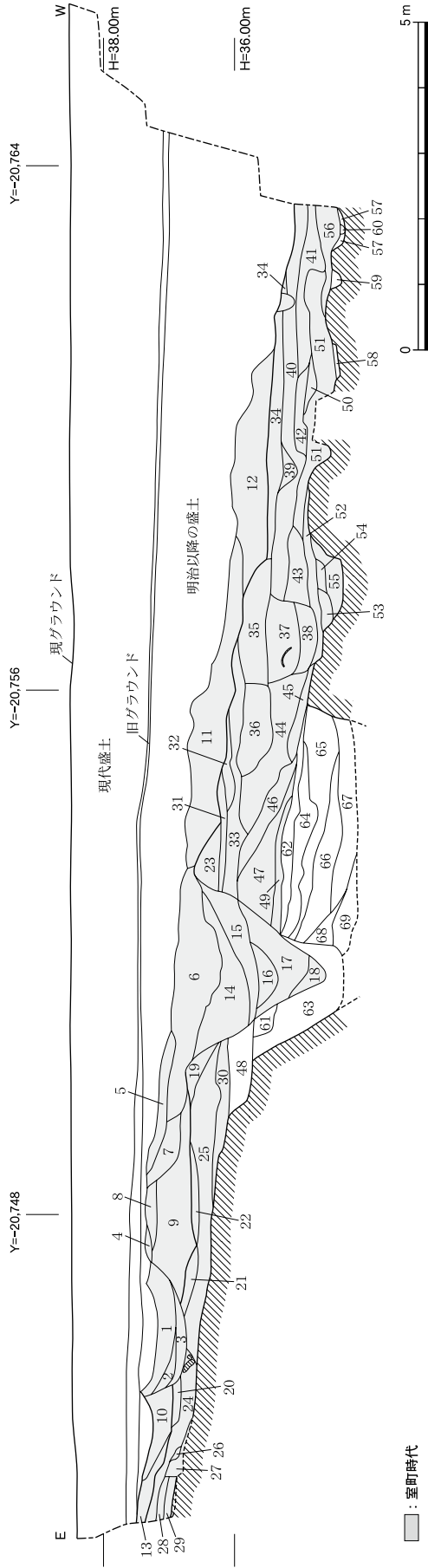


図9 東西セクション・北壁断面図 (1:100)

1	10YR3/3 暗褐色砂質土、粗砂混 (埋設管掘形)	45	10YR3/2 黒褐色砂泥、φ3～5cm礫中量・炭・土器片少量混
2	10YR2/3 黒褐色砂質土、粗砂混 (土坑6)	46	2.5Y3/2 黒褐色砂泥、土器片微量混
3	10YR3/2 黒褐色砂泥+7.5Y7/1 灰白色シルト (地山) ブロック混	47	10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 炭少量混
4	2.5Y6/3 にぶい黄色細砂	48	10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥+10YR7/4 にぶい黄褐色シルト (地山) ブロック少量・土器片・炭少量混
5	10YR4/2 灰黄褐色砂泥、粗砂・小礫・土器片混 (土坑23)	49	2.5Y5/4 黄褐色砂泥
6	10YR4/2 灰黄褐色砂泥、土器片混 (土坑23)	50	10YR3/2 黒褐色砂泥
7	2.5Y5/3 黄褐色細砂	51	+10YR7/4 にぶい黄褐色シルトブロック少量混
8	10YR3/2 黒褐色砂泥、土器片少量混	52	+10YR6/6 明黄褐色シルト粗砂・土器片混
9	10YR4/4 褐色砂質土	53	10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
10	10YR4/2 灰黄褐色砂泥	54	10YR3/3 暗褐色砂泥、φ2～5cm礫・土器少量混
11	10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥	55	2.5Y5/3 黄褐色砂泥、φ2～10cm礫混
12	10YR6/8 明黄褐色砂泥	56	2.5Y5/4 黄褐色砂泥、φ3～15cm礫混
13	10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、粗砂・小礫・土器片混 (土坑23)	57	10YR6/3 にぶい黄褐色砂泥、φ1～2cm礫・土器片混
14	2.5Y5/3 黄褐色砂泥	58	10YR5/2 灰黄褐色砂泥、φ1～3cm礫混
15	2.5Y5/4 黄褐色砂泥、φ0.5～1cm礫混	59	10YR4/2 灰黄褐色砂泥+7.5YR4/1 褐灰色粘質土ブロック混
16	10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥、φ1～10cm礫混	60	10YR4/4 褐色砂泥、φ1～3cm礫・土器片混
17	10YR4/4 褐色砂泥	61	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥 (柱7・148)
18	+10YR6/6 明黄褐色シルトブロック少量まだらに混	62	2.5Y3/2 黒褐色砂泥、土器片混 (柱6・149)
19	10YR3/4 暗褐色砂泥	63	2.5Y6/4 にぶい黄褐色砂泥、土器片混
20	10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、粗砂少量混	64	10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥+10YR3/2 黒褐色粘質土ブロック、φ5～3cm礫・土器片・炭少量混
21	+2.5Y7/2 灰黄色シルト (地山) ブロック少量混	65	10YR4/4 褐色砂泥、φ1～15cm礫混
22	10YR5/3 にぶい黄褐色細砂	66	10YR3/4 暗褐色砂泥、φ2～4cm礫・土器片混
23	+2.5Y7/2 灰黄色シルト (地山) ブロック多量混	67	10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥粘質、φ1～2cm礫・土器片混
24	10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥	68	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥 (土坑160)
25	10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土、細砂～中砂	69	10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
26	10YR3/3 暗褐色砂泥	70	+10YR5/2 灰黄褐色粘土ブロック混 (堀135)
27	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥	71	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥粘質 (堀135)
28	10YR4/4 褐色砂泥、粗砂～φ0.5cm小礫多量・土器片混	72	10YR5/2 灰黄褐色粘土ブロック混 (堀135)
29	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥	73	2.5Y3/2 暗褐色砂泥 (堀135)
30	10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥+10YR6/6 明黄褐色シルトブロックまだらに混、φ0.5～3cm礫混	74	10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥、粗砂～φ2cm礫混
31	10YR3/2 黒褐色砂泥、φ1～2cm礫・土器片少量混 (堀135)	75	10YR4/2 灰黄褐色砂泥、φ0.5～1cm礫・土器片混
32	10YR3/3 暗褐色砂泥、φ1～2cm礫・土器片多量混 (堀135)	76	10YR3/2 黒褐色砂泥、φ3～15cm礫混
33	10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 やや粘質、φ1～15cm礫多量・土器片混 (堀135)	77	10YR2/3 黒褐色砂泥、φ1～2cm礫混
34	10YR4/2 灰黄褐色砂質土～粗砂、φ1～5cm礫混 (堀135)	78	10YR3/3 暗褐色砂泥、φ4～10cm礫混
35	2.5Y5/3 黄褐色砂泥 (堀135)	79	10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、φ1～5cm礫・土器片混
36	2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥 (堀135)	80	10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
37	2.5Y3/2 黒褐色砂泥、φ5～15cm礫少量混	81	10YR4/2 灰黄褐色砂泥粘質、土器片混 (溝204)
38	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥、土器片混	82	2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥粘質、粗砂・土器片混 (溝204)
39	10YR3/3 暗褐色砂質土、炭・土器多量、φ8cm礫混	83	10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、粗砂混 (溝204)
40	10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、φ2～15cm礫混	84	10YR4/2 灰黄褐色シルト粘質、上部に粗砂混 (溝204)
41	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥、土器片少量混	85	10YR3/3 暗褐色砂泥、土器片少量混 (溝204)
42	2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥、φ2～15cm礫混	86	10YR3/2 黒褐色砂泥 (溝204)
43	2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥、φ2～15cm礫混	87	10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (溝204)
44	2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥、土器片少量・φ1～5cm礫混		
88	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥、φ3～20cm礫少量混		
89	10YR3/2 黒褐色砂泥 (溝186)		
90	10YR3/3 暗褐色砂泥		
91	10YR3/2 黒褐色砂泥、φ2cm大礫・炭・土器片少量混		
92	10YR3/3 暗褐色砂泥		
93	2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥～シルト		
94	10YR3/3 暗褐色砂泥、粗砂混 (流路335)		
95	10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、固く締まる、土器片・炭少量混 (流路335)		
96	10YR5/3 にぶい黄褐色粘土 (流路335)		
97	2.5Y4/2 暗灰黄色粘土 +10YR4/6 褐色砂泥ブロック混 (流路335)		
98	2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土+10YR4/6 褐色砂泥ブロック混、φ0.5～2cm礫混 (流路335)		
99	10YR4/4 褐色砂泥 やや粘質、φ0.5～2cm礫混 (流路335)		
100	10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 やや粘質 (流路335)		



- |    |   |    |  |
|----|---|----|--|
| 1  | 10YR3/3 暗褐色砂泥、粗砂～φ1cm小礫混 (溝134)                         | 47 | 2.5Y3/2 黒褐色砂泥、φ1～5cm礫混                   |
| 2  | 3層+2.5Y6/2 灰黄色シルトブロック (溝134)                            | 48 | 10YR4/4 褐色砂泥+2.5Y7/2 灰黄色シルトブロック少量・炭混     |
| 3  | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、φ0.5～1cm小礫混 (溝134)                     | 49 | 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥+2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂ブロック混    |
| 4  | 10YR7/4 にぶい黄褐色砂泥  | 50 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥                         |
| 5  | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥  | 51 | 2.5Y3/1 黒褐色砂泥、土器小片混                      |
| 6  | 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質土+2.5Y7/2 灰黄色シルトブロック少量～2.5Y6/8 明黄褐色砂多量混 | 52 | 10YR3/2 黒褐色砂泥                            |
| 7  | 10YR3/3 暗褐色砂泥+2.5Y7/2 灰黄色シルトブロック少量混                     | 53 | 10YR3/1 黒褐色砂泥、やや粘質 (溝204)                |
| 8  | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥  | 54 | 10YR2/2 黒褐色砂泥、土器片混 (溝204)                |
| 9  | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土+10YR6/8 明黄褐色～2.5Y7/2 灰黄色シルトブロック少量混    | 55 | 2.5Y2/2 黒褐色砂泥、土器片少量混 (溝204)              |
| 10 | 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土、φ0.5～2cm小礫混                           | 56 | 2.5Y3/2 黒褐色砂泥、粘質、φ3～10cm礫混               |
| 11 | 10YR3/3 暗褐色砂泥、φ1～5cm礫混                                  | 57 | 2.5Y3/2 黒褐色砂泥                            |
| 12 | 10YR3/2 黒褐色砂泥、φ1～20cm礫混                                 | 58 | 2.5Y3/1 黒褐色砂泥、粘質                         |
| 13 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、φ3～10cm礫中量・土器片混                          | 59 | 2.5Y3/1 黒褐色砂泥、粘質                         |
| 14 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、φ0.5～5cm礫中量混                           | 60 | 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土、φ1～3cm礫混                 |
| 15 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥+2.5Y6/4 にぶい黄色シルトブロック多量混 (堀135)         | 61 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 (溝186)                     |
| 16 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥+10YR5/2 灰黄褐色粘土ブロック、固く締まる、土器片混 (堀135)   | 62 | 2.5Y3/1 黒褐色砂泥、φ1～2cm礫混                   |
| 17 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土 (堀135)                                | 63 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、φ0.5～2cm礫混 (流路335)      |
| 18 | 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質土                                       | 64 | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥+10YR4/6 褐色砂泥ブロック混 (流路335) |
| 19 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土+2.5Y7/2 灰黄色シルト少量混                     | 65 | 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土+10YR4/6 褐色砂泥ブロック混 (流路335) |
| 20 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、土器片混                                     | 66 | 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土                         |
| 21 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土                                       | 67 | +10YR4/6 褐色砂泥ブロック混 (流路335)               |
| 22 | 10YR5/2 灰黄褐色砂泥、固く締まる                                    | 68 | 2.5Y5/3 黄褐色粘土+10YR4/6 褐色砂泥ブロック混 (流路335)  |
| 23 | 10YR2/2 黒褐色砂泥、φ1cm礫混                                    | 69 | 2.5Y3/1 黒褐色粘土+10YR4/6 褐色砂泥ブロック混 (流路335)  |
| 24 | 10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂～中砂                                     |    |  |
| 25 | 10YR6/8 明黄褐色細砂少量混                                       |    |  |
| 26 | 10YR2/2 黒褐色砂泥+2.5Y7/2 灰黄色シルトブロック、炭混                     |    |  |
| 27 | 2.5Y4/6 オリーブ褐色砂質土、粗砂～細砂                                 |    |  |
| 28 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、粗砂混                                    |    |  |
| 29 | 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥+10YR6/4 にぶい黄褐色中砂                       |    |  |
| 30 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥  |    |  |
| 31 | +2.5Y7/2 灰黄色シルトブロック多量混、固くたたき締まる                         |    |  |
| 32 | 10YR3/2 黒褐色砂泥、φ1～2cm礫混                                  |    |  |
| 33 | 2.5Y3/1 黒褐色砂泥、φ1～3cm礫混                                  |    |  |
| 34 | 2.5Y3/2 黒褐色砂泥、φ1～5cm礫混                                  |    |  |
| 35 | 10YR3/1 黒褐色砂泥   |    |  |
| 36 | 10YR2/2 黒褐色砂泥、φ1～3cm礫・土器片少量混                            |    |  |
| 37 | 10YR3/1 黒褐色砂泥、φ1～10cm礫・土器片少量混                           |    |  |
| 38 | 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥                                       |    |  |
| 39 | 10YR3/2 黒褐色粘質土  |    |  |
| 40 | 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥、φ1～5cm礫・土器片混                          |    |  |
| 41 | 2.5Y3/2 黒褐色砂泥、φ1～5cm礫混                                  |    |  |
| 42 | 10YR3/3 暗褐色砂泥、土器片混                                      |    |  |
| 43 | 10YR3/2 黒褐色砂泥、φ5～10cm礫混                                 |    |  |
| 44 | 10YR3/2 黒褐色砂泥、φ1～5cm礫混                                  |    |  |
| 45 | 2.5Y4/1 黄灰色砂泥、φ2～15cm礫混                                 |    |  |
| 46 | 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥、φ1～10cm礫混                             |    |  |

図 10 地層断面図 (1:100)

### (3) 東区の遺構

#### 1) 第1面 (図11、図版1-1・1-2)

検出した遺構面は1面のみで、室町時代の門跡、溝、柱穴、土坑などを検出した。

門1 (図12、図版1-3) 調査区中央部で検出した南北方向の溝状の柱穴2基 (柱穴98・39) である。方位は北でやや東に振れる。柱穴98は長さ1.7m、幅0.5m、深さ0.3m、柱穴39は長さ1.3m、幅0.5m、深さ0.2mである。ともに地山を掘り込んで、左右それぞれ3石の礎石が据えられている。布掘柱列とよばれるもので、真中の礎石が親柱で、前後が控柱の礎石となる。左右の柱間が1.5mと狭く、棟門と考えられる。六波羅蜜寺の北側にあたり、現存する室町時代の六波羅蜜寺本堂軒の西端の北延長上に位置する。門の両端には東西方向の築地堀が取り付いていたと考えられる。

溝99 門1の南東で検出した東西方向の溝で、長さ10.0m以上、幅1.0m、深さ0.2mである。東端はY=-20,715付近で途切れ、西端は南に曲がる場所で土坑に攪乱される。溝は門1の手前で南に曲がり調査区外に延びると考えられる。埋土は黒褐色砂泥で、室町時代後期の遺物が出土した。

溝133 調査区南西部で検出した東西方向の溝で、長さ10.0m以上、幅1.8m、深さ0.1～0.2mである。東端は門1付近で攪乱を受け、途中も攪乱で途切れ、西端は西区の溝134につながる。埋土はオリーブ褐色砂泥で、室町時代の遺物が出土した。

柱穴列1 (図13) 門1の南で検出した東西方向の柱穴列で、柱穴が5基 (柱穴73・45・41・104・28) 並ぶ。うち4基には礎石が据えられている。柱穴列は長さ4.0mで、方位は東で南に振る。柱穴は直径0.5～0.6m、深さ0.2

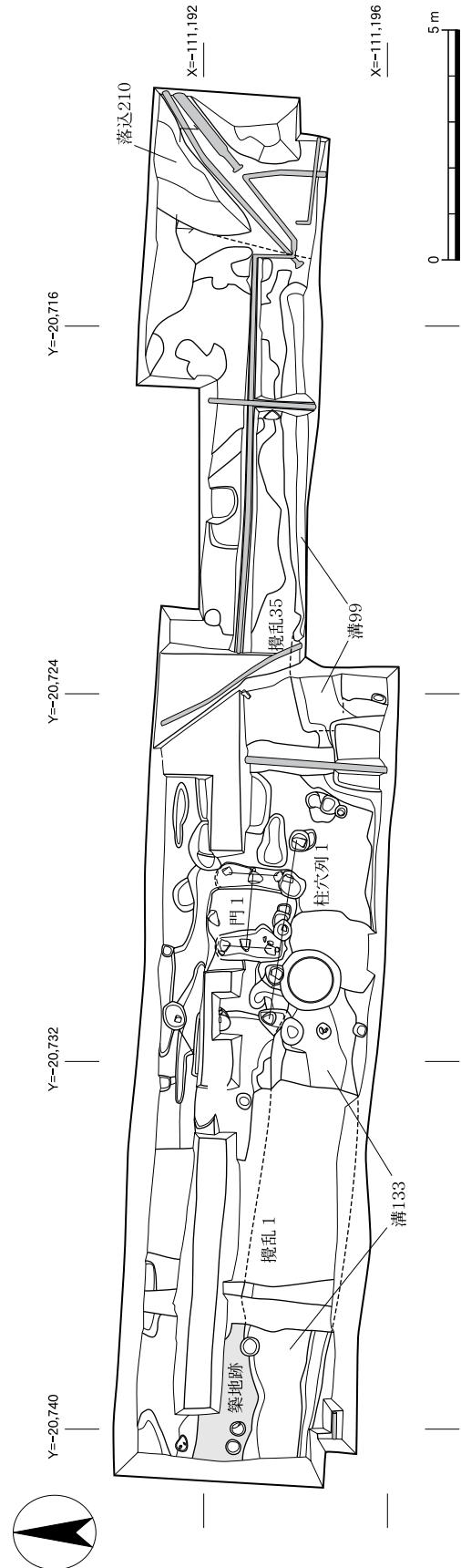


図11 東区第1面遺構平面図 [室町時代] (1 :

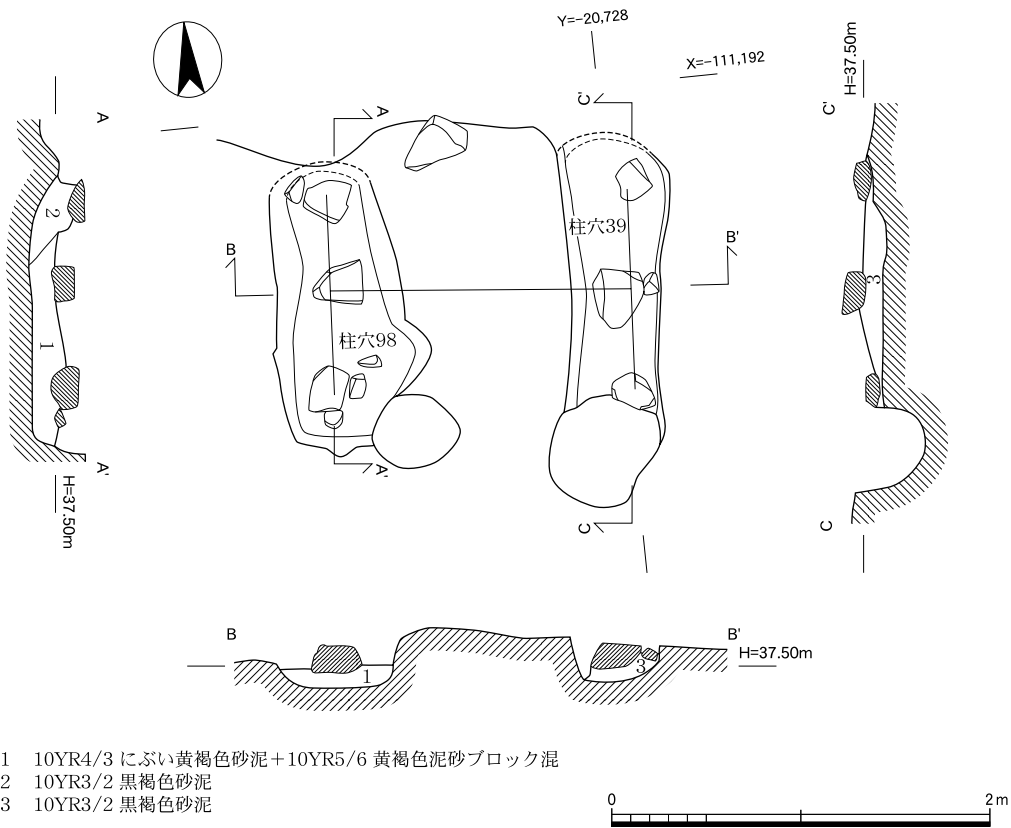


図 12 門1実測図 (1:40)

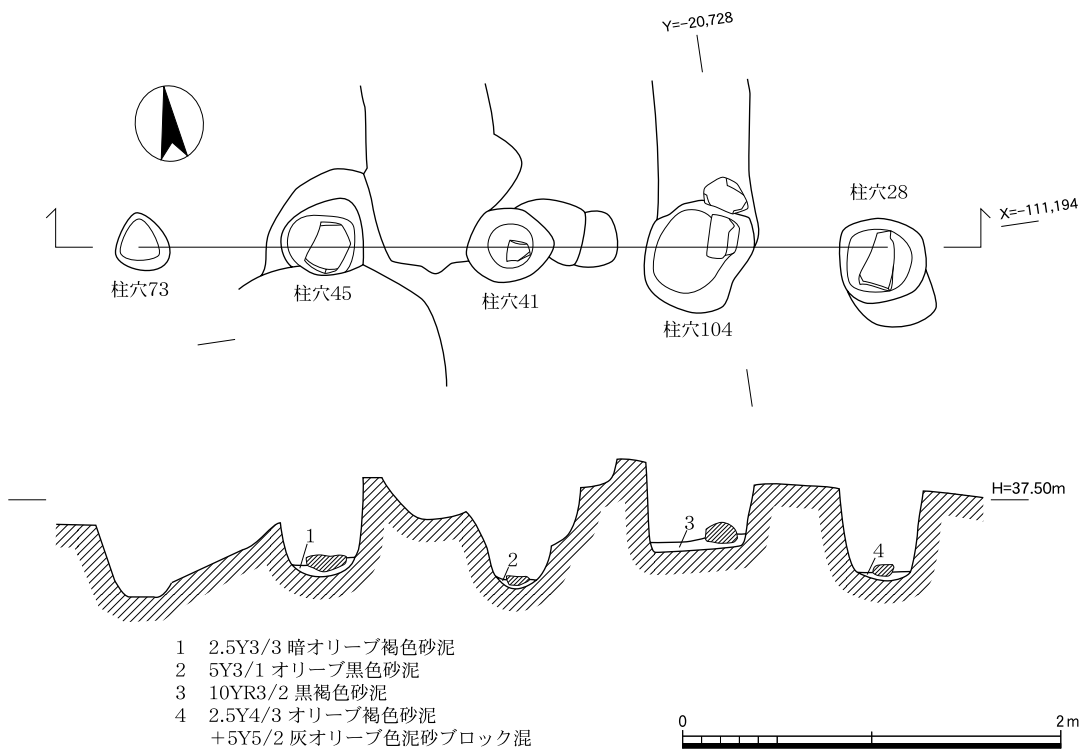


図 13 柱穴列1実測図 (1:40)

～0.5 mである。柱間は約1.0 mとほぼ等間隔である。成立面から時期は門1よりやや古い。周囲に並ぶ柱筋がないことから、門に関連する遺構と考える。

落込 210 (図 14) 調査区東端で検出した落込遺構である。埋設管部分を除き、一部を掘り下げ調査を行ったところ、東に深くなる湿地状の遺構と判明した。北は攪乱され、東は調査区外に延びる。埋土は上層が黒褐色砂泥、下層は灰黄褐色砂泥～シルトである。埋土から室町時代の遺物が出土した。また、土壌分析で昆虫遺体の一部とスベリヒユの種子が極少量出土した。

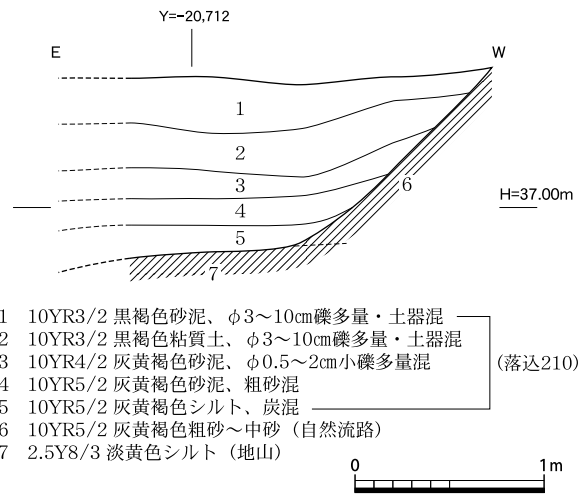


図 14 落込 210 断面図 (1 : 40)

#### (4) 西区の遺構

##### 1) 第1面の遺構 (図 15、図版 2-1)

窯、土坑、柱穴などを検出した。

窯 100 (図版 2-2) 調査区北端で検出した近代の窯である。天井部は削平されていたが、下部・焚き口・煙道部は良好に遺存していた。焚き口には花崗岩が2石据えられ、上に川原石をのせる。内部に多量の煤が付着することから、焼成温度は低いものと考えられ、陶磁器を焼いた窯ではないことが判明したが、用途は不明である。

土坑 114・120・124 (図 16、図版 2-3) 調査区中央部以東で検出した土坑群である。土坑 114 は東西 1.2 m 以上、南北 1.3 m、深さ 0.2 m で、東は調査区外に延びる。底には部分的に灰黄色の粘土を貼り付ける。埋土から瓦器羽釜が出土した。羽釜は蔵骨器に転用したもので、中から焼骨の小片と焼けた大麦1粒が出土した。土坑 120 は東西 1.0 m、南北 0.9 m、深さ 0.1 m で、平面形は方形である。灰黄色の粘土を貼り付けた上に拳大の礫などを敷き詰める。土坑 124 は東西 0.6 m、南北 0.9 m、深さ 0.1 m で、小礫が多く混じった土を叩き締めた上に石が3石のる。土坑 120・124 には蔵骨器はないものの、上部に五輪塔や墓石を据えた墓の可能性はある。

礎石列 東壁沿いで検出した柱列で、南北2間(約2.8m)ある。柱穴 115・柱穴 117・柱穴 118 と並ぶ。埋土は黒褐色～暗灰黄色砂泥で、底部に大きさ 0.25～0.3m の石を据える。柱穴 118 の礎石は五輪塔の一部(地輪)を転用している。柱穴は調査区外の東に広がり、建物となる可能性がある。

##### 2) 第2面の遺構 (図 17、図版 3-1)

建物、柵、溝、堀、柱穴、土坑などを検出した。とくに調査区東側では多数の柱穴がある。

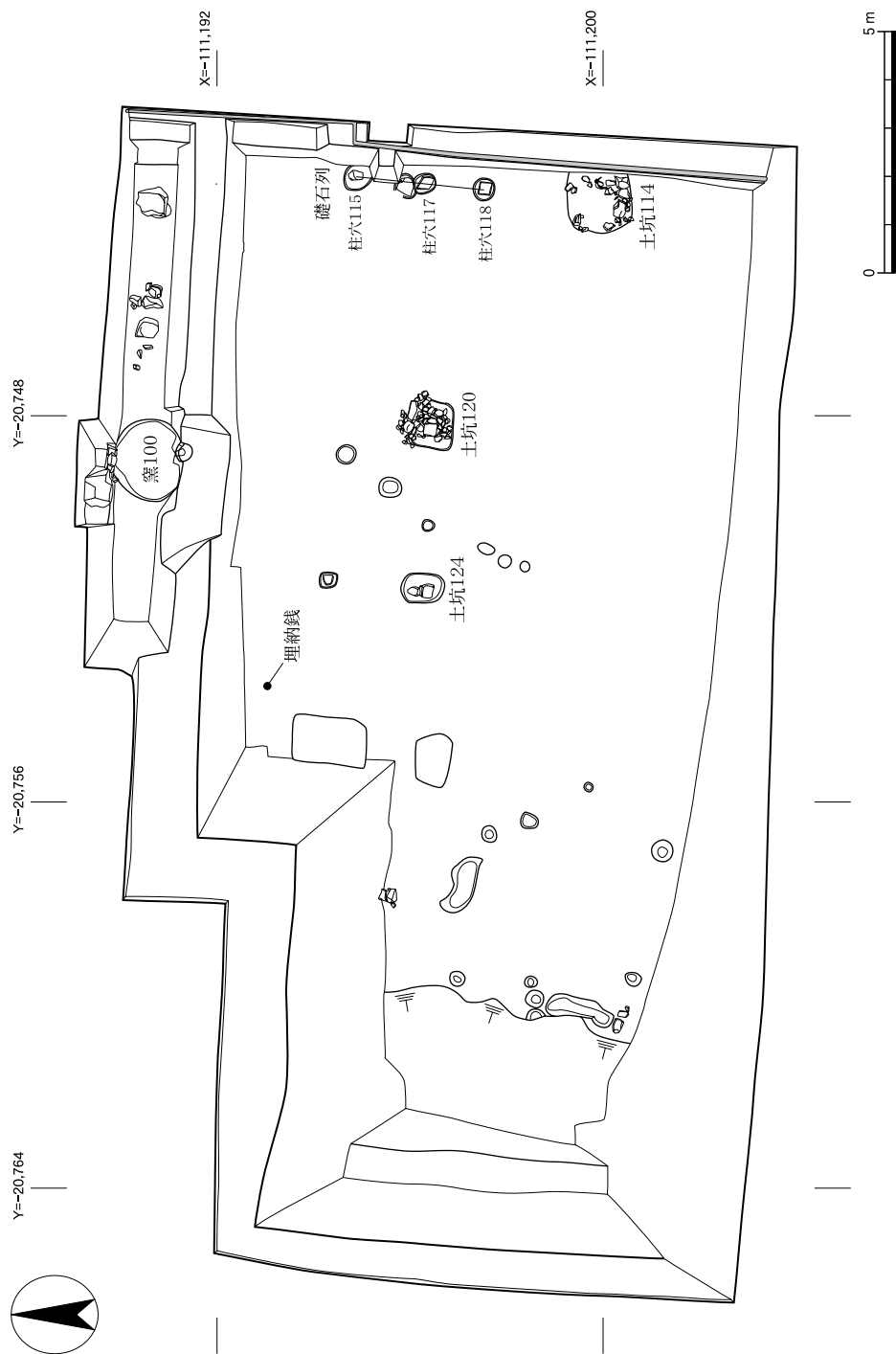


図 15 西区第 1 面遺構平面図 [室町時代から近代] (1 : 150)



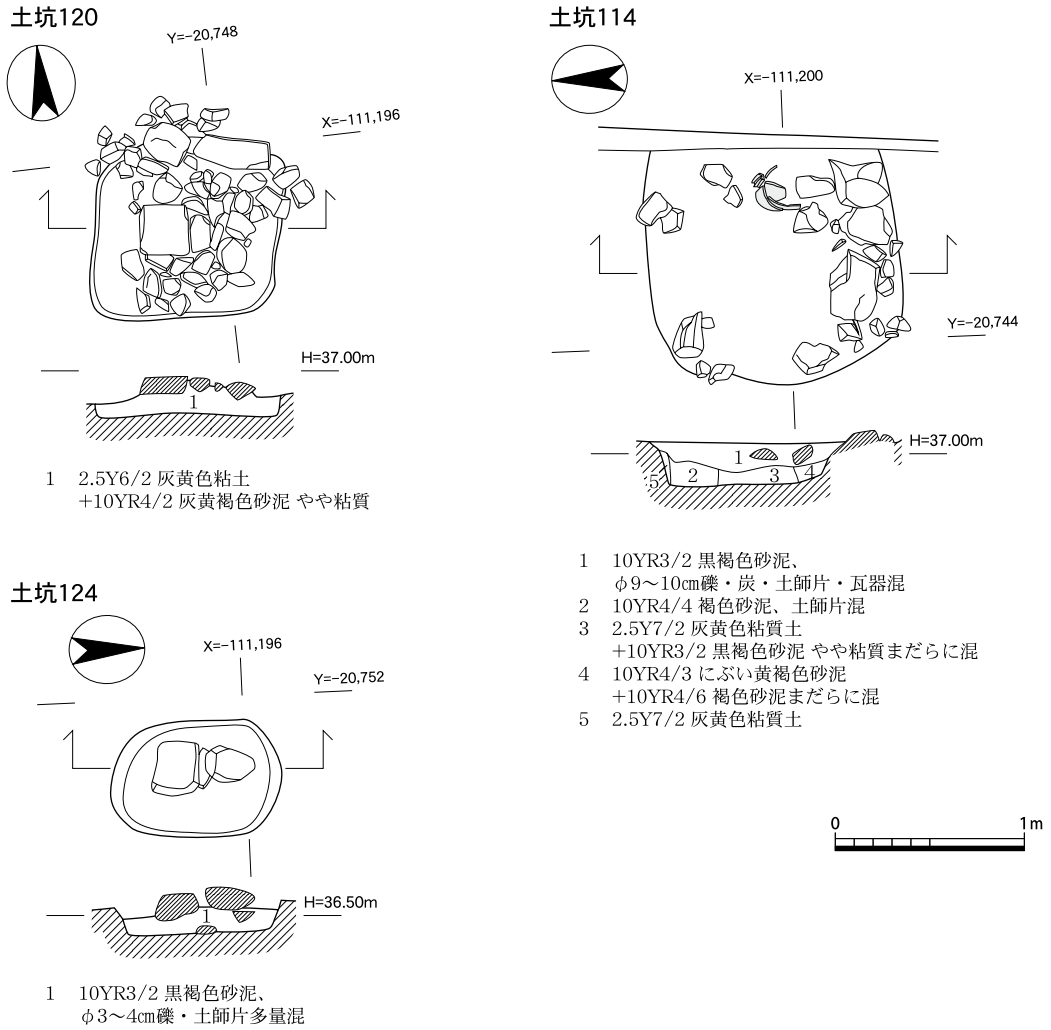


図16 土坑114・120・124実測図(1:40)

建物1(図18) 調査区東側で検出した。東西2間×南北2間の長方形の南北棟に復元できる。復元長は東西約1.8m、南北約4.8mで、方位は北で東に振れる。柱穴は直径0.4~0.7m、深さ0.1~1.0mで、礎石を据えるものもある。東辺の柱筋は布掘柱列187で、長さ5.0m・幅0.8m・深さ0.6~0.9mの溝状の土坑を掘り、底部に礎石を3石据える。柱間は北から2.8m、1.9mである。中央の柱筋は3間で、柱間は北から1.5m、2.0m、1.3mである。埋土は暗褐色砂泥を主体とする地山土混じりで、室町時代の遺物が出土した。西辺の柱筋は中央が土坑となり、柱穴の存在は不明である。北辺・南辺の柱間は約0.9mの等間隔である。物見櫓のような建物が想定できる。

門2・柵1(図19) 建物1の北隣りで検出した南北方向の柱穴列で、方位は北で東に振れる。建物1に連なる門と柵が推定できる。柱穴は6基(柱穴163・277・341・342・276・180)で、長さは4.7m以上で、北は調査区外に延長する。柱穴180・276は、直径約0.9m・0.8m、深さ0.7m・0.5mあり、底部に礎石を据える。柱間は約1.6mである。規模の大きさから建物に取り付く脇門と考えられる。さらに北に並ぶ柱穴は直径0.4~0.6m、深さ0.2~0.3mである。

柵2(図20) 柵1と平行する柱穴列である。柵1から約1.0m東側に位置する。柱穴は11基(柱穴348・168・278・351・352・353・356・182・183・357・359)で、長さは約5.4mで、

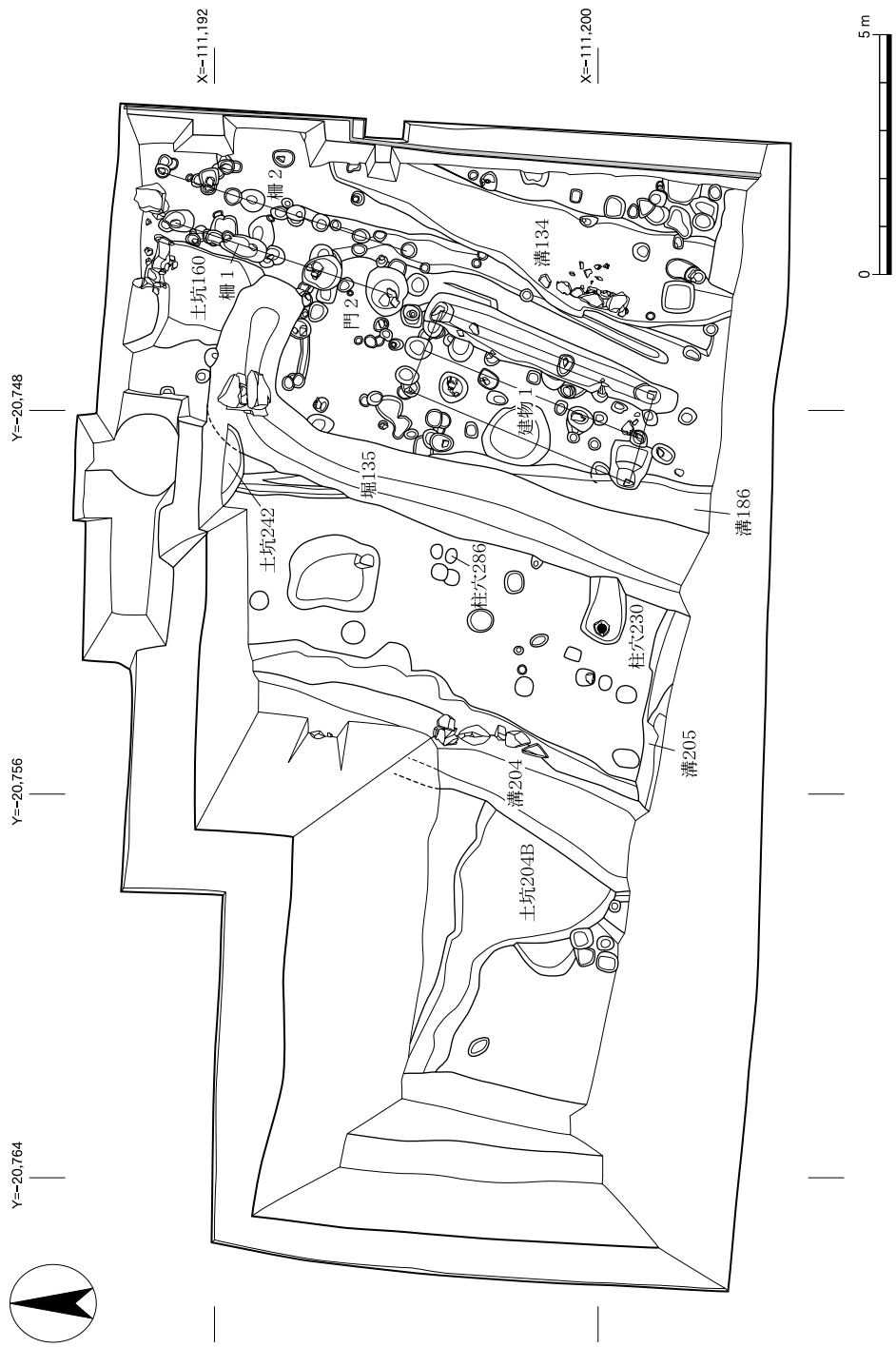


図 17 西区第2面遺構平面図 [室町時代] (1 : 150)

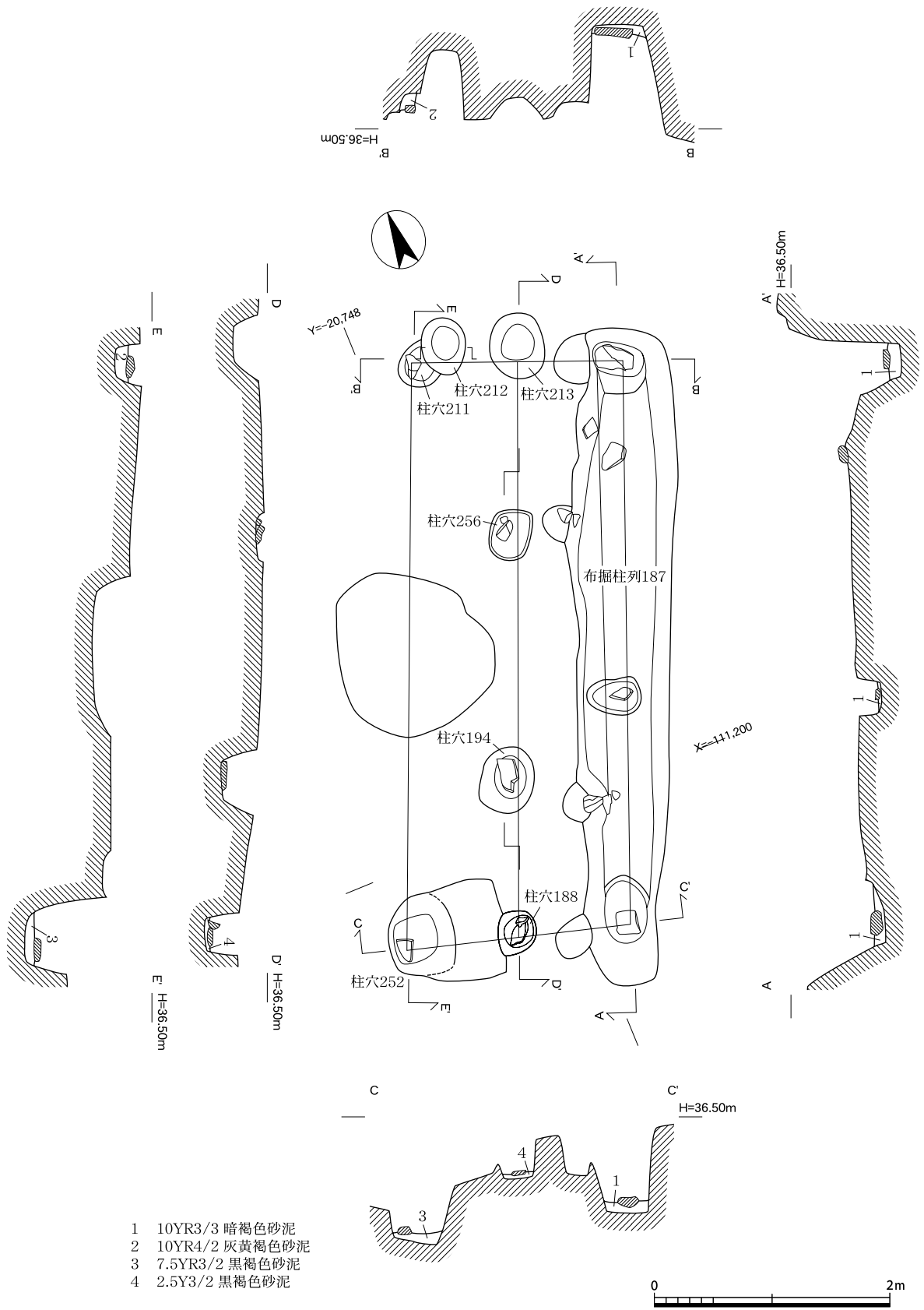


图 18 建物 1 实测图 (1 : 50)

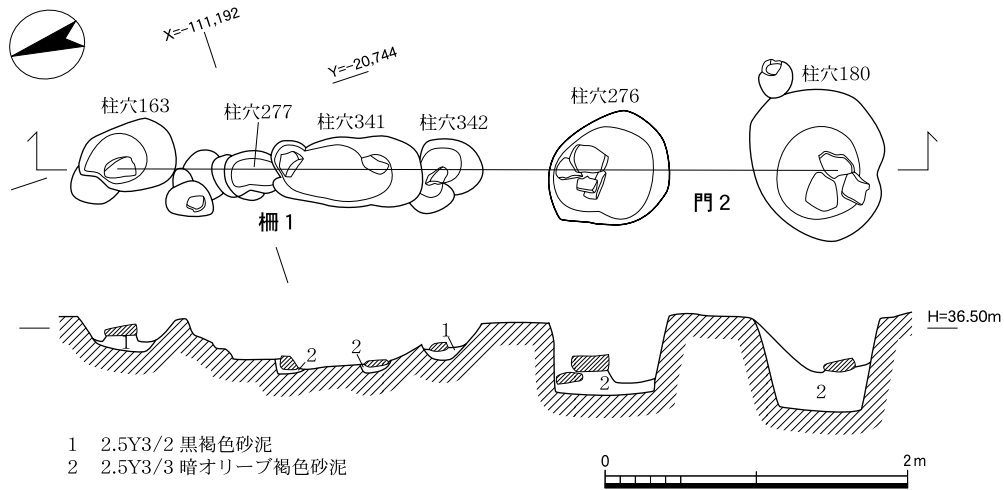


図 19 門 2・柵 1 実測図 (1 : 50)

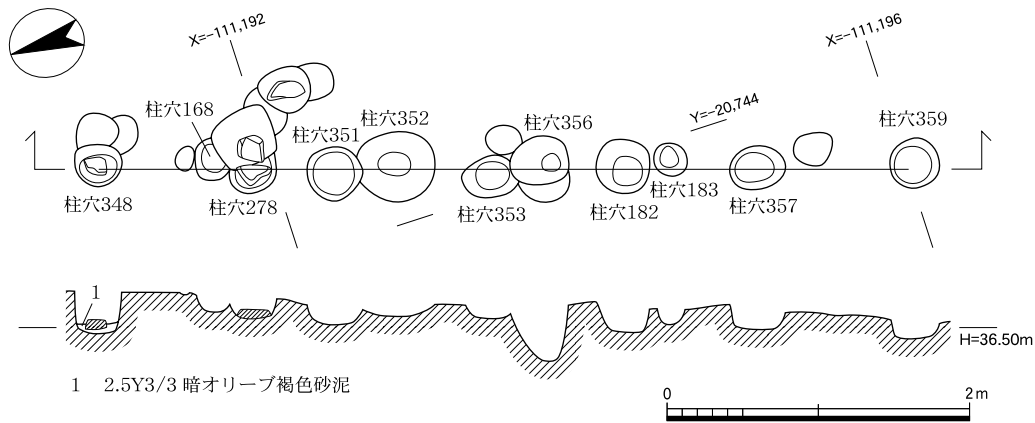


図 20 柵 2 実測図 (1 : 50)

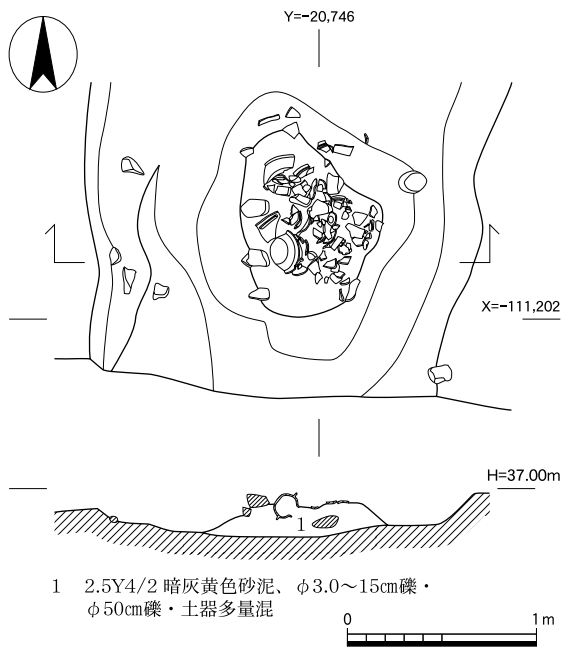
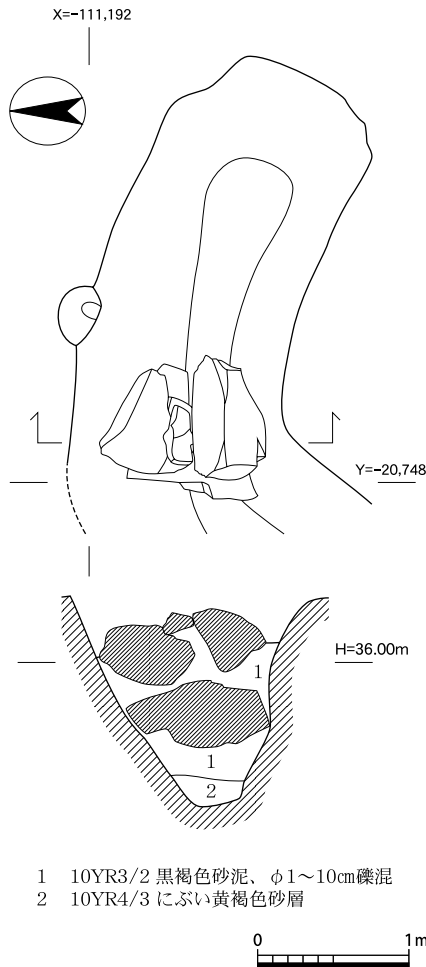


図 21 溝 134 土器出土状況実測図 (1 : 40)

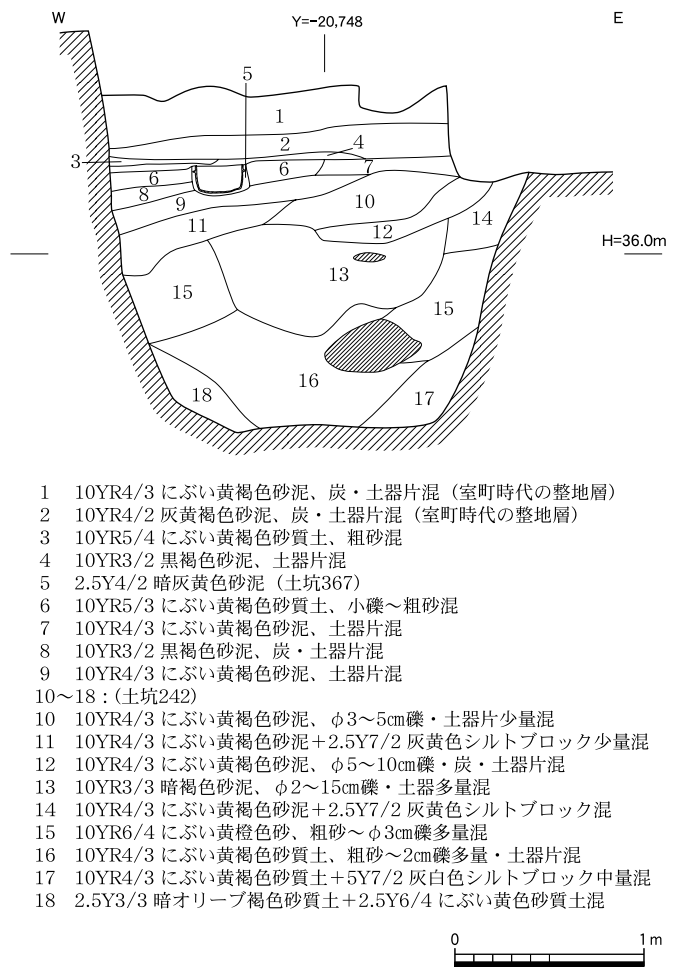
北は調査区外に延長する。柱穴は直径 0.4 ~ 0.5 m、深さは 0.2 ~ 0.4 m である。

溝 134 (図 21、図版 3-2) 調査区東側、建物 1 の東で検出した南北方向の溝で、方位は北で東に振れる。南は調査区外に延び、北は東に曲がり溝 133 につながる。X=-111,200 付近で西に膨らみ、西肩に大きさ 0.3 ~ 0.5 m の石を 6 石据える。溝の蛇行を止めるための石と考えられる。長さ 8.0 m 以上、幅約 2.0 m、深さ 0.1 ~ 0.3 m である。埋土から室町時代の多量の瓦器鍋・釜が土師器皿とともに出土した。

堀 135 (図 22、図版 3-3・5-2) 調査区中央東寄りで検出した南北方向の堀で、方位は北で東に振れる。建物 1 の西に位置し、南は調



- 1 10YR3/2 黒褐色砂泥、φ1~10cm礫混
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂層



- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、炭・土器片混（室町時代の整地層）
- 2 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、炭・土器片混（室町時代の整地層）
- 3 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土、粗砂混
- 4 10YR3/2 黒褐色砂泥、土器片混
- 5 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥（土坑367）
- 6 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土、小礫~粗砂混
- 7 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、土器片混
- 8 10YR3/2 黒褐色砂泥、炭・土器片混
- 9 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、土器片混
- 10~18：（土坑242）
- 10 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、φ3~5cm礫・土器片少量混
- 11 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥+2.5Y7/2 灰黄色シルトブロック少量混
- 12 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、φ5~10cm礫・炭・土器片混
- 13 10YR3/3 暗褐色砂泥、φ2~15cm礫・土器多量混
- 14 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥+2.5Y7/2 灰黄色シルトブロック混
- 15 10YR6/4 にぶい黄褐色砂、粗砂~φ3cm礫多量混
- 16 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土、粗砂~2cm礫多量・土器片混
- 17 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土+5Y7/2 灰白色シルトブロック中量混
- 18 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質土+2.5Y6/4 にぶい黄色砂質土混

図22 堀 135 石積み状況実測図（1：

図23 土坑 242・367 断面図（1：40）

査区外に延び、北端は東に曲がって終わる。長さ 13.5 m 以上、幅 1.0 ~ 1.4 m、深さ 1.3 ~ 1.5 m である。断面形は V 字の「葉研堀」とよばれる堀で、防御用に作られた。堀は東に曲がる場所で大きき 0.5 ~ 1.0 m の石を 3 石、西に面をそろえて据えて、背面を埋め、堀を留める。埋土から室町時代後期の土器が出土した。

溝 204 (図版 4-1) 調査区中央西寄りで検出した南北方向の溝である。方位は北で東に振れる。南北とも調査区外に延長する。長さ 8.4 m 以上、幅 1.9 ~ 2.1 m、深さ 0.2 ~ 0.7 m である。東肩は 2 段落ちになり、中央あたりに大きき 0.3 ~ 0.7 m の石を 6 石据える。据えられているのはこの部分だけである。西肩は東肩より 0.2 m ほど低く、特に土坑 240B と接する部分は 0.7 m も低くなり、溝が決壊したものか排水のために低くしたものかは不明である。埋土から室町時代後期の遺物が出土した。

土坑 240B 溝 204 に接する土坑で、東西方向の溝状遺構である。長さ 5.1 m 以上、幅は東が約 3.0 m、西は 0.4 m で西に狭くなる。排水のための土坑と考えられる。埋土から室町時代の遺物が出土した。

柱穴 230 調査区中央南側で検出した。縦 1.5 m、横 0.8 m、深さ 0.4 m 以上で、底部から茶白を転用した礎石が出土した。

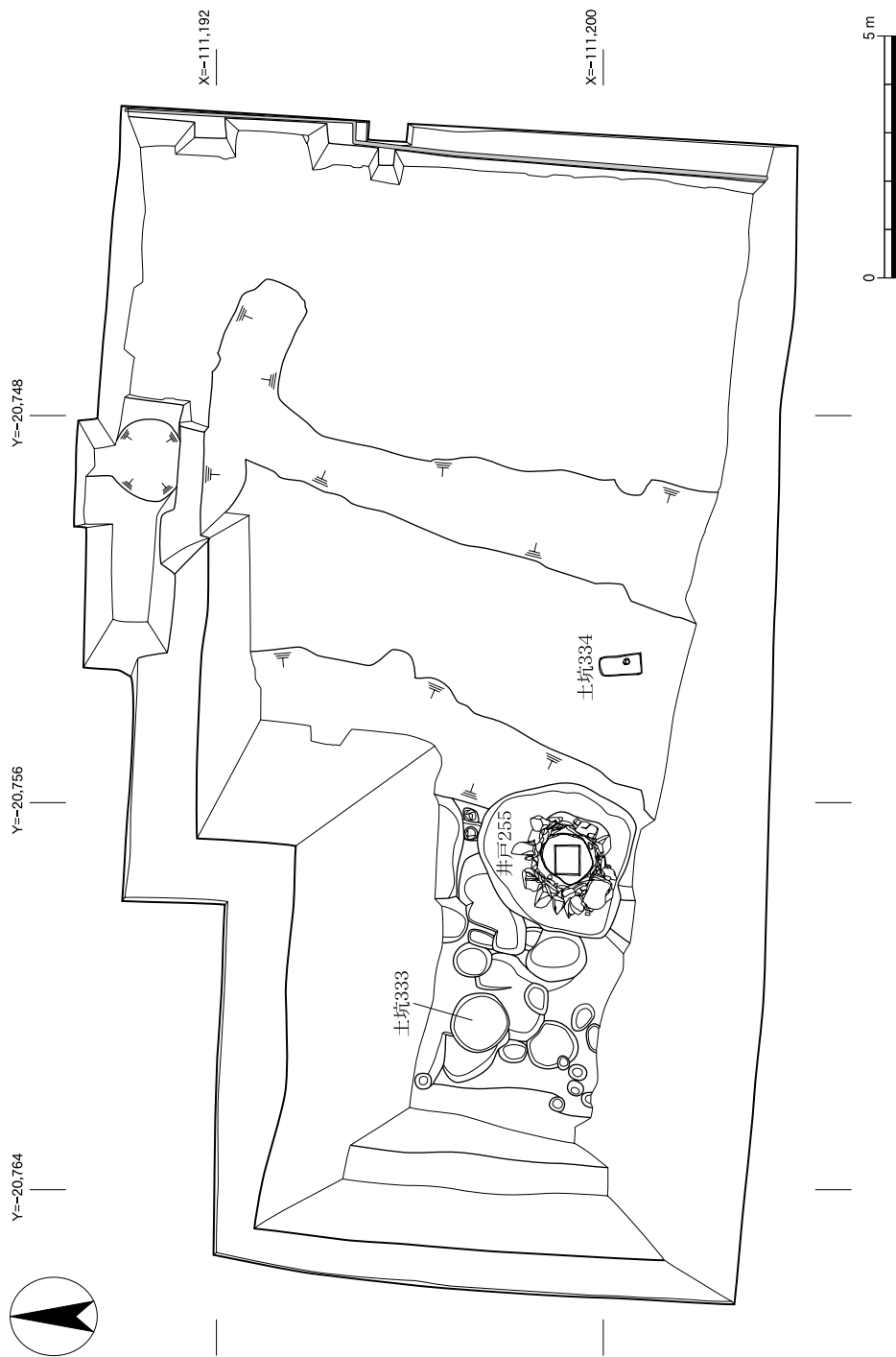


図 24 西区第3面遺構平面図 [平安時代から鎌倉時代] (1 : 150)

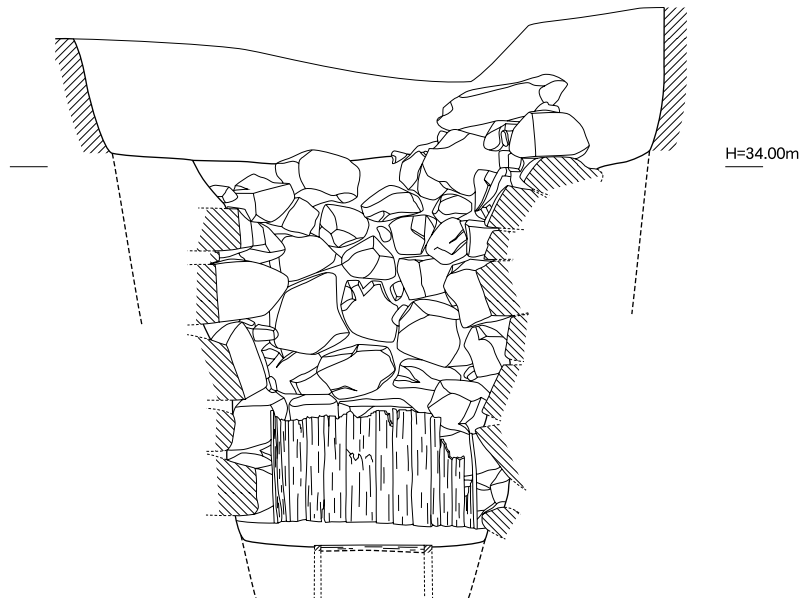
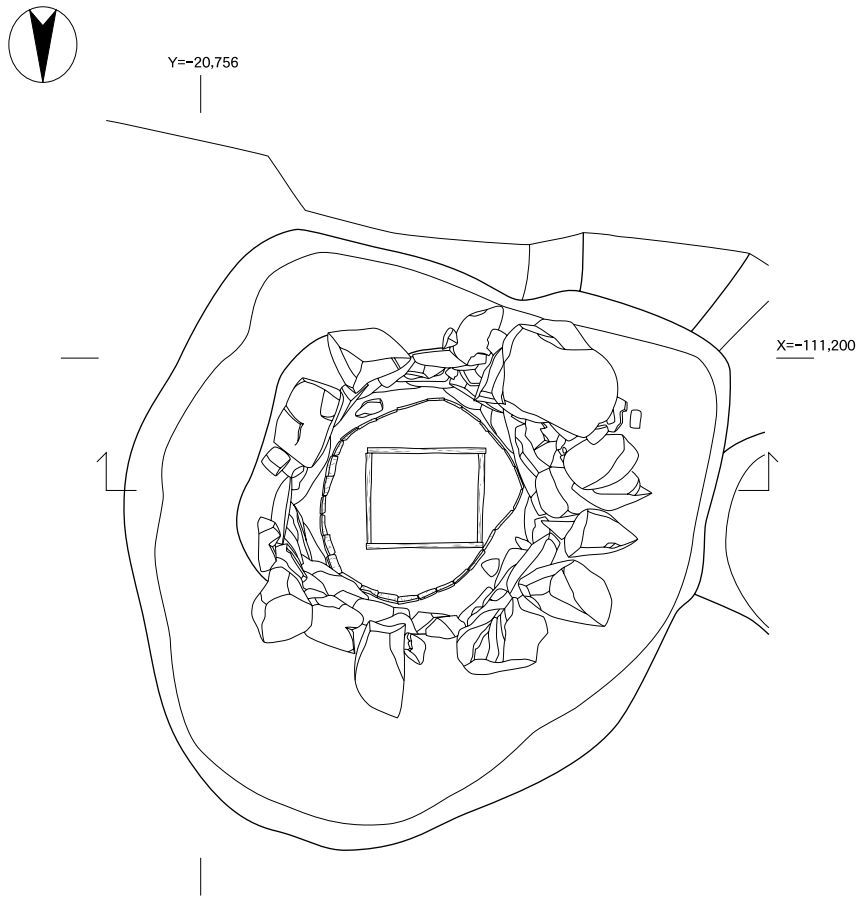


図 25 井戸 255 実測図 (1 : 40)

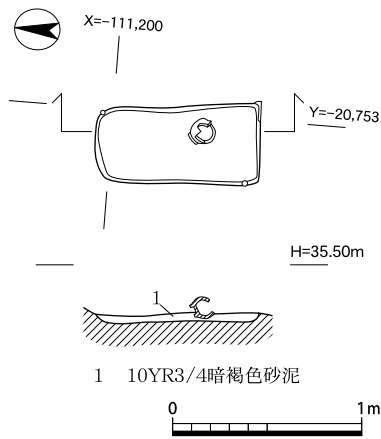


図 26 土坑 334 実測図 (1 : 40)

埋納銭 (図版 4- 3) 調査区中央の北端で検出した。掘形はなく直接土に埋められており、藁紐を通した縹銭が 5 束出土した。

土坑 242・367 (図 23、図版 4- 2) 堀 135 の北端を拡張した際に検出した土坑である。土坑 242 は堀 135 に削平されており、検出面の平面形は半円形で、北に広がるほぼ円形の土坑である。井戸の可能性が考えられる。土坑 367 は壁断面で検出した。土坑 242 を埋めた後の整地層内で検出した。瓦器の羽釜を埋めたもので、内部に骨などは見受けられなかったが、蔵骨器として埋納された可能性がある。

### 3) 第 3 面の遺構 (図 24、図版 4- 4)

平安時代から鎌倉時代の遺構には、井戸、土坑、柱穴などがある。これらの遺構は調査区の中央以西で検出した。

井戸 255 (図 25、図版 5- 1) 調査区西側で検出した石組の井戸である。掘形の平面形は東西 3.1 m、南北 3.2 m のほぼ円形で、深さは検出面から 2.6 m である。石組の内側に縦板を円形に巡らしている。縦板は側面に臍穴を開け、竹を差し込んで繋ぐ。縦板の下面で方形の木組を検出した。湧水のため完掘できなかったが、木組は水溜に据えたものと考えられる。石組は 0.3 ~ 0.5 m の石材をほぼ垂直に組み上げる。上部の石は大きさが 0.5 ~ 0.7 m と大きい。北東部の石組は欠落する。欠落した石は溝 204 の東肩に転用して据えられたものである。埋土はにぶい黄褐色砂泥・暗灰黄色粘土で鎌倉時代の遺物が出土した。

土坑 334 (図 26) 調査区中央南側で検出した。平面形は長方形で、東西約 0.4 m、南北約 0.9 m、深さ 0.04 m で、鉄釘が数本出土した。錆の表面に木目がつくことから、板に打ち付けた釘と考えられる。埋土からは平安時代前期の灰釉陶器壺が出土した。このような状況から、木棺が埋葬されていたことが想定される。埋土には木の痕跡はなく、壺の中にも有機物や遺物は見受けられなかった。

土坑 333 調査区西側で検出した。直径 1.2 m、深さ約 0.8 m で、平面形は円形である。曲物などは出土していないが、井戸の可能性はある。埋土はにぶい黄褐色砂泥に小礫が混じり、平安時代中期の遺物が出土した。

### 4) 第 4 面の遺構 (図 27、図版 4- 4)

流路 335 (図版 5- 2) 調査区の中央で検出した南北方向の自然流路である。長さ 9.5 m 以上、幅約 5.6 m、深さ 1.3 m 以上で、南北は調査区外に延びる。埋土は褐色砂泥～粘土を主体とする土層で、弥生時代から奈良時代の土器が出土した。



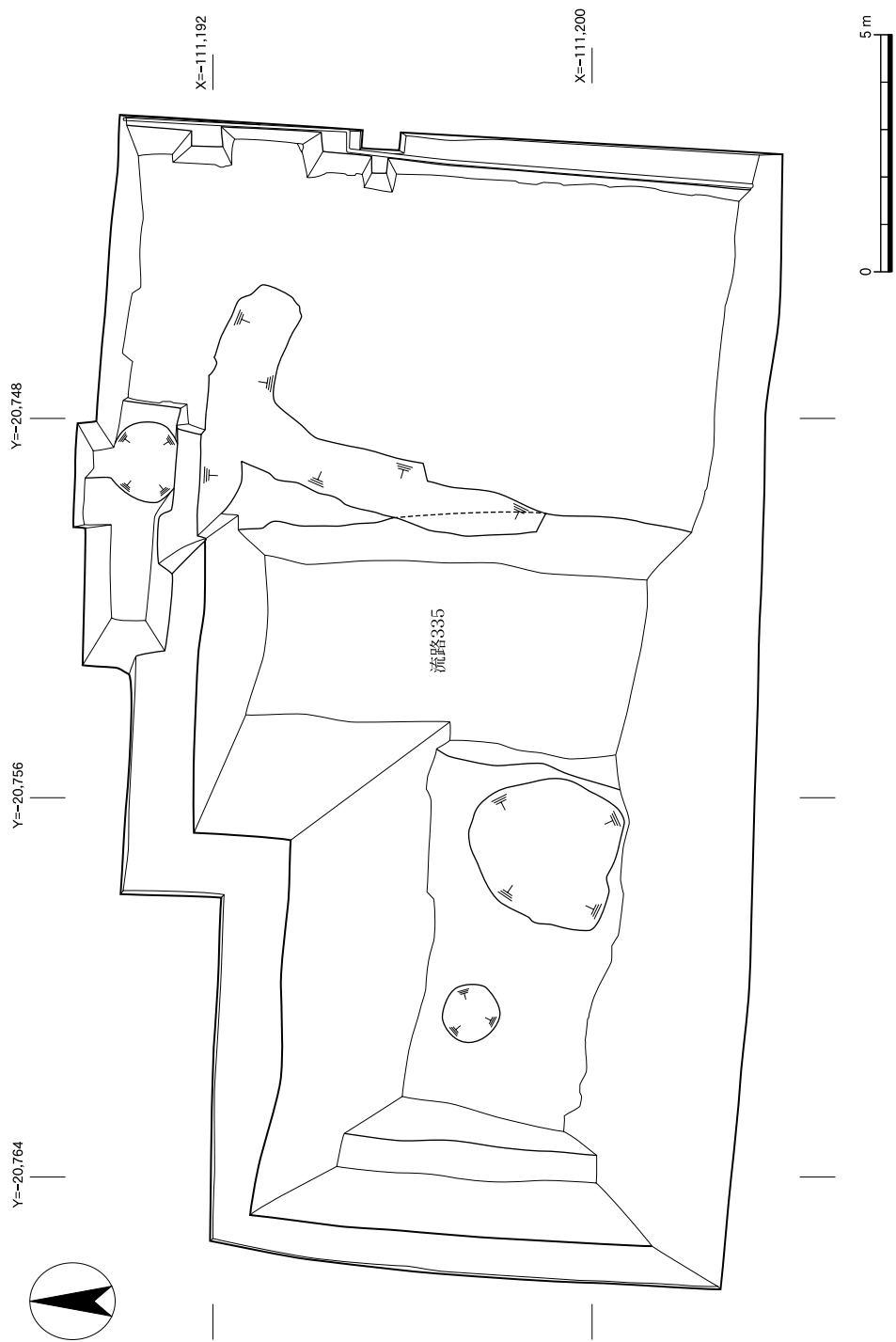


図 27 西区第 4 面遺構平面図 [弥生時代から奈良時代] (1 : 150)

## 4. 遺 物

### (1) 遺物の概要

弥生時代から江戸時代に至る遺物が整理箱にして140箱出土した。内容は土器類、瓦類、金属製品、石製品、木製品などがある。その大半は土器類で、次いで瓦類が多い。全体的には室町時代の土器類が大半を占める。次いで鎌倉時代の土器類が多く、平安時代、古墳時代、弥生時代の遺物は少ない。

弥生時代から古墳時代の遺物には、弥生土器、土師器、須恵器、円筒埴輪などがある。平安時代の遺物には、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入磁器、瓦類、金属製品などがある。古墳時代や平安時代の遺物は遺構に伴うものの他に、新しい時代の遺構や包含層に混入して出土したものが多い。特に室町時代の整地層から多くの土器類が混入として出土した。鎌倉時代や室町時代の遺物には、土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦器、輸入磁器、国産陶器、金属製品、石製品、木製品などがある。桃山時代から江戸時代の遺物には、土師器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、瓦類、金属製品、石製品などがある。

### (2) 土器類

土器類は出土遺物の多くを占める。ここでは弥生時代から桃山時代の土器を報告する。時代別の出土量では、弥生時代から平安時代の土器類は少量で、鎌倉時代の土器が約15%、室町時代が

表2 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代 ～奈良時代	弥生土器、土師器、須恵器、円筒埴輪		弥生土器14点、土師器2点、須恵器3点、円筒埴輪2点		
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、白色土器、瓦、金属製品		土師器12点、須恵器1点、緑釉陶器3点、灰釉陶器6点、白色土器2点、瓦19点、金属製品11点		
鎌倉時代	土師器、白色土器、須恵器、灰釉陶器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦、石製品、木製品		土師器7点、白色土器2点、須恵器4点、灰釉陶器7点、瓦器9点、焼締陶器1点、輸入陶磁器11点、瓦3点、石製品3点、木製品19点		
室町時代	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、金属製品、銭貨、石製品、土製品		土師器71点、瓦器29点、焼締陶器4点、施釉陶器25点、輸入陶磁器34点、瓦12点、金属製品10点、銭貨29点、石製品29点、土製品4点		
桃山時代 ～江戸時代	土師器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、瓦、金属製品、銭貨、石製品		施釉陶器1点、石製品1点		
合 計		154箱	390点 (14箱)	131箱	9箱

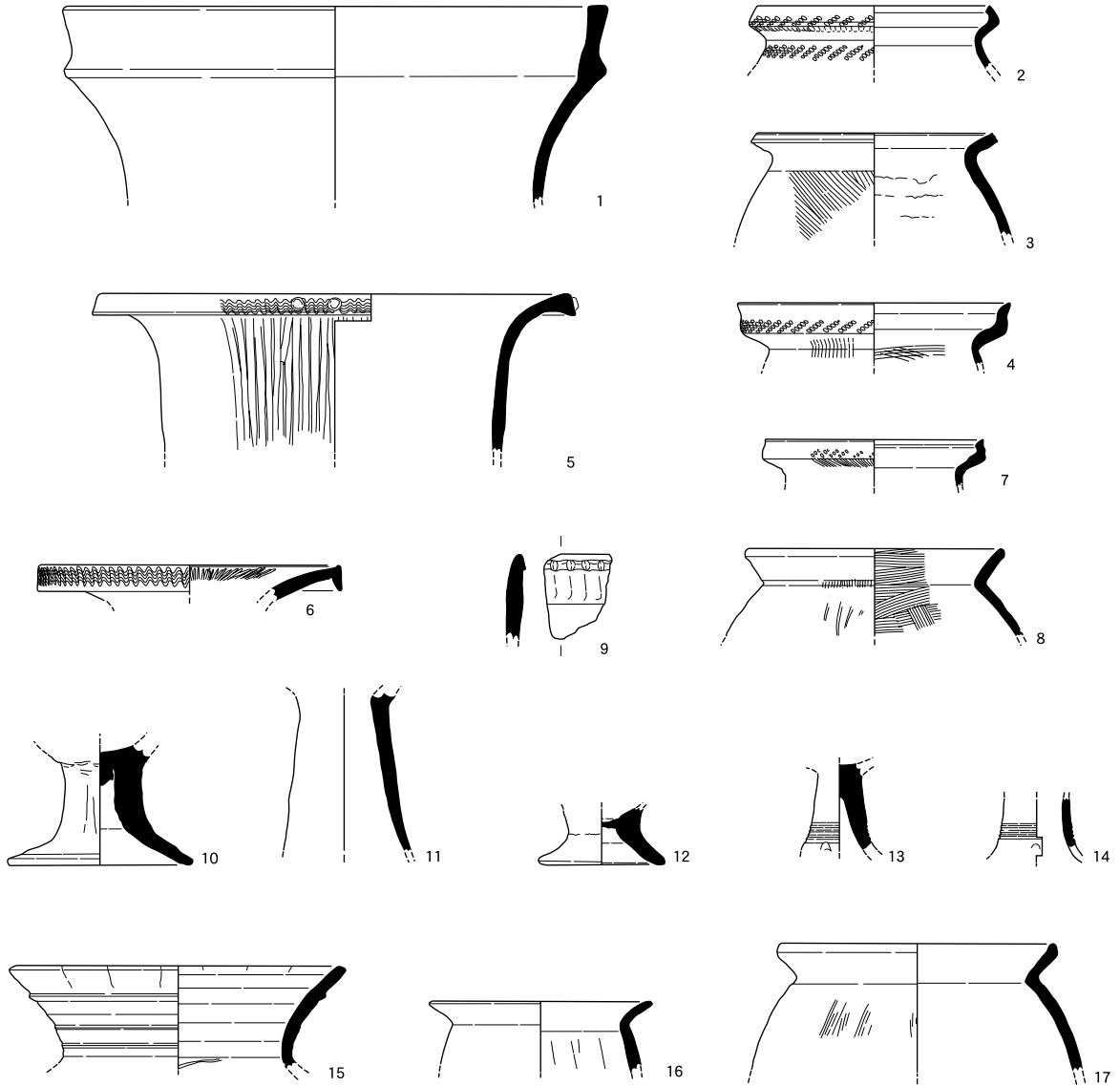
※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より14箱多くなっている。

約 80% を占める。

1) 弥生時代から奈良時代 (図 28、図版 6)

流路 335 からは弥生時代から奈良時代の土器が出土した。その他に室町時代の遺構などから混入として出土したものがある。弥生時代の土器はすべて流路から出土した。細片を含む土器片が多くで、図示できたものは少量である。

流路 335



その他遺構

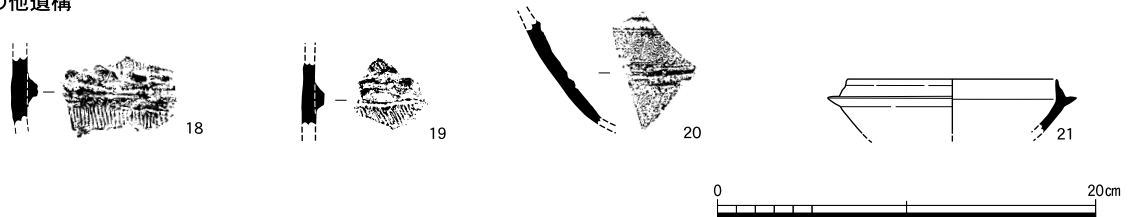


図 28 土器実測図 1 [弥生時代から奈良時代] (1 : 4)

流路 335 (図 28、図版 6) 1 は壺である。口縁部は 2 段階に外反して開き、端部は平坦におさめる。体部は欠損する。内外面は磨滅で調整は不明である。石英・チャートを多量に含み、弥生時代中期に属する。北近畿からの搬入品である。2～4・7・8 は甕である。2 は肩部から外反して屈曲する口縁部と肩部外面に列点文を配す。弥生時代中期後葉から後期初頭に属する。3 は口縁部外面はハケメのナデ、体部外面はハケメ調整を施す。弥生時代後期前葉から中葉に属する。4・7 は受け口状の口縁部外面に列点文、首から肩部に櫛描直線文を施す。4 は内面にハケメを施す。近江産で弥生時代後期中頃に属する。7 は近江系の在地産で弥生時代後期に属する。8 は口縁部は屈曲して開き、端部は丸くおさめる。口縁部外面にナデ調整、首部・体部外面に櫛描直線文、内面にハケメを施す。弥生時代後期に属する。5・6・11 は器台である。弥生時代後期に属する。5 は口縁部外端面に櫛描波状文を施し、円形浮文を貼り付ける。筒部外面にはミガキを施す。6 は口縁部外端面に櫛描波状文、上面にミガキを施す。11 は筒部で、内外面は磨滅して調整は不明である。9 は長原式の深鉢である。口縁部外端面に凸帯を巡らせ、凸帯には刻目を施す。弥生時代前期に属する。10・13・14 は高杯である。弥生時代後期に属する。10 は脚部で、磨滅するが表面にミガキの痕跡がある。13・14 は脚部で、下方に櫛描直線文と円形の透かしを入れる。12 は粗製の台付鉢である。外面にナデ調整を施す。弥生時代後期に属する。

15 は須恵器甕の口縁部である。口縁部外面下方に 1 条の凸帯を施す。古墳時代後期に属する。16・17 は土師器甕である。16 は体部から口縁部が屈曲して大きく開く。口縁部は丸くおさめる。口縁部内外面・体部外面はヨコナデ、内面はハケメを施す。古墳時代後期に属する。17 は口縁部が開いたのち、端部は内側に屈曲する。体部外面にハケメを施す。奈良時代に属する。

その他遺構 (図 28、図版 6) 18・19 は円筒埴輪である。18 は堀 135、19 は室町時代の整地層から出土した。古墳時代に属する。20 は須恵器器台である。脚部外面に 2 条の凸帯と 2 条の波状文を施す。堀 135 から出土した。古墳時代に属する。21 は須恵器杯身である。室町時代の整地層から出土した。古墳時代後期から飛鳥時代に属する。

## 2) 平安時代 (図 29、図版 6・7)

平安時代の遺物は、遺構や包含層から出土したものと、各時代の層や遺構などから混入として出土したものがある。包含層は調査区中央以北、Y=-20,750 付近に広がる黒褐色砂泥の薄い層である。土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器などがある。

土坑 334 (図 29、図版 6) 出土土器は灰釉陶器壺 (22) のみである。ロクロ成形で、底部外面は糸切り、貼付高台である。外面にハケで灰釉を施す。口縁上部は打ち欠いている。平安時代前期に属する。

土坑 333 (図 29、図版 7) 出土土器には土師器皿 (23～27)、緑釉陶器椀 (28) がある。23～26 はいわゆる「手の字状」口縁をもつ皿で、23～25 は口径 11.2～12.7 cm、高さ 1.3 cm 以上、26 は口径 16.4 cm、高さ 2.2 cm 以上ある。器壁は薄く、口縁端部は内に丸くおさめる。27 は 2 段ナデで、口縁端部は外に開く。口径 14.8 cm、高さ 2.0 cm あり、器壁は薄い。28 は椀の底部である。

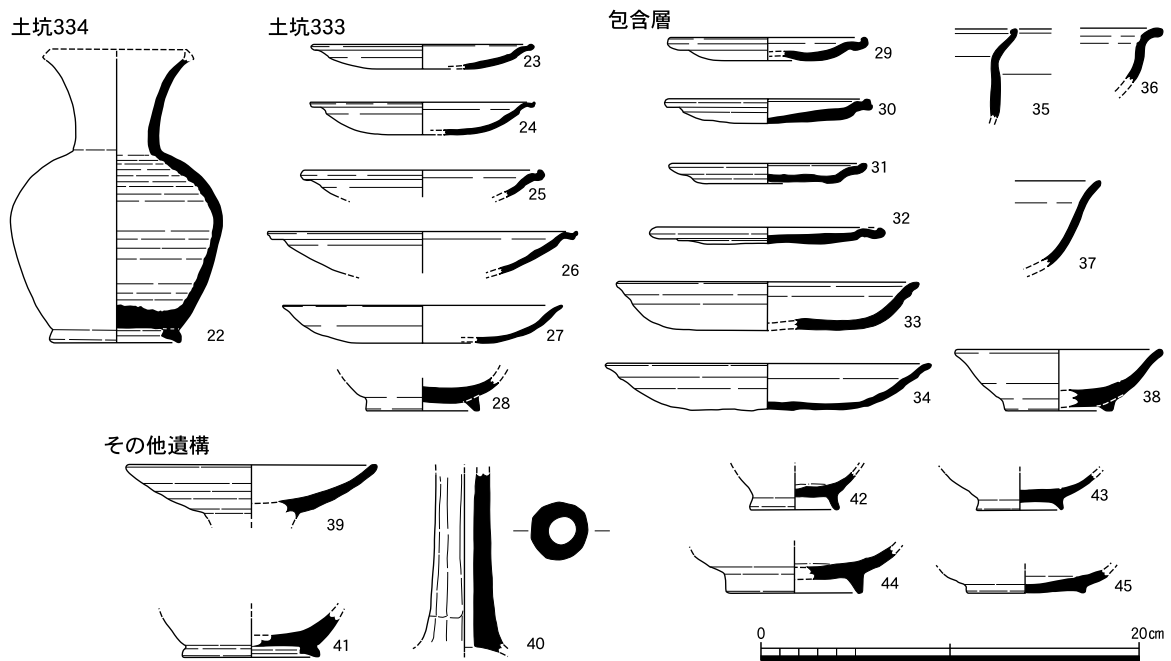


図 29 土器実測図 2 [平安時代] (1 : 4)

貼付高台で、底部・高台全面に緑釉を施す。平安時代中期に属する。

包含層 (図 29、図版 7) 出土土器には土師器皿 (29～34)・甕 (35)、緑釉陶器碗 (36)、灰釉陶器碗 (37)・皿 (38) がある。29～31 は「手の字状」口縁をもつ皿で、口径 10.2～10.6 cm、高さ約 1.2 cm である。器壁は厚くなり、口縁端部のつくりにも雑なものがある。32 はコースター型の皿で、口径 11.8 cm、高さ 0.9 cm である。33・34 は口径 15.8～17.2 cm、高さ 2.5 cm である。2 段ナデで口縁端部は外に開く。35 は甕の口縁部で、内面はナデ調整、外面は煤が付着する。36 は碗の口縁部で、内弯する体部から続く口縁部は大きく外に反り返り、端部は丸くおさめる。口縁部内面に 1 条の沈線が巡る。内外面に緑釉を施す。37 は回転ナデ調整で、体部内面上部・外面中程に釉が掛かる。38 は口径 10.6 cm、高さ 3.3 cm あり、貼付高台である。底部内面は磨滅して滑らかである。平安時代後期に属する。

その他遺構 (図 29、図版 7) 39・40 は白色土器高杯である。39 は皿部で、回転ナデを施す。40 は脚部で、芯棒に粘土を巻き付けて、外面にケズリを施す。ケズリは 12 面ある。39 は土坑 204B、40 は室町時代の整地層から出土した。いずれも平安時代後期に属する。41 は緑釉陶器壺の底部で、貼付高台である。内外全面に緑釉陶器を施す。室町時代の整地層から出土した。平安時代前期に属する。42～44 は灰釉陶器碗の底部で、いずれも貼付高台である。42・44 は内面が磨滅して滑らかである。43 は内面と高台に重ね焼き痕が付く。45 は灰釉陶器皿の底部である。貼付高台で糸切り痕がある。内面が磨滅して滑らかである。42～45 は室町時代の整地層から出土した。平安時代中期から後期に属する。

### 3) 鎌倉時代 (図 30・31、図版 7・8)

鎌倉時代の遺物は、井戸 255 から出土したものと、室町時代の層や遺構などから混入として出

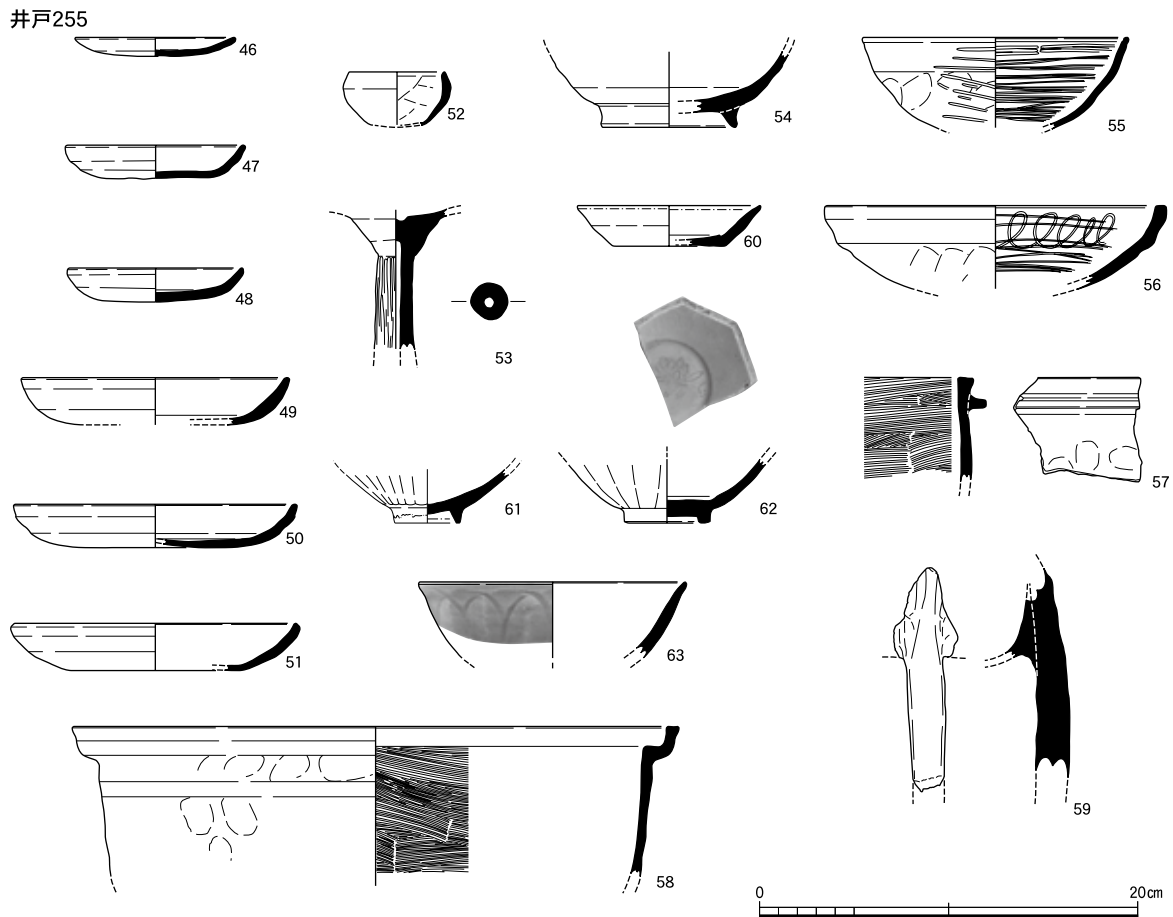


図30 土器実測図3 [鎌倉時代 井戸255] (1:4)

土したその他遺構のものがある。土師器皿は室町時代の遺構からも多く出土しているが小片である。

井戸255(図30、図版7)出土土器には土師器皿(46~51)・小壺(52)、白色土器高杯(53)、山茶椀(54)、瓦器椀(55)・鉢(56)・羽釜(57)・鍋(58)・三足釜(59)、中国産白磁皿(60)・青磁椀(61~63)などがある。土師器皿には口径8.3~9.4cm、高さ1.0~1.8cm(46~48)と、口径14.0~15.0cm、高さ約2.4cm(49~51)の2群がある。50・51は2段ナデの名残を残す。いずれも器壁は厚く、口縁端部はつまみ上げる。46は器壁も薄く時期はやや下る。52は手捏ねの小壺である。胎土は精良で焼成も良好である。53は脚部で、外面にミガキを施し、皿部を粘土で貼り付ける粗雑な作りの高杯である。54の体部は回転ナデ調整、貼付高台である。底部内面は磨滅して滑らかである。55は口径14.0cmある楠葉産の椀で、底部は欠損する。内外面にミガキを施す。56は口径17.8cmある。外面は磨滅して調整不明、内面はミガキを施す。57は小片で、口縁部外面のやや下方に罫が付く。内面はハケメ調整。58は口径32.0cmあり、口縁部はほぼ直角に屈曲し立ち上がる。内面はハケメ、外面は指のオサエ痕がつき、煤が付着する。59は脚部で、体部の下部に脚を貼り付ける。オサエの後ミガキ調整を施す。60は釉葉を施した口縁端部を削り取るいわゆる口禿皿である。61~63はいずれも外面に蓮弁文を施す。61は高台部分が露胎する。62は底部内面に蓮花の型押し文が付く。

その他遺構(図31、図版7・8) 64は白色土器高杯の脚部である。外面はオサエ後にミガキ

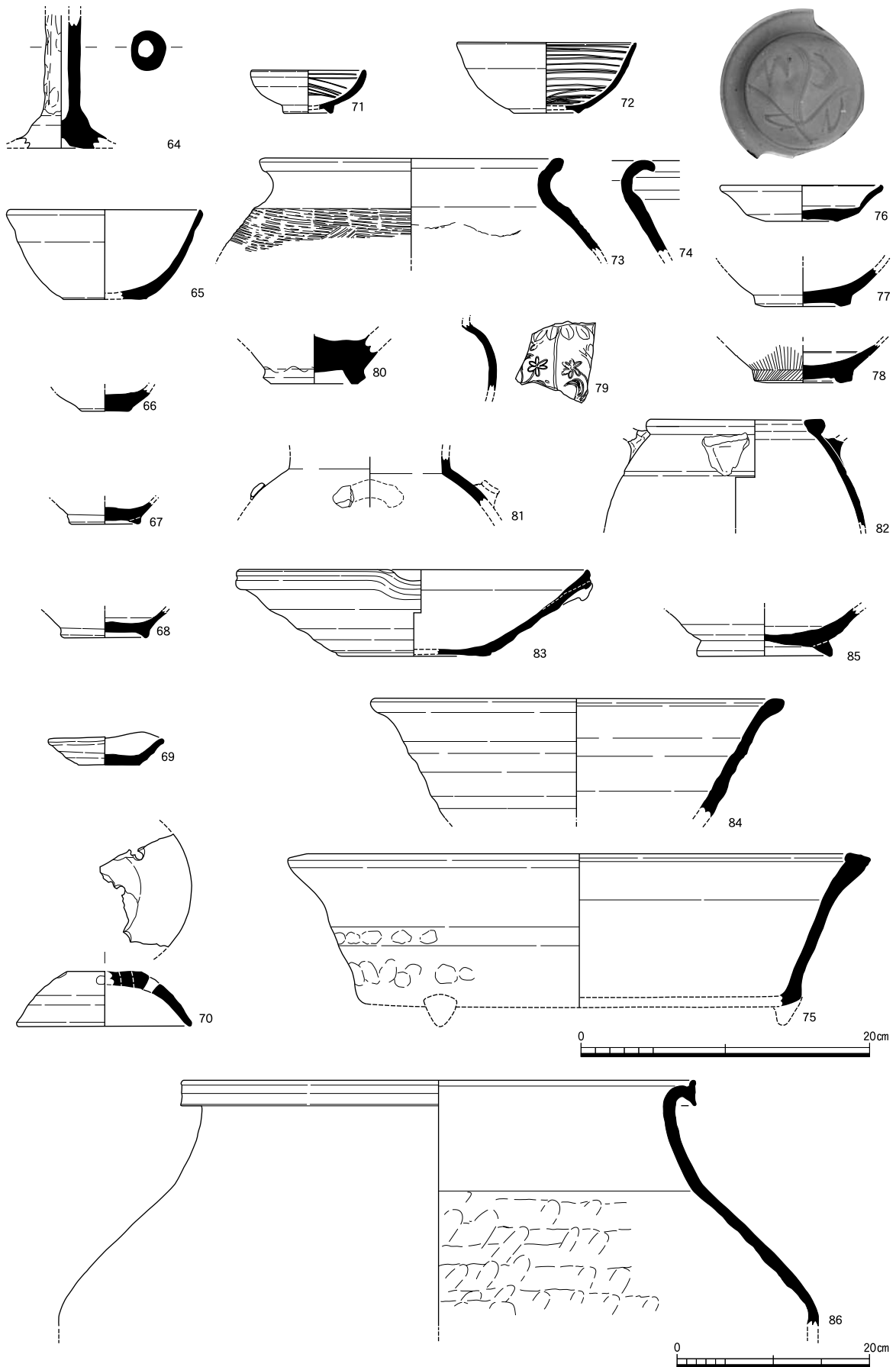


図31 土器実測図4 [鎌倉時代 その他遺構] (1:4、86のみ1:6)

調整を施す。皿部上面は褐色で火を受けた痕跡が残る。65～68は山茶椀である。65は体部下方は内弯し、口縁部はわずかに開く。底部は糸切りで未調整である。66～68はいずれも底部のみの残存である。66の底部は糸切りで未調整である。糸切り痕が付く。67・68は糸切り後、高台を貼り付ける。64～68は室町時代の整地層から出土した。69は山茶椀の皿である。口径7.8 cm、高さ2.4 cmあり、口縁部は歪む。底部は糸切りで未調整である。溝204から出土した。70は山茶椀の素地で作られた香炉蓋である。蓋の体部上方と天井部に円形の穿孔が認められる。天井部・体部外面に自然釉が付着する。室町時代の整地層から出土した。71は瓦器小椀である。外面はナデ、内面にミガキを施す。水を張り儀式などに使用されるもので、楠葉産である。室町時代の整地層から出土した。72は瓦器椀である。口径12.4 cm、高さ4.9 cmあり、外面はナデ、内面にミガキを施す。楠葉産である。71より時期は新しい。溝204から出土した。74は瓦器甕である。口縁部は大きく外反する。室町時代の整地層から出土した。75は瓦器盤である。口径37.0 cmあり、足は欠損する。室町時代の整地層から出土した。73は須恵器甕である。口縁部は大きく外反し、端部は丸くおさめる。体部外面にタタキを施す。堀135から出土した。83～85は須恵器鉢である。83は東播系軟質須恵器の鉢で、口径24.0 cm、高さ6.0 cmある。口縁部の一端を引き出し片口とする。室町時代の整地層から出土した。84・85は東海系の鉢である。84は口径28.0 cmある。85は底部で、貼付高台である。いずれも室町時代の整地層から出土した。76～82は中国産陶磁器である。76は同安窯系の白磁皿で、口径11.2 cm、高さ2.5 cmである。体部下方と底部外面にケズリを施す。底部内面に櫛書き線状文を描く。77・78は白磁椀の底部である。削出高台で、78は体部外面下方と高台にケズリ痕が飛びカンナ状に残る。底部付近の内面に沈線が入り、釉を施す。外面は露胎する。76～78は溝204から出土した。79は青白磁の水注である。体部外面に型押し蓮弁と草花文を施す。室町時代の整地層から出土した。80・81は白磁壺である。80は底部で、削出高台である。高台内は露胎する。堀135から出土した。81は肩部に耳が付く四耳壺である。溝134から出土した。82は南方系の褐釉の壺である。肩部に把手が付く。土坑204Bから出土した。86は常滑産の焼締陶器甕である。口径53.0 cmあり、口縁端部は折り返される。室町時代の整地層から出土した。

#### 4) 室町時代 (図32～37、図版8～10)

室町時代の土器は、遺構や整地層から出土した。土器の出土量は最も多く、土師器皿の他に瓦器鍋・羽釜・茶釜が多量に出土した。また、瀬戸産施釉陶器、中国産磁器の出土量も多い。

溝204 (図32、図版8) 出土土器には土師器皿 (87～90)、瓦器鉢 (91)・茶釜 (92) などがある。時期は室町時代後期に属する。87は口径9.0 cm、高さ1.6 cmの丸底タイプの皿である。88・89は口径10.8 cm前後、高さ1.8 cmあり、89は口縁部に沿って内面を底部近くまでナデた後、底部中央に小さくナデた痕跡を残す。口縁部周縁に煤が付着する。90は口径15.0 cm、高さ1.8 cmある。平底から体部が直線的に開き、底部内面の立ち上がり部ナデ際の泥漿の盛り上がりが見著で、その外側に凹みをもつ圏線となる。91は口径26.0 cmである。体部が大きく外傾して広がり、口縁部は歪む。端部は丸くおさまる。底部を台型に置いた状態で粘土を積み上げ成形している。



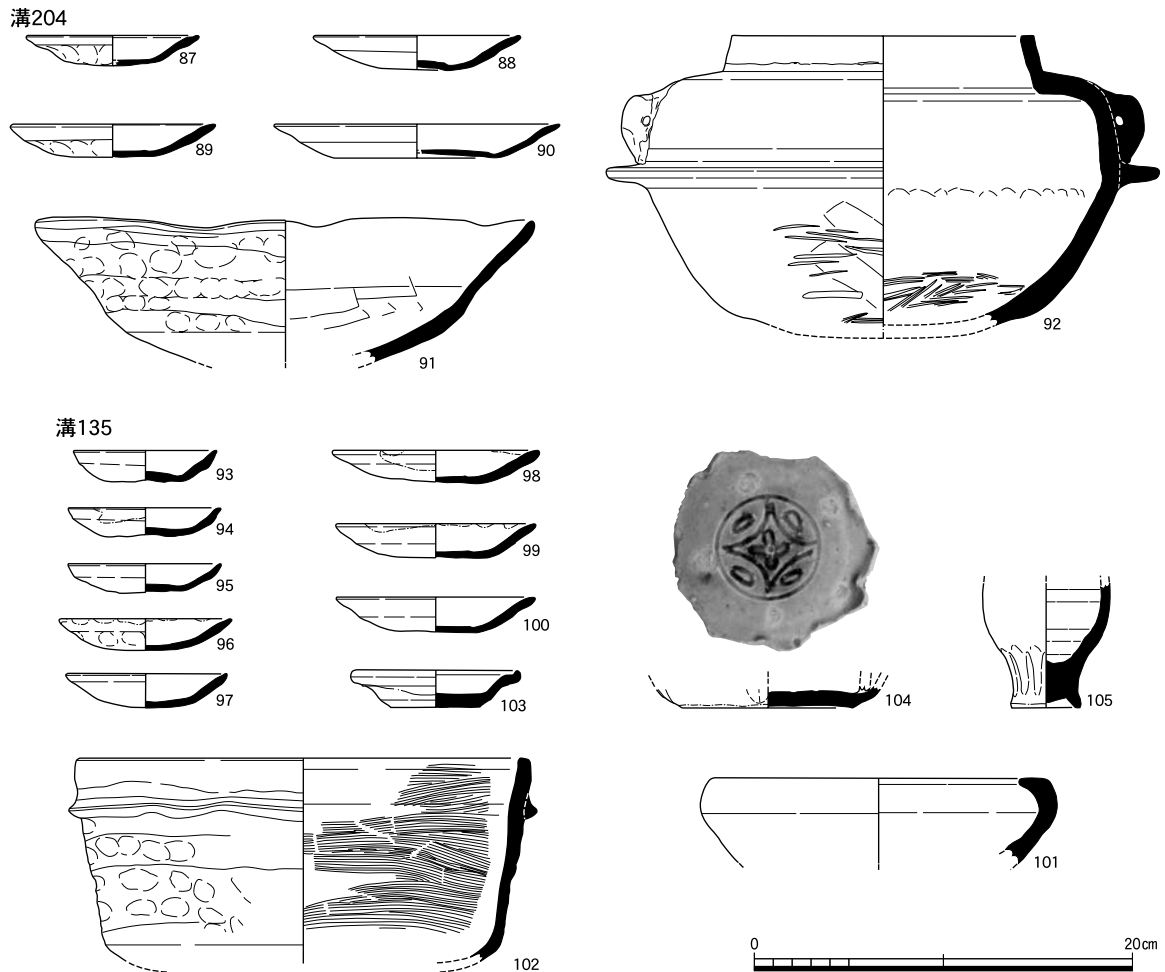


図 32 土器実測図 5 [室町時代 溝 204・堀 135] (1 : 4)

底部外面に布目痕がある。底部内面はハケメ調整、体部外面には指痕が残る。粗雑なつくりである。体部外面・底部内面に煤が付着する。煤は削り取った痕があることから採煙土器が考えられる。92は口径16.0 cmである。底部を台型に置いた状態で粘土を積み上げ成形している。体部の中央よりやや上方に鏝を付ける。体部上部は屈曲して平坦にした後、粘土を継ぎ足して口縁部を立ち上げる。体部外面・口縁部内外面はヘラミガキ、体部内面はオサエとナデ調整を施す。肩に穿孔のある把手が1対付く。

堀 135 (図 32、図版 8) 出土遺物には土師器皿 (93～100)、瓦器鉢 (101)・羽釜 (102)、国産施釉陶器皿 (103・104)、中国産青磁壺 (105) などがある。時期は室町時代後期後半に属する。土師器皿は3群ある。93～95は口径7.6～8.1 cm、高さ1.5～1.7 cmの赤色系小型皿、96・97は口径8.8 cm前後、高さ1.7 cmの丸底皿、98～100は口径10.3～10.8 cm、高さ1.8 cmの中型皿である。101は台が付くタイプの奈良産の浅鉢である。口径17.8 cmあり、下部は欠損する。体部は大きく開き、上方で内に弯曲する。口縁部上端は平坦な端面をもつ。端面と外面は丁寧なミガキ、内面はナデ調整を施す。102は口径24.0 cmあり、底部は欠損する。鏝下外面は指痕が残り、内面はハケメ調整。鏝は歪む粗雑な作りである。103・104は瀬戸産灰釉皿である。103は折縁小皿で、底部は糸切り、内面と口縁部外面に釉を施す。104は輪花型の皿の底部である。体部が立ち上が

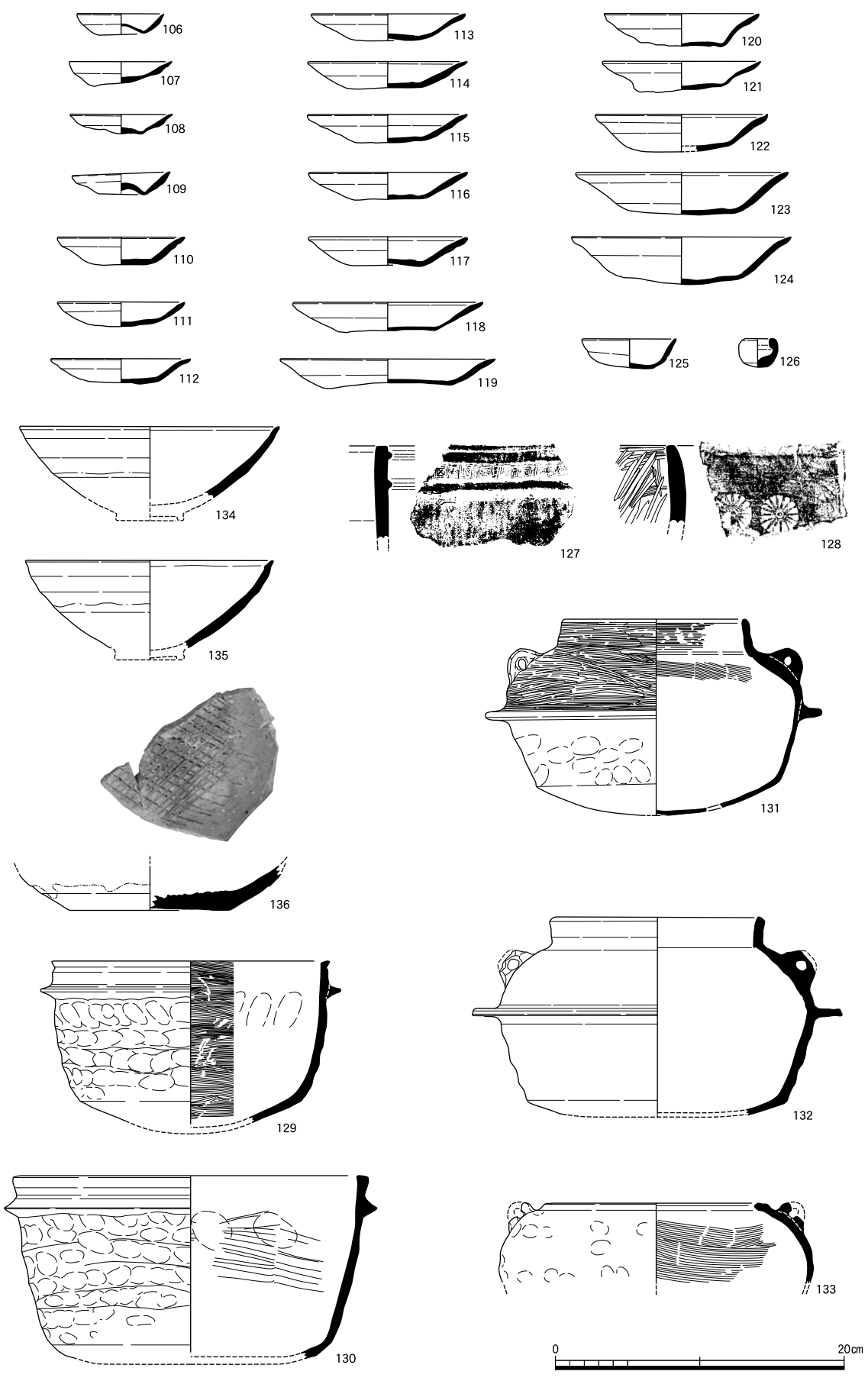


図33 土器実測図6 [室町時代 溝134] (1:4)

る部分に5箇所のオサエを施し輪花を作る。外面は糸切りで露胎する。内面は中央に円形内に花菱文を線刻する。線刻の周囲に胎土目が5箇所付く。105は龍泉窯系の青磁の壺である。底部は削出高台で、体部下方外面にケズリを施しくびれを作る。全面に釉を施し、高台部分は釉ハギをする。

溝134(図33、図版8・9)出土土器には土師器・瓦器・焼締陶器・国産施釉陶器・輸入磁器などがある。特に土師器皿と瓦器鍋釜類が多い。出土した鍋釜類は、埋土の中から焼骨のかけらが入っているものもあり、蔵骨器として埋葬に使用されたものと考えられる。溝の埋まった時期は室町時代後期後半であるが、土器類は後期前半と後半のものが混在する。

106～125は土師器皿である。106～109は口径6.0～7.2cm、高さ1.4～1.7cmの手捏ねの小皿である。110～112は口径8.6cm前後、高さ1.8cmの丸底タイプ皿、113～117は口径10.8～11.0cm、高さ1.9～2.1cmの中皿、118・119は口径13.2cm・14.9cm、高さ2.1cmの大皿である。平底から体部が大きく外に開く。106～119は後期後半に属する。120・121は口径10.8cm前後、高さ2.2cmで、赤色系の皿である。122は口径12.0cm、高さ2.6cm、123・124は口径14.7～15.3cm、高さ3.0～3.3cmで、白色系の大型皿である。120～125は後期前半に属する。125は口径6.6cm、高さ2.1cmの小皿である。口径に対して器高が高く、丁寧な作りである。胎土は砂粒を多く含む粗い土で、焼成は堅緻である。126は土師器小壺である。手捏ねで、形は歪む。胎土は砂が多い粗い土である。

127・128は瓦器火鉢である。127は口縁部直下に2条の凸帯を巡らせ、凸帯間に縦線と図の模様を押印する。上端は水平な端面をもつ。128は奈良産の輪花型火鉢で、体部外面に菊花文を押印し、内面はナデ調整、外面はヘラミガキを施す。129・130は瓦器羽釜である。129は口径19.2cm、高さ約11.1cmの小振りな羽釜である。130は口径24.6cm、高さ約12.6cmある。いずれも口縁部下方に断面形が三角の鏝を貼り付ける。内面はハケメ調整、外面は指痕が残る。ともに底部が欠損する。131～133は瓦器茶釜である。131は口径12.5cm・高さ13.6cm、132は口径14.0cm・高さ約14cmある。ともに底部を台型に置いた状態で粘土を積み上げ成形している。体部の中央よりやや上方に鏝を付ける。体部上部は内弯し、粘土を継ぎ足して口縁部を立ち上げる。体部上方と口縁部外面にヘラミガキを施す。体部下方は外面は指痕が残る。体部と口縁部内面はナデ調整を施す。肩に穿孔のある把手が1対付く。131の中から焼骨のかけらと焼けた大麦1粒が出土した。133は口径14.0cmある。体部から口縁部にかけて内弯し、口縁端部は丸くおさめる。肩部に穿孔のある把手が1対付く。内面は粗いハケメ調整、外面は指痕が残る。

134・135は瀬戸産灰釉椀である。ともに底部は欠損する。口径はそれぞれ17.2cm、17.6cmある。体部は開き、口縁部はわずかに外反する。内面と体部外面上方に灰釉を施す。136は瀬戸産灰釉おろし目皿の底部である。底径は11.0cmある大型の皿で、底部は糸切り痕が付く。ヘラ刻みのおろし目が底部内面全面に広がる。

溝186(図34、図版9)出土土器には土師器・瓦器・焼締陶器などがある。いずれも小片である。137は瓦器の小壺である。口径5.0cmあり、底部は欠損する。粘土紐を積み上げて成形する。体部外面はオサエのちナデ調整。口縁部上端は平坦で、口縁部から肩部は内外面ナデ調整。外面に蓮弁の暗文を描く。2次焼成を受ける。

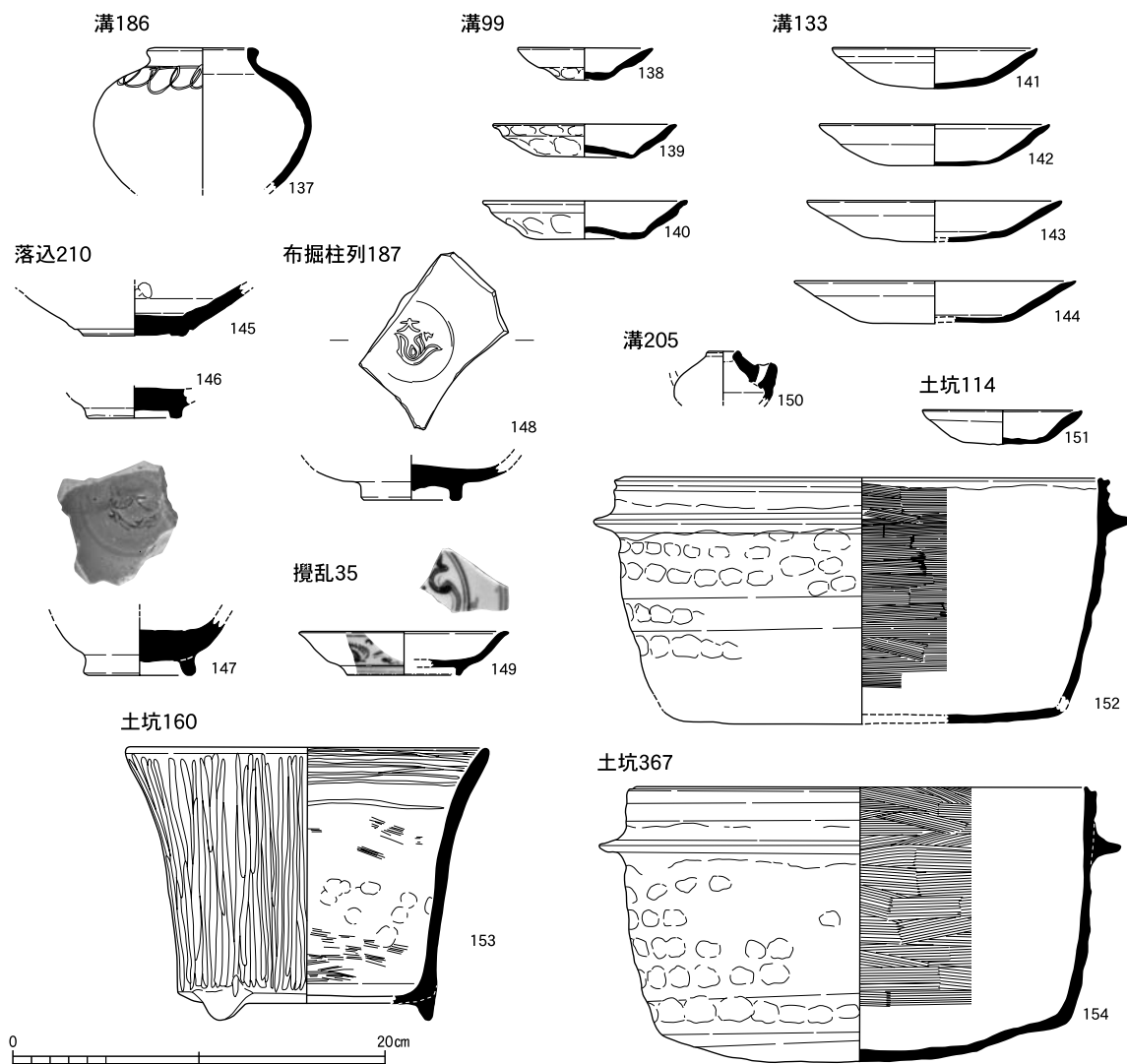


図 34 土器実測図 7 [室町時代 その他遺構] (1 : 4)

溝 99 (図 34、図版 9) 出土土器には土師器・焼締陶器がある。いずれも小片である。時期は室町時代中期に属する。138 ~ 140 は土師器皿である。138 は口径 7.1 cm、高さ 1.8 cm の小皿、139・140 は口径 10 cm 前後、高さ 2.0 cm 前後の中型皿である。

溝 133 (図 34) 出土土器は土師器皿のみである。時期は室町時代後期後半に属する。141 は口径 11.0 cm、高さ 2.2 cm、142 は口径 12.2 cm、高さ 2.3 cm、143 は口径 13.6 cm、高さ 2.2 cm、144 は口径 16.0 cm、高さ 2.3 cm である。いずれも平底から体部が直線的に開き、底部内面の立ち上がり部ナデ際の泥漿の盛り上がりが見え、その外側に凹みをもつ圈線となる。

落込 210 (図 34) 出土土器には土師器・瓦器・焼締陶器・国産施釉陶器・輸入磁器などがある。時期は室町時代後期に属する。145 は瀬戸産灰釉平椀の底部である。削出高台で、底部内面に胎土目が付く。146・147 は中国産青磁椀である。ともに底部のみの残存で、削出高台である。146 は高台内は露胎する。147 は底部内面中央に大とも天とも見える字と周囲に草花文を配する押印を施す。全面に施釉し、高台内は釉ハギを行う。

建物 1 布掘柱列 187 (図 34) 出土土器には土師器・瓦器・焼締陶器・輸入磁器などがある。い

ずれも小片で、図示できるものは中国産青磁碗のみである。148は碗の底部である。削出高台で、高台内は露胎する。内面は中央に大と蓮花文の押印を施す。

攪乱 35 (図 34) 中国産明代の染付皿 (149) が混入として出土した。体部外面と底部内面に草花文を描く。

溝 205 (図 34、図版 9) 出土土器には土師器・瓦器・焼締陶器・国産施釉陶器・輸入磁器などがある。時期は室町時代に属する。150は瀬戸産灰釉水滴である。底部は欠損する。回転ナデで口縁部はすぼまり、体部上部に粘土を貼り付け、穿孔して水の注ぎ口を作る。片面には把手を付ける。

土坑 114 (図 34、図版 9) 出土土器には土師器皿 (151) や瓦器羽釜 (152) がある。時期は室町時代後期に属する。151は口径 8.6 cm、高さ 1.9 cmある丸底の皿である。152は口径 25.2 cm、高さ 13.2 cmあり、内面はハケメ調整、鏝下外面は指痕が残る。釜の内部から焼骨のかけらと焼けた大麦が 1 粒出土した。

土坑 160 (図 34、図版 9) 出土土器には土師器・瓦器・焼締陶器などがある。室町時代後期に属する。153は瓦器深鉢である。口径 19.6 cm、高さ 14.7 cmあり、体部は垂直に立ち上がり、口縁部は外に開く。口縁端部は丸くおさめる。底部に 3 箇所足が付く。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は口縁部はヨコミガキ、体部はオサエとヨコナデ調整を施す。

土坑 367 (図 34、図版 9) 出土土器には瓦器羽釜 (154) がある。口径 24.0 cm、高さ 14.8 cmあり、体部鏝下方はオサエ、内面にハケメ調整を施す。内部に焼骨などはなかったが、検出状況から蔵骨器と考えられる。

整地層 (図 35～37、図版 10) 出土土器には土師器・緑釉陶器・須恵器・瓦器・焼締陶器・国産施釉陶器・輸入陶磁器などがある。時期は室町時代を中心に古墳時代から鎌倉時代の土器が混入として出土した。土師器以外では特に瓦器・輸入磁器・瀬戸産施釉陶器の出土量が多い。ここでは図示できるものをできるだけ多く掲載した。また、輸入陶磁器については時期を問わず室町時代として掲載した。時期は室町時代後期に属する。

土師器には皿 (155～177)・塩壺 (178・179)・鉢 (180)・ミニチュア羽釜 (181)・羽釜 (182～184)・鍋 (185) がある。155・156は口径 5.8 cm・7.2 cm、高さ 1.4 cm・2.0 cmの手握ねの皿である。157～159は口径 6.8～7.4 cm、高さ 1.6～2.0 cmあり、底部中央を上方に突出させる。160～165は赤色系の皿で、160～162は口径 7.7～8.2 cm、高さ 1.8 cm、163～165は口径 8.3 cm前後、高さ 1.6 cm前後ある。166・167は口径 8.1 cm前後、高さ 2.0 cm前後の丸底皿である。168～174は口径 9.5～12.0 cm、高さ 2.0～2.4 cmある。171は作りが粗雑で赤色系の土器の形態をとる。175～177は口径 14.0～15.4 cm、高さ 1.9～2.8 cmある大型の皿で、底部内面の立ち上がり部ナデ際の泥漿が盛り上がる。塩壺 178・179は芯に粘土を巻き付けて成形する。180はやや大振りの鉢である。ミニチュア羽釜 181は胎土に砂粒が多量に混じり、焼成は良好である。182～184は口縁部の形態が異なる羽釜で、182は口縁部を外側に折りたたむ。183は口縁部上端は平坦である。184は奈良産の羽釜で、口縁部が外反し、端部はつまみ上げる。鏝は体部下方

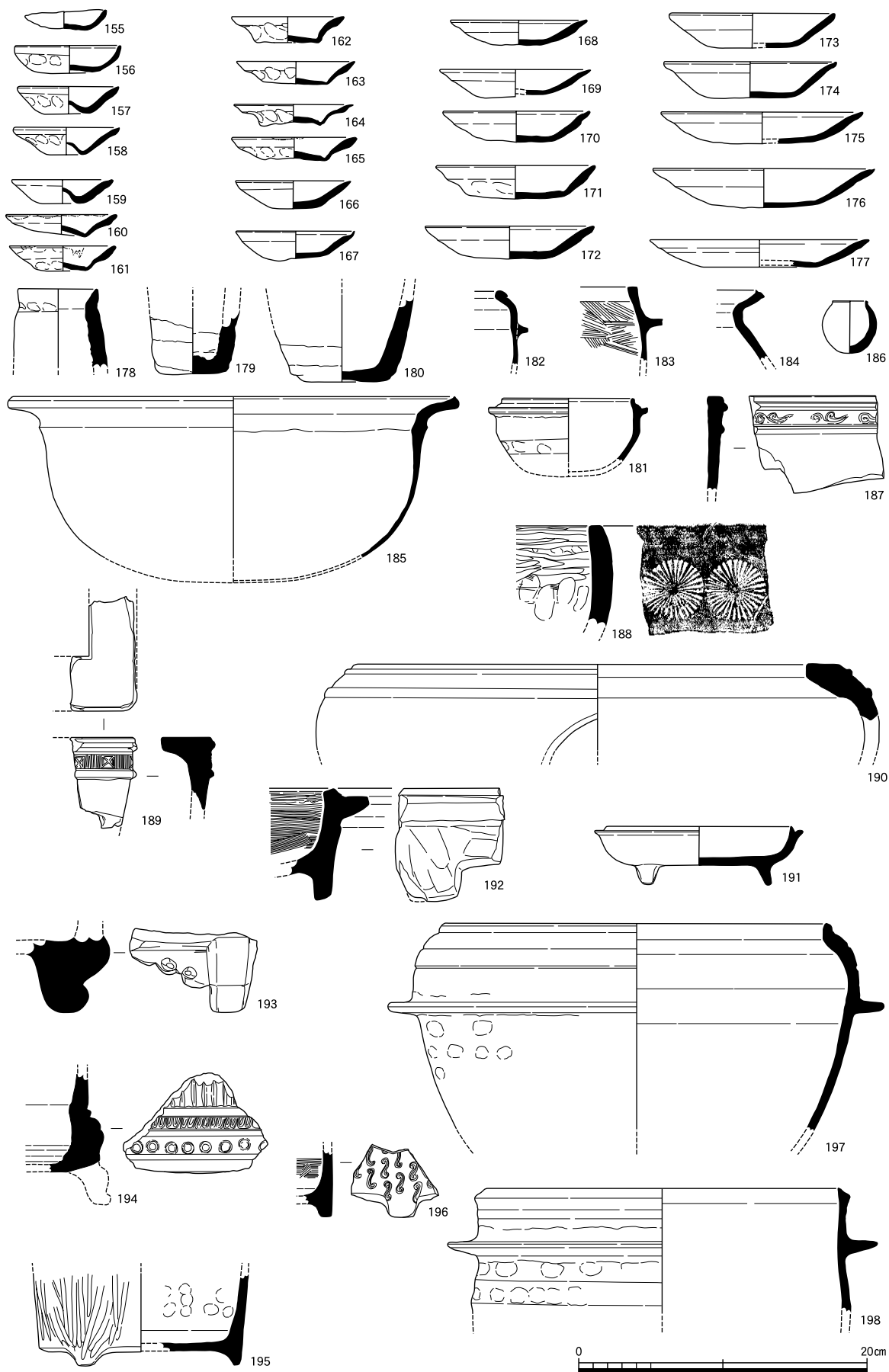


図 35 土器実測図 8 [室町時代 整地層] (1 : 4)

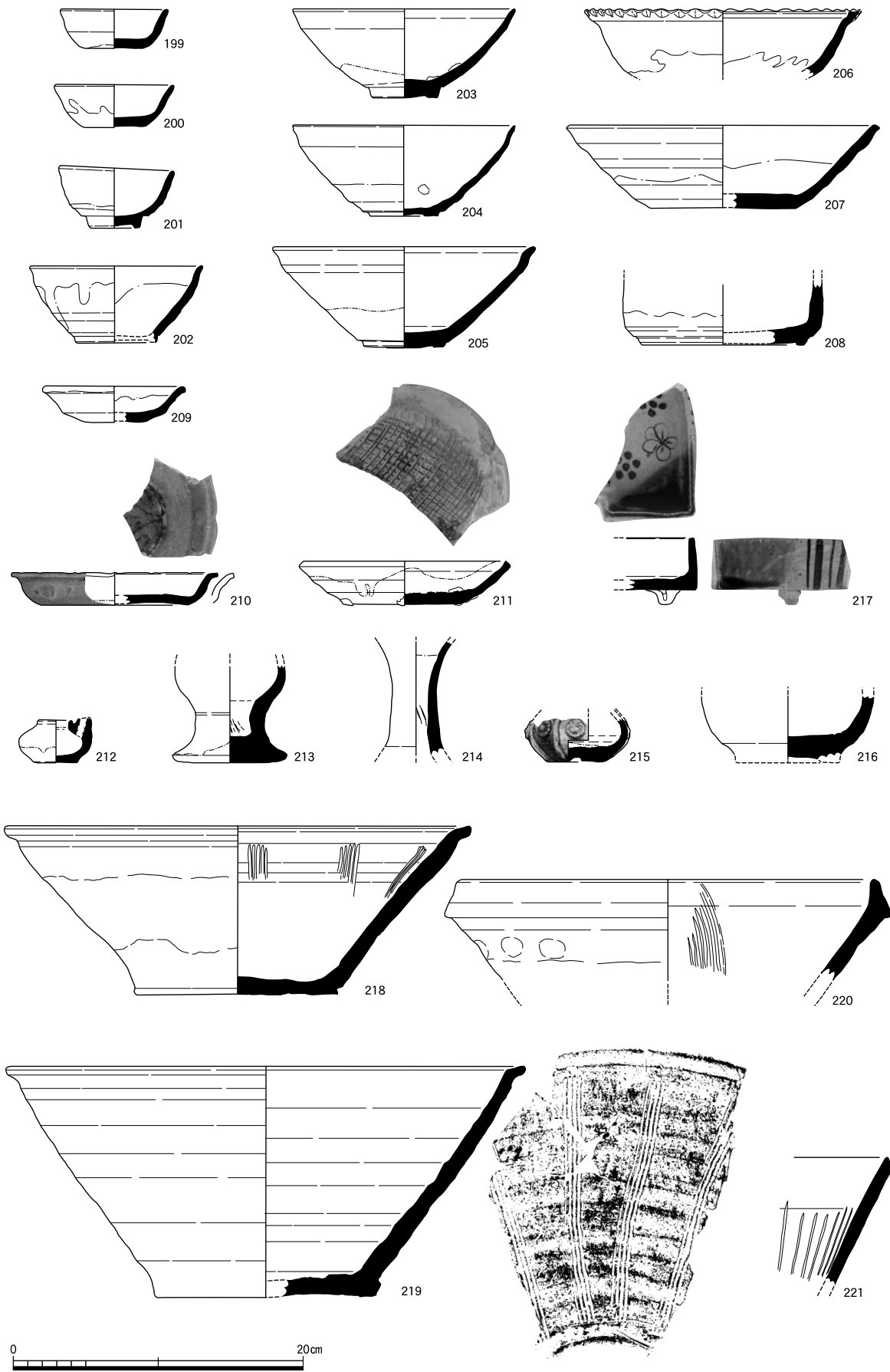


图 36 土器实测图 9 [室町時代 整地層] (1 : 4)

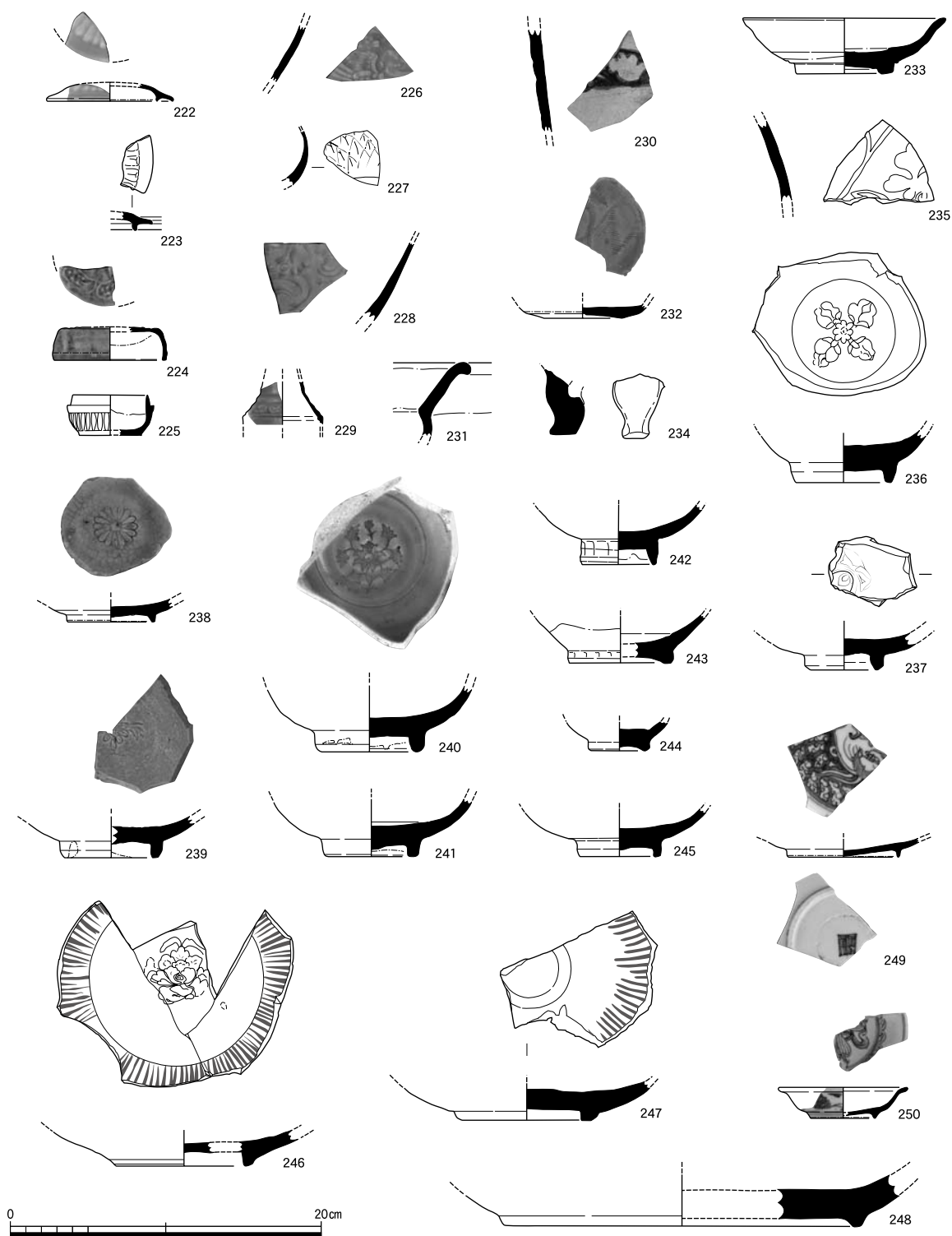


図 37 土器実測図 10 [室町時代 整地層] (1 : 4)

に付くタイプである。185は奈良産の鍋である。口径31.2cmあり、台形成形で、口縁部は粘土を継ぎ足す。

瓦器には小壺(186)・火鉢(187～189)・風炉(190)・香炉(191)・鉢(192～196)・羽釜(197・198)がある。186は「つぼつぼ」とよばれる小壺である。187～189は火鉢の口縁部である。187は口縁部外面上方に2条の凸帯と間に唐草文の押印を施す。188は器壁は厚く、体部内外面上部にヘラミガキ、外面に菊花文の押印を施す。奈良産である。189は方形の火鉢で、2



条の凸帯と間に縦線と口内に×文の連続した押印を施す。190は風炉の上部で、抱え込むように大きく内弯する体部から上方が口縁部となり、上端は水平な端面をもつ。191は口径14.4cm、高さ4.1cmある楠葉産の香炉である。口縁部に蓋の受け、底部に3本の脚が付く。内外面はハケメ調整を施す。192は奈良産の足付き浅鉢である。体部上部に鏝が付く。鏝上の体部を削り口縁部上端とする。内面はハケメ、外面はヘラミガキを施す。193・194は奈良産の鉢の足部と底部である。194の外面には丸や蓮弁の押印を施す。195・196は足付き深鉢の底部である。195は体部外面に縦方向のヘラミガキを施す。196は外面全面にミガキを施し、S字文を押印する。197・198はそれぞれ口径26.4cm・24.4cmある羽釜である。ともに体部鏝下方はオサエ、197は体部の鏝上方に2条の凹線が巡る。口縁部は立ち上がり、端部は丸くおさめる。

施釉陶器には瀬戸産の杯(199・200)・椀(201～205)・鉢(206～208)・皿(209～211)・水滴(212)・壺(213～216)がある。199・200は口径7.4cm・8.2cm、高さ2.7cm・2.9cmある。内面と体部外面に灰釉を施す。底部には糸切り痕がある。201は口径7.6cm、高さ4.2cmの小椀で、削出高台である。内外面に鉄釉を施す。202は口径11.6cm、高さ5.2cmのやや小振りの椀である。削出高台で、口縁部内外面に灰釉を施す。203～205は口径15.2～17.8cm、高さ6.3～9.0cmある。ともに削出高台で、内面と体部上部に灰釉を施す。内面下部に5箇所の胎土目痕がある。206は灰釉折縁の鉢である。口縁端部は指押しで輪花を施す。207は口径21.0cm、高さ5.7cmの黄瀬戸の鉢である。208は深鉢の底部である。削出高台で、体部外面に灰釉を施す。209は口径9.8cm、高さ2.5cmある小皿で、口縁部のみに灰釉を施す。210は口径14.0cm、高さ2.2cmある輪花皿で、口縁端部をヘラ押しで成形し、体部外面を指で押す。底部内面に線刻で幾何模様を描き、鉄釉を施し、内面と体部外面に灰釉を施す。211は口径14.0cm、高さ3.1cmのおろし目皿である。底部内外面に胎土目跡、底部外面は糸切り痕がある。ヘラ刻みのおろし目が底部内面全面に広がる。212は鉄釉を施した水滴で、底部は糸切り痕が付く。213は壺の下部で、体部内面と底部外面は露胎する。糸切り痕がある。214は壺の頸部で、外面と口縁部内面に施釉する。215は小壺で、体部外面に縦に9本の粘土紐とその間に花を貼り付け、灰釉と鉄釉を掛け分ける。底部外面に胎土目跡が付く。216は壺底部で、外面に鉄釉を施す。

焼締陶器には播鉢(218～221)がある。218・219は信楽産で、体部は開き、口縁端部は屈曲して外に延びる。端部は丸くおさめる。218は口径32.2cm、高さ11.7cm、播目は5本1単位である。219は口径36.0cm、高さ15.8cm、播目は4本1単位である。220は備前産で、口径30.6cmである。口縁部は屈曲して立ち上がり、端部は丸くおさめる。播目は7本1単位である。221は丹波産で、体部は直線的に開き、端部は丸くおさめる。播目は1本単位である。

中国産陶磁器には青白磁合子蓋(222～224)・合子身(225)・小片(226・227)・壺(229)、磁州窯壺(230)、黄釉盤(231)、白磁小片(228)・皿(232・233)、青磁鉢の足(234)・壺(235)・椀(236～245)・皿(246・247)・大鉢(248)、明染付皿(249・250)などがある。222・223は蓋の天井部外面に型押し菊花文があり、施釉する。内面は露胎する。224は天井部外面に型押し文を付ける。口縁部と端部は露胎する。225は合子身である。口径4.8cm、高さ2.6cmで、

蓋受け部分と底部外面は露胎する。底部は糸切り。226～228は器形不明の椀などの小片である。226・227は青白磁で型押し模様がある。228は白磁で線描で文様を施す。229は青白磁壺の肩部である。外面に唐草文の型押しがある。230は磁州窯壺の小片である。黒釉を施し葉を陰刻するが、粗雑な作りである。231は南方系の黄釉盤の口縁部である。232は同安窯系の白磁皿の底部で、内面に櫛描き文を施す。233は口径13.0cm、高さ3.6cmの白磁皿で、削出高台である。底部内面は釉ハギを施す。234は龍泉窯系の青磁鉢の脚である。235は龍泉窯系の青磁壺の肩部で、外面に草花文の型押しがある。236～245は青磁椀の底部で、削出高台である。全面に釉を施し、高台内は露胎する。236～240には内面に花の押印がある。花には菊や牡丹などがある。246・247は皿の底部で、碁笥高台である。ともに底部内面の周縁に放射状の陰刻を施し、246は中央に牡丹文を押印する。248は底径23.0cmある大型鉢か皿の底部である。削出高台で、全面に施釉を施し、高台内は釉ハギをする。249・250は明の染付皿である。249は呉須で底部内面に獅子と雲を、高台内には口内に線文字を描く。250は外面に草花文、内面に青海波と羽衣状の布を描く。ともに全面施釉である。

217は整地層上面から出土した瀬戸美濃産の織部向付である。時期は桃山時代から江戸時代初頭である。

### (3) 瓦類

瓦類は整理箱に40箱出土した。大半は室町時代の整地層から出土したもので、平安時代から鎌倉時代の瓦が中心が多い。軒瓦には昭和40～43年の六波羅蜜寺本堂解体修理時の発掘調査で出土した軒瓦と同文の瓦があることから、六波羅蜜寺に葺かれたものと考えられる。また、1点のみであるが飛鳥時代の軒平瓦も出土した。

軒瓦 (図38、図版11)

瓦1 梵字文軒丸瓦。中央にキリク文を、外区には素文の外縁と密な珠文、さらに内側にもう1条の圏線を配す。瓦当部裏面は剥離していて調整は不明である。胎土は砂粒を含み、赤味を帯びた灰白色で2次焼成をうける。やや軟質。キリクは「千手観世音菩薩」を表す。平安時代中期。柱穴列1の柱穴73から出土した。『六波羅蜜寺の研究』掲載瓦(以下「六波羅蜜寺」とする)<sup>1)</sup>2-2と同文。

瓦2 蓮華文軒丸瓦。単弁で、蓮弁は棒状である。瓦当部裏面に布目が付く。胎土は砂粒を少量含み、赤味を帯びた灰白色で2次焼成をうける。やや軟質。平安時代中期。室町時代の整地層から出土した。おうせんどろ廃寺出土に同文の瓦がある。<sup>2)</sup>

瓦3 三巴文軒丸瓦。右巻きの巴文を配する。頭部は離れ、尾部は互いに接しない。瓦当部側面はタテナデ、裏面はオサエ。胎土は砂粒を多量含み、灰色。やや軟質。平安時代後期。室町時代の整地層から出土した。六波羅蜜寺3-2と同文。

瓦4 3重弧文軒平瓦。施文は型による押し引き。瓦当面に成型時に下に置いた植物などの痕跡が付く。瓦当部凹面は布目上からタテナデ、瓦当部凸面はタテナデ。飛鳥時代。室町時代の整

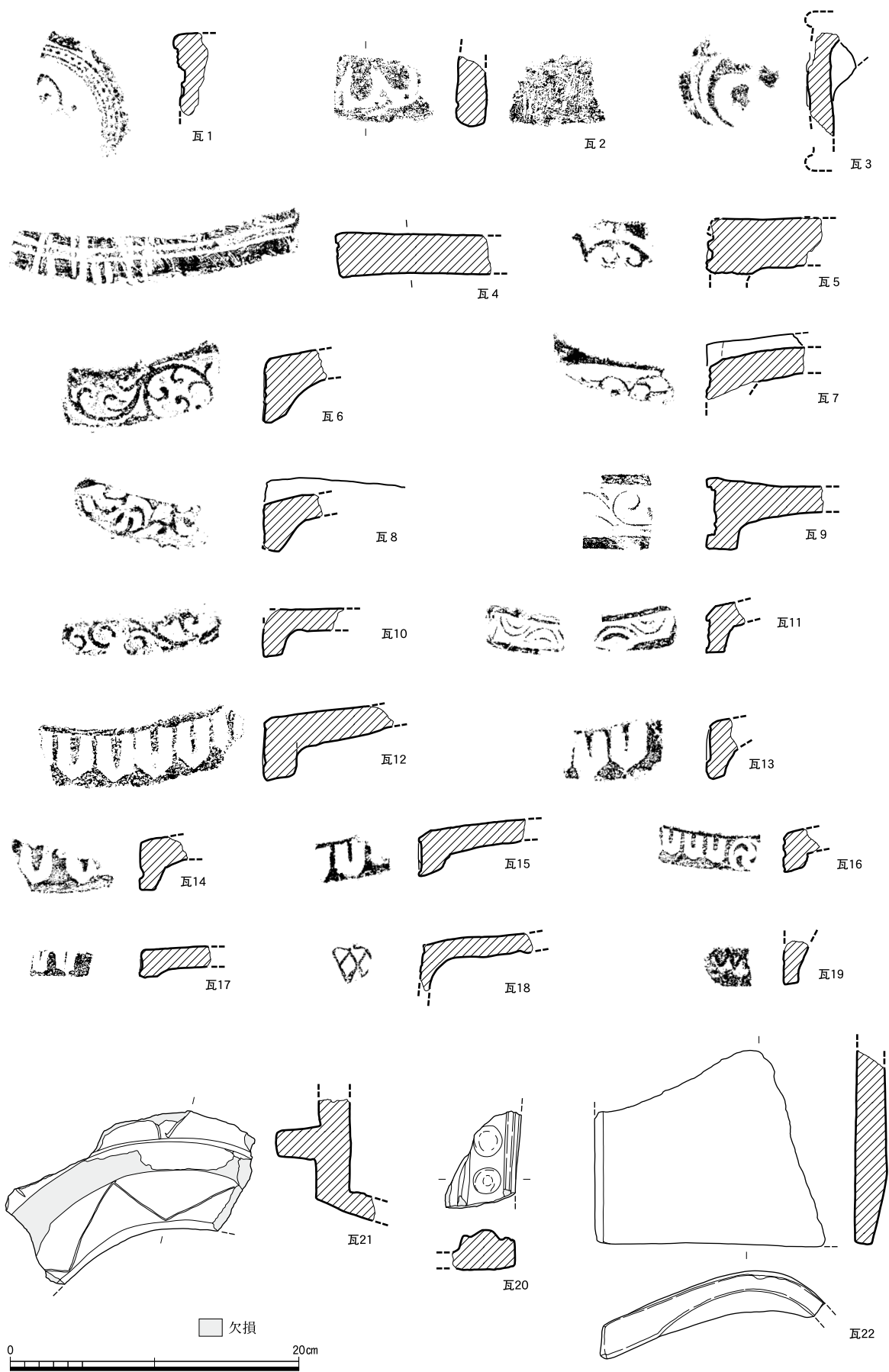


图 38 瓦類拓影·实测图 1 (1 : 4)

地層から出土した。北東に位置する珍皇寺に葺かれたものであろう。

瓦5 唐草文軒平瓦。瓦当部凹面は布目、裏面はヨコナデ。胎土は砂粒を含み、灰黄色。硬質。平安時代後期。室町時代の整地層から出土した。

瓦6 唐草文軒平瓦。唐草文は端上方から2転する。瓦当部凹面はヨコナデ、瓦当部凸面はヨコナデ後ヘラケズリ、裏面はオサエ。胎土は砂粒を少量含み、灰色。硬質。平安時代後期。室町時代の整地層から出土した。六波羅蜜寺4-10と同文。

瓦7 唐草文軒平瓦。瓦当部はほとんど欠損する。瓦当部凹面はヘラケズリ、平瓦部凹面は布目、平瓦部凸面はオサエ。胎土は砂粒を少量含み、灰色。硬質。平安時代後期。井戸255から出土した。

瓦8 唐草文軒平瓦。周縁はない。瓦当部凹面はヘラケズリ、平瓦部凹面は布目、瓦当部凸面はヨコナデ、平瓦部凸面はオサエ。胎土は砂粒・小礫を少量含み、灰白色。硬質。平安時代後期。室町時代の整地層から出土した。

瓦9 唐草文軒平瓦。瓦当部凹面はヨコナデ、平瓦部凹面は磨滅で調整不明。砥石に転用したものか。瓦当部凸面・裏面はヨコナデ、平瓦部凸面はオサエ。胎土は砂粒を少量含み、灰白色。堅緻。平安時代後期。播磨産。室町時代の整地層から出土した。

瓦10 唐草文軒平瓦。瓦当部成形は折り曲げ技法。瓦当部凹面は布目、瓦当部凸面・裏面はヨコナデ、平瓦部凸面はタテナデ。胎土は砂粒を含み、灰黄色。やや軟質。平安時代後期。室町時代の整地層から出土した。

瓦11 唐草文軒平瓦。瓦当部成形は折り曲げ技法。瓦当部凹面はケズリ、平瓦部凹面は布目、瓦当部凸面はオサエ、裏面はヨコナデ、平瓦部凸面はタテナデ。胎土は砂粒を含み、灰黄色。やや軟質。平安時代後期。堀135から出土した。

瓦12 剣頭文軒平瓦。瓦当部成形は折り曲げ技法。瓦当部凹面はケズリ、平瓦部凹面は布目、瓦当部凸面タテナデ、裏面はオサエ、平瓦部凸面はタテナデ。胎土は粗砂を含み、灰黄色。硬質。平安時代後期。室町時代の整地層から出土した。六波羅蜜寺6-11と同文。

瓦13 剣頭文軒平瓦。瓦当部成形は折り曲げ技法。瓦当部凹面は布目、瓦当部凸面ヨコナデ、裏面はオサエ。胎土は粗砂を含み、灰白～浅黄橙色。2次焼成をうける。平安時代後期。室町時代の整地層から出土した。六波羅蜜寺6-11と同文。

瓦14 剣頭文軒平瓦。瓦当部成形は折り曲げ技法。瓦当部凹面はヨコナデ、瓦当部凸面・裏面はヨコナデ。胎土は砂を少量含み、黒灰色。硬質。平安時代後期。重機掘削中に出土した。

瓦15 剣頭文軒平瓦。瓦当部成形は折り曲げ技法。瓦当部凹面はケズリ、平瓦部凹面は布目、瓦当部凸面はヨコナデ、裏面はオサエ、平瓦部凸面は縄目。胎土は粗砂・小礫を含み、灰～にぶい黄橙色。2次焼成をうける。鎌倉時代。室町時代の整地層から出土した。

瓦16 剣頭文軒平瓦。中央に右巻き三巴文、両側に剣頭文を配する。巴文は頭部は離れ、尾部は互いに接しない。瓦当部成形は折り曲げ技法。瓦当部凹面はケズリ、平瓦部凹面は布目、瓦当部凸面はヨコナデ、裏面はオサエ、平瓦部凸面はオサエ。胎土は砂粒を含み、黒灰色。鎌倉時代。

室町時代の整地層から出土した。

瓦 17 剣頭文軒平瓦。瓦当部成形は折り曲げ技法。瓦当部凹面・平瓦部凹面は布目、瓦当部凸面・裏面はヨコナデ、平瓦部凸面はオサエ。胎土は砂粒を少量含み、灰色。鎌倉時代。硬質。室町時代の整地層から出土した。

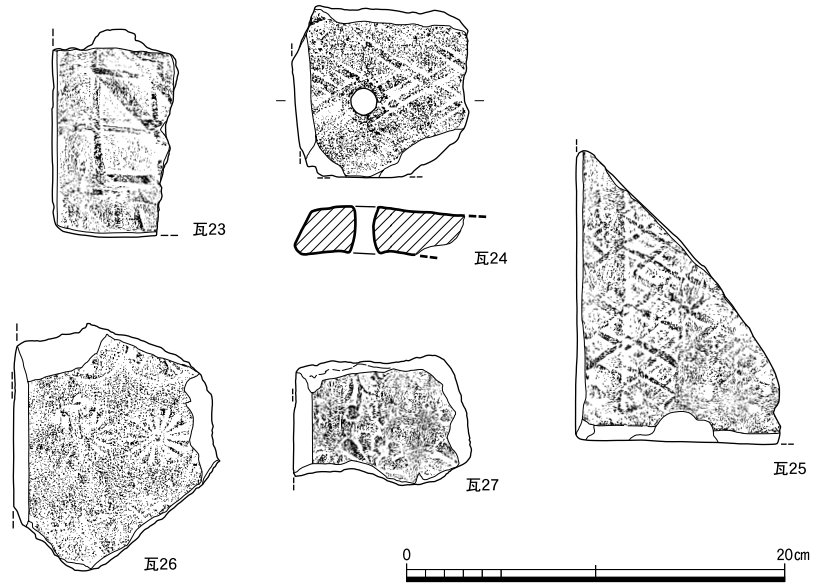


図 39 瓦類拓影・実測図 2 (1 : 4)

瓦 18 斜格子文軒平瓦。瓦当部成形は折り曲

げ技法。瓦当部凹面・平瓦部凹面は布目、瓦当部裏面はオサエ、平瓦部凸面はヨコナデ。胎土は砂粒を少量含み、灰白色。やや軟質。平安時代後期。堀 135 から出土した。

瓦 19 鋸歯文軒平瓦。瓦当部成形は折り曲げ技法。瓦当部裏面はオサエ。胎土は砂粒を少量含み、赤みを帯びた灰白色。2次焼成を受ける。平安時代後期。室町時代の整地層から出土した。

鬼瓦 (図 38)

瓦 20・瓦 21 は鬼瓦である。瓦 20 は外区に大粒の珠文が巡る部分である。室町時代の整地層から出土した。瓦 21 は獅子口で、表面に線刻の鋸歯文を刻む。室町時代。溝 134 から出土した。

道具瓦 (図 38)

瓦 22 は棟の蓋に使用する雁振瓦である。瓦が重なる部分は半円形の面取りを施す。室町時代。溝 204 から出土した。

平瓦 (図 39)

瓦 23～瓦 27 は平瓦である。瓦 23～瓦 25 は、凹面は布目、凸面は瓦 23 は格子状、瓦 24・瓦 25 は斜め格子状のタタキがある。瓦 24 は釘穴があり、軒平瓦の可能性もある。瓦 26 は凹面は木挽き、瓦 27 は凹面はタテナデ、凸面はともに菊花や花の押形文がある。瓦 23・瓦 26・瓦 27 は室町時代の整地層、瓦 24 は溝 134、瓦 25 は堀 135 から出土した。

塼 (図 40)

瓦 28・瓦 29 は有孔塼である。長さ 15.6 cm以上、幅 10.8～11.0 cm、厚さ約 6.0 cmの直方体で、周縁の内側は凹み、凹みの表・裏面には縄目が付く。上部に直径約 3 cmの穴を開ける。下部は欠損するが下部にも穴が付く。穴に棒状のものを差してブロックのように積み上げて使用したと考えられる。瓦 28 は溝 134、瓦 29 は室町時代の整地層から出土した。

瓦 30 は一辺が 15.5 cm以上、厚さ 4.8 cmある方形の塼である。表・裏面は丁寧なナデを施す。瓦 31 は一辺が 11 cm以上、厚さ 2.2 cmある方形の塼である。表面に縄目、裏面に布目が付く。瓦

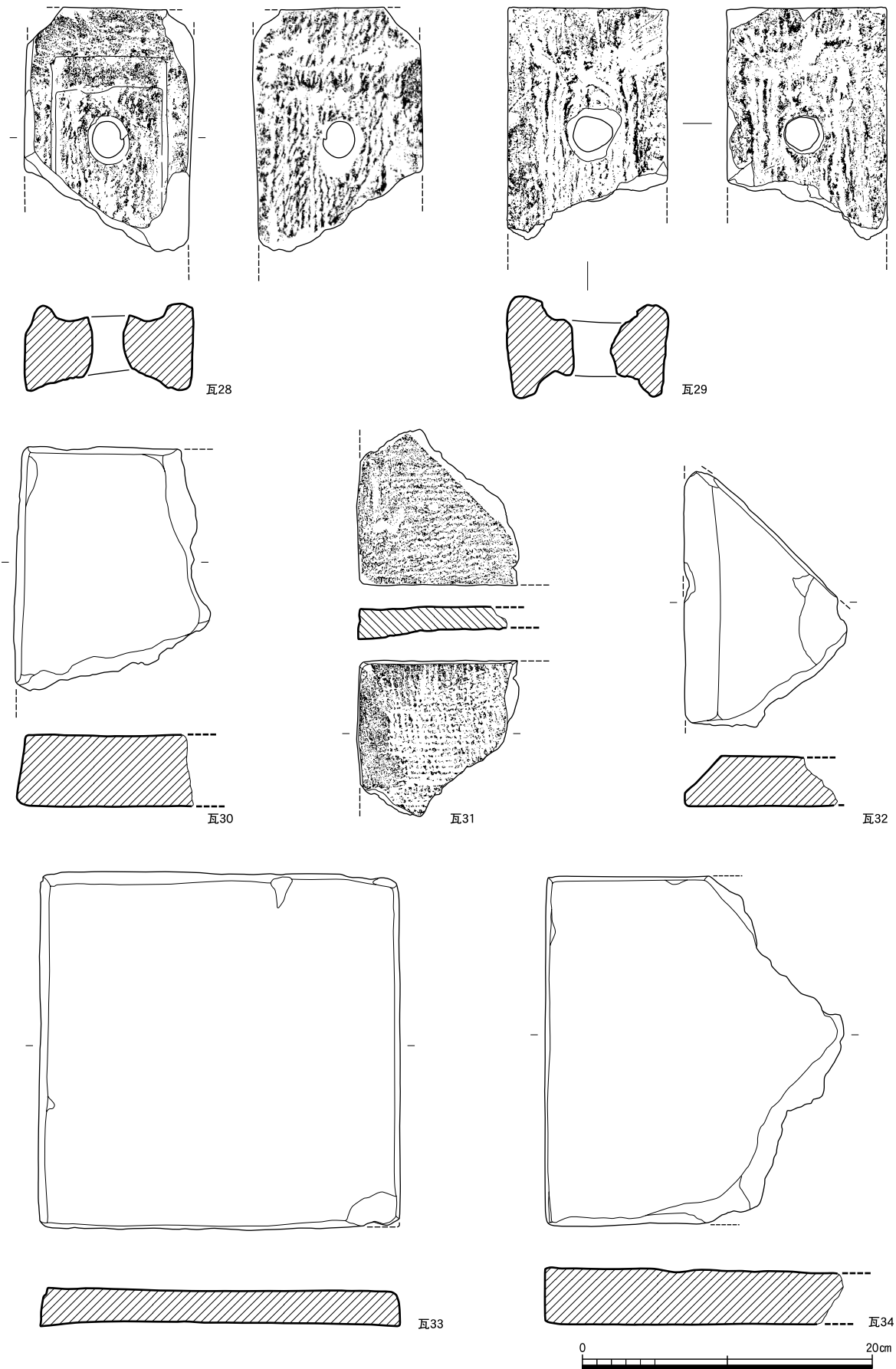


图40 瓦類拓影・実測図3 (1:4)

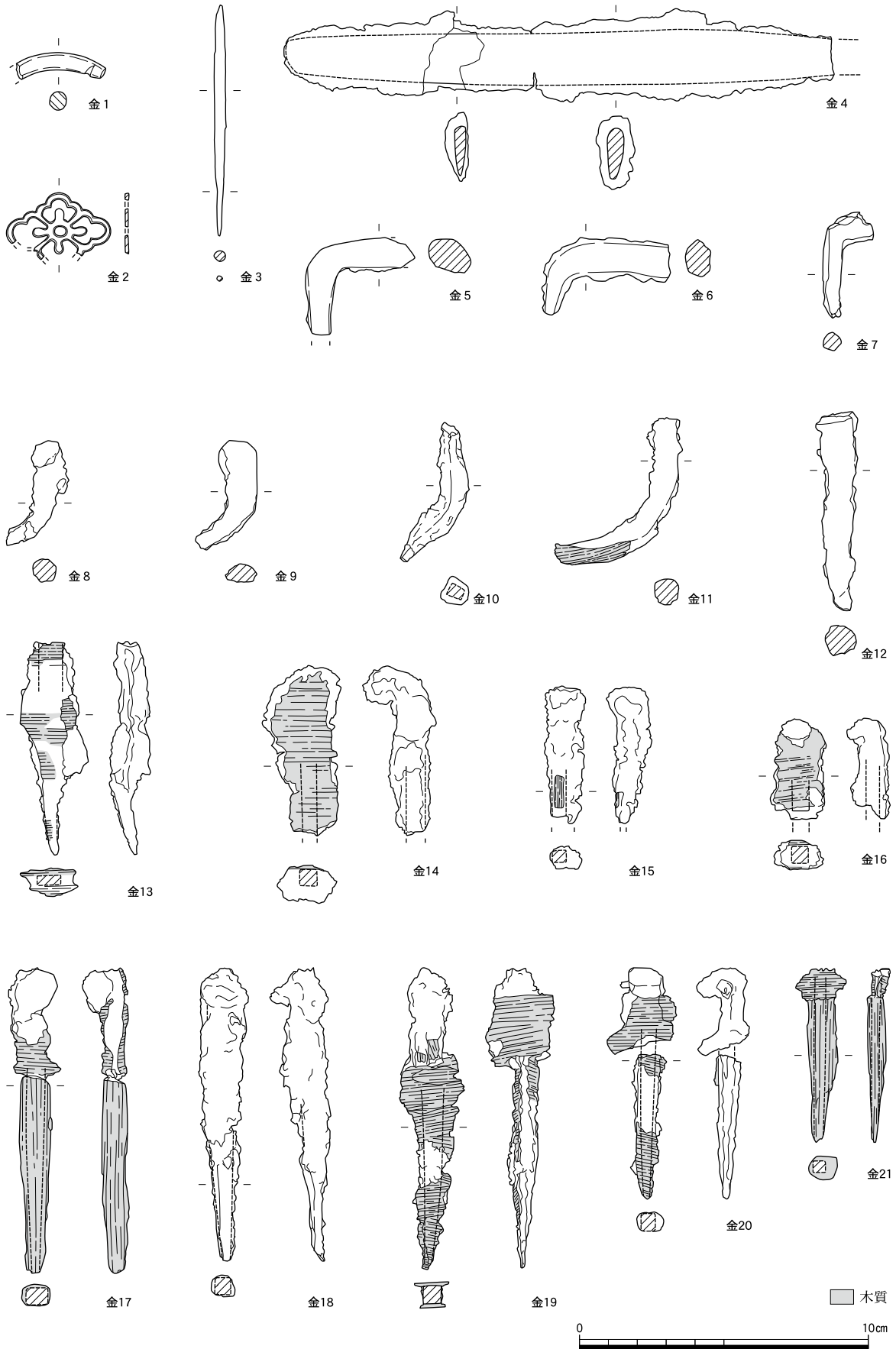


图 41 金属製品実測図 (1 : 2)

32 は一辺が 16 cm 以上、厚さ 3.2 cm ある三角形を呈する磚である。一方の側面は直角に、もう一方は斜めのケズリ、表面は丁寧なミガキを施す。瓦 30 ～瓦 32 は室町時代の整地層から出土した。

瓦 33・瓦 34 は一辺が 24.0 cm の方形の磚で、瓦 33 は厚さ 2.1 cm でほぼ完形、瓦 34 は厚さ 3.5 cm ある。表・裏面に丁寧なミガキを施す。瓦 33 は窯 100、瓦 34 は室町時代の整地層から出土した。

#### (4) 金属製品

金属製品には銅製品、鉄製品、銭貨がある。出土した遺物の大半は鉄製品の釘で、他に鋸や刀子などがある。銅製品は極少量で飾り金具などがある。銭貨は各遺構から出土したもの以外に埋納銭が大量に出土した。

##### 銅製品 (図 41)

金 1 は緩い弯曲をした断面円形の把手状製品である。両端が欠損し、内側に刻みを付ける。整地層から出土した。室町時代に属する。

金 2 は花菱文の透かし飾り金具で丁寧な作りである。下部が欠損する。整地層から出土した。室町時代に属する。

金 3 は針状製品である。断面円形で細く、先端部が尖る。柱穴 286 から出土した。室町時代に属する。

##### 鉄製品 (図 41、図版 12)

金 4 は刀子である。刃身の部分のみで柄は欠損する。整地層から出土した。室町時代に属する。

金 5 ～金 7 は鉄鋸である。いずれも両端が折損している。錆により内部の詳細は不明である。3 点とも整地層から出土した。室町時代に属する。

金 8 ～金 21 は鉄釘である。ほぼ同じ大きさで、金 8 ～金 10 は頭と先端が欠損する。金 8・金 9 は整地層、金 10 は溝 134 から出土した。室町時代に属する。平安時代以前の可能性がある。

表 3 銭貨一覧表

番号	銭種	初鑄年	出土遺構	出土数	番号	銭種	初鑄年	出土遺構	出土数
銭 1	開元通寶	966	埋納銭	5	銭 17	紹聖元寶(篆書)	1094	埋納銭	6
銭 2	太平通寶	976	埋納銭	1	銭 18	紹聖元寶(行書)	1094	埋納銭	
銭 3	淳化元寶	990	埋納銭	1	銭 19	聖宋元寶	1101	埋納銭	1
銭 4	至道元寶(行書)	995	埋納銭	2	銭 20	大觀通寶	1107	埋納銭	1
銭 5	至道元寶(真書)	995	埋納銭		銭 21	政和通寶	1111	埋納銭	1
銭 6	祥符通寶	1009	埋納銭	3	銭 22	洪武通寶	1368	埋納銭	2
銭 7	天禧通寶	1017	埋納銭	2	—	不明	—	埋納銭	411
銭 8	天聖元寶(篆書)	1023	埋納銭	8				小計	471
銭 9	天聖元寶(真書)	1023	埋納銭		銭 23	宋元通寶	960	整地層	1
銭 10	景祐元寶	1034	埋納銭	1	銭 24	至道元寶	995	整地層	1
銭 11	皇宋通寶	1039	埋納銭	2	銭 25	咸平元寶	998	整地層	1
銭 12	治平元寶	1064	埋納銭	1	銭 26	至和通寶	1054	堀 135	1
銭 13	熙寧元寶(篆書)	1068	埋納銭	8	銭 27	熙寧元寶	1068	整地層	1
銭 14	熙寧元寶(真書)	1068	埋納銭		銭 28	元豊通寶	1078	整地層	1
銭 15	元豊通寶	1078	埋納銭	9	銭 29	元祐通寶	1086	整地層	1
銭 16	元祐通寶	1086	埋納銭	6					



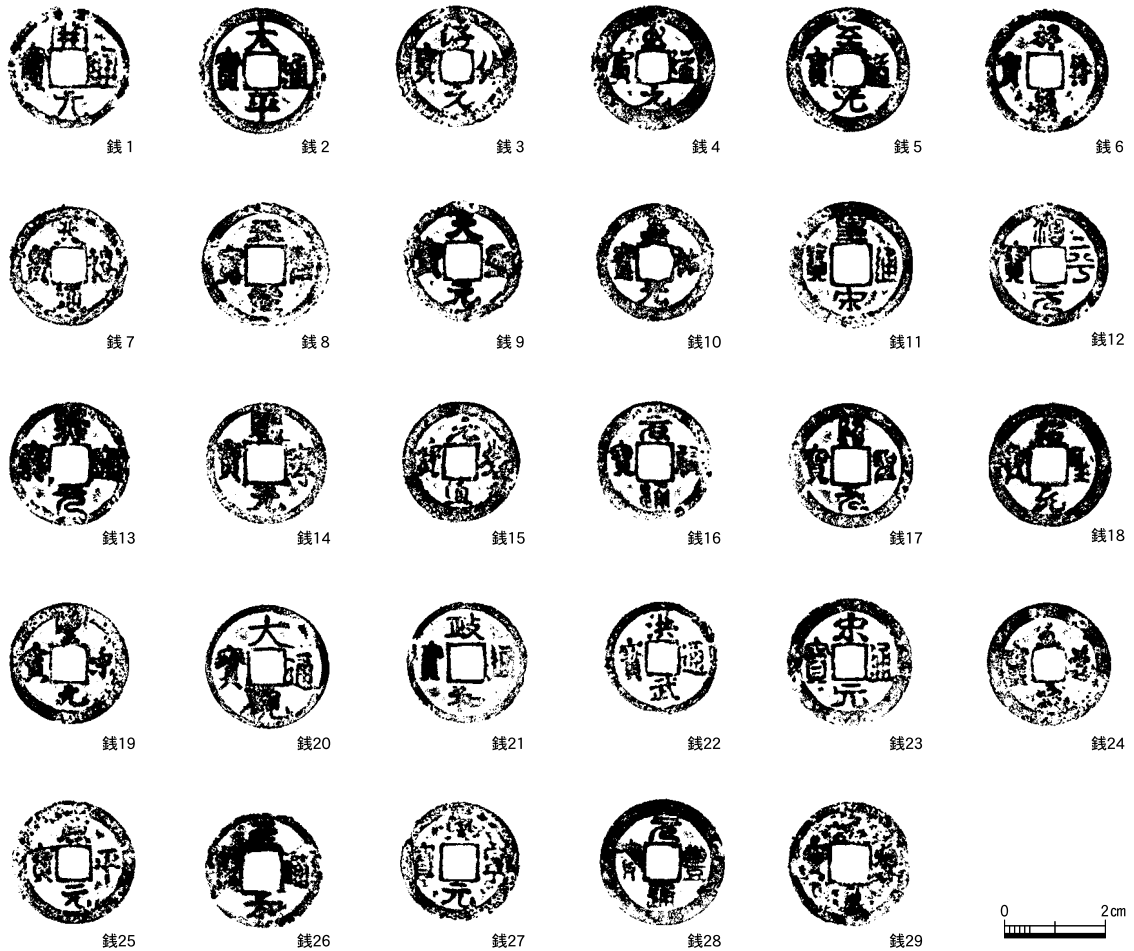


図 42 銭貨拓影（2：3）

金 11～金 21 はやや大型の鉄釘で、金 16～金 21 はほぼ完形である。錆により木目が付着するものが多く、木目は釘の上部と下部の 2 方向に付着するものもある。2 方向の木目は 2 つの板を組み合わせた状態で釘を打ち付けたもので、蓋をした木箱が想定できる。金 13～金 16 は土坑 334、金 17～金 21 は流路 335 から出土したもので、おそらく埋葬された木棺に使用されたと考えられる。平安時代前期に属する。金 11・金 12 は堀 135 から出土した。混入したものであろう。

#### 銭貨（図 42、表 3）

室町時代の整地層から出土したものが大半である。26 種出土した。銭 1～銭 22 は室町時代の整地層から一括で出土した埋納銭である。藁紐で束ねた緡銭が 5 束あり、合計 471 点ある。直接土に埋められていたため、銭は錆などで密着しており、確認できた銭の文字は 22 種 60 点であった。その他で出土した銭種や遺構なども合わせて表 3 にまとめた。銭はすべて室町時代に属する。

#### （5）石製品（図 43・44、図版 12）

石製品には石鍋・砥石・硯・石臼などの生活用品の他に、五輪塔や墓標などの石造物がある。石造物はすべて花崗岩である。

滑石製鍋釜（石 1～石 3）石 1 は内弯する体部上方に断面上辺が下がる三角形の鏝を削り出す。

外面の鏝以下に工具痕が残り、内面にも工具痕が強く残る。石材は淡赤灰色を呈し、キメは細かい。石2はわずかに内弯する体部上方にほぼ水平に断面台形の鏝を削り出す。外面に工具痕が残り、煤が付着する。石材はやや赤みを帯びた褐灰色を呈し、キメは細かい。石1・石2は井戸255から出土した。鎌倉時代に属する。石3はわずかに内弯する体部上方に断面上辺が下がる三角形の鏝を削り出す。内面に煤、外面に炭化物が付着し、加工痕は不明である。石材は黄灰色を呈し、キメは粗い。土坑242から出土した。室町時代に属する。

温石(石4～石9) 石4は温石の未製品で、内弯する体部上方にほぼ水平に断面長方形の鏝を削り出す。外面に工具痕が残り、煤が付着する。石材は淡灰色を呈する。口縁部から鏝上部と鏝に切断痕がある。石5は石鍋の口縁部付近を転用した温石の未製品である。鏝は切断された痕がある。外面に煤が付着する。石材は淡灰色を呈し、キメは粗い。石6は石鍋の底部付近を転用した温石の未製品である。底部から立ち上がる部分を切断している。石材は青灰色を呈し、キメは粗い。石7は石鍋の口縁部付近を転用した温石である。三方を切断し板状に成形する。外面上方には温石の加工痕、下方には鍋の加工痕が残る。石材は青灰色を呈し、キメは細かい。石8は滑石の石材から加工したもので、穿孔途中の温石の未製品である。石材は淡灰色を呈し、キメは粗い。石9は滑石を板状に加工した温石である。2辺は確認できるが他は欠損している。石材は淡赤灰色を呈し、キメは細かい。石6は井戸255から出土した。鎌倉時代に属する。石4・石7・石9は整地層、石5は堀135、石8は土坑204Bから出土した。いずれも室町時代に属する。

硯(石10～石12) 石10は海部と左半分が欠損する。石材は粘板岩で、淡黄灰色に暗灰色の斑が入り、やや軟質である。整地層から出土した。石11は小型の硯である。周縁の一部が欠損、剥離している。陸部中央が磨滅する。陸部は斜めに一段落ちて海部となる。作りは粗い。石材は粘板岩で、黒灰色を呈し、硬質である。石12は硯の小片で、陸部から海部の一部が残存部分する。周縁は痕跡が残る。裏面にもはっきりした深い彫りの周縁がある。石材は黄灰色の粘板岩である。石10・石11は整地層から出土した。室町時代に属する。

砥石(石13～石23) 石13は右上部から下部が欠損する。表・裏・側面の3面が滑らかで磨滅しており、側面に2箇所、端面に3箇所の丸刃の研ぎ痕がある。石材は暗青灰色の砂岩である。石14は下部が欠損する。表面が滑らかで磨滅する。石材は浅黄色の粘板岩である。石15は両端が欠損し、表裏・両側面の4面が滑らかで磨滅している。石材は浅黄色の粘板岩である。石16は両端が欠損し、裏面は剥離している。表面が滑らかで磨滅している。石材はやや赤味がかかった黄白色の砂岩である。石17は下部が欠損する。表・裏面が滑らかで磨滅する。石材は浅黄色の粘板岩である。石18は下部が欠損する。表・裏面が滑らかで磨滅する。石材は灰オリーブ色の粘板岩である。石19は両端が欠損・剥離し、表裏面が滑らかで磨滅している。石材は灰オリーブ色の粘板岩である。石20は上部が欠損し、表面が滑らかで磨滅している。石材は青味がかかった灰色の砂岩である。石21は側面に切断痕がある。表裏・両端面が滑らかで、上端表面に切断痕が付く。石材は灰赤色の頁岩で、硯の産地として有名な下関で産出される赤間石である。石22は両端が欠損し、表面が滑らかで磨滅する。上方に線状痕、側面は削り痕がある。石材は黄味を帯びた灰白

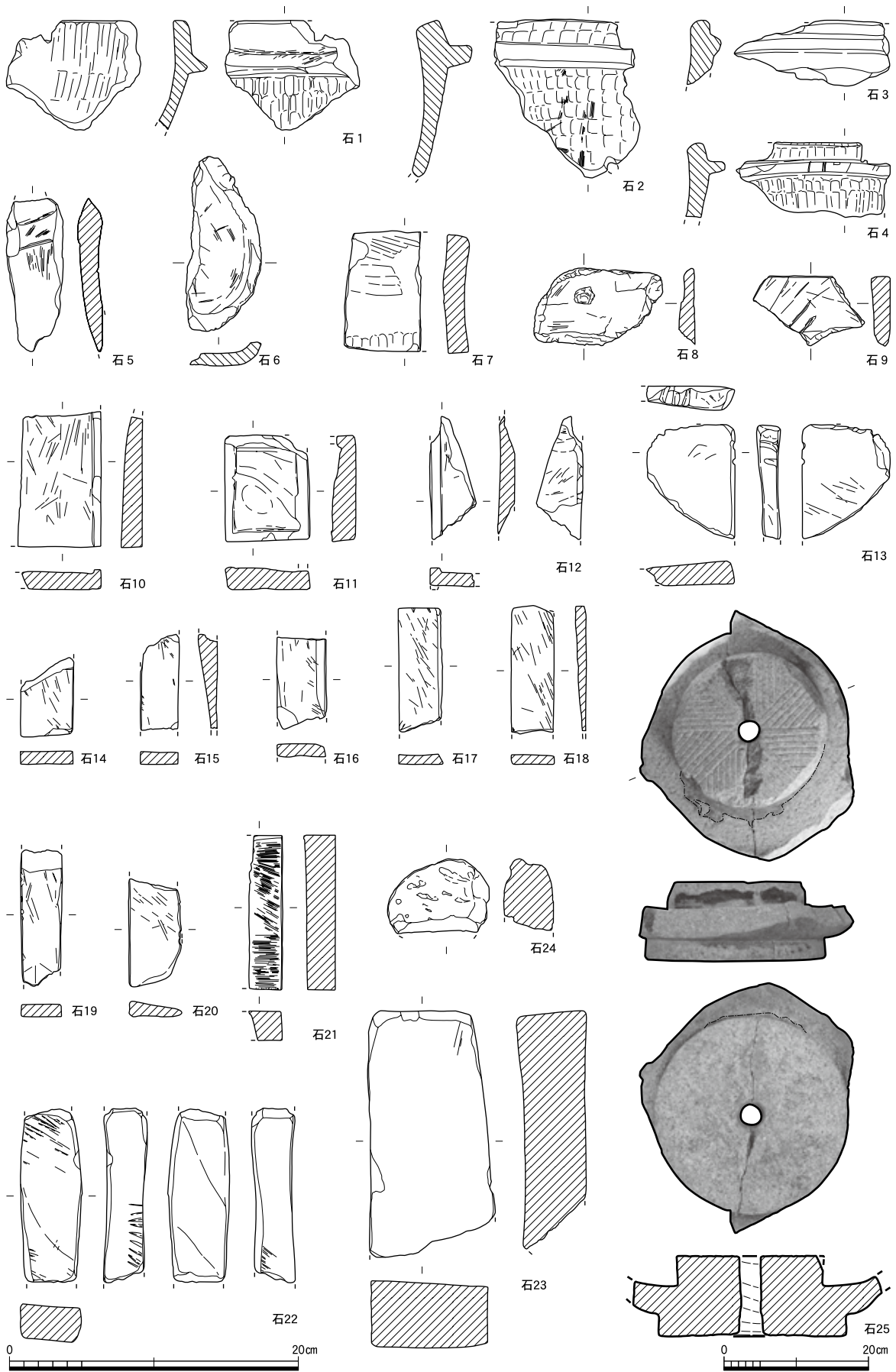


図43 石製品実測図1 (1:4、石25のみ1:8)

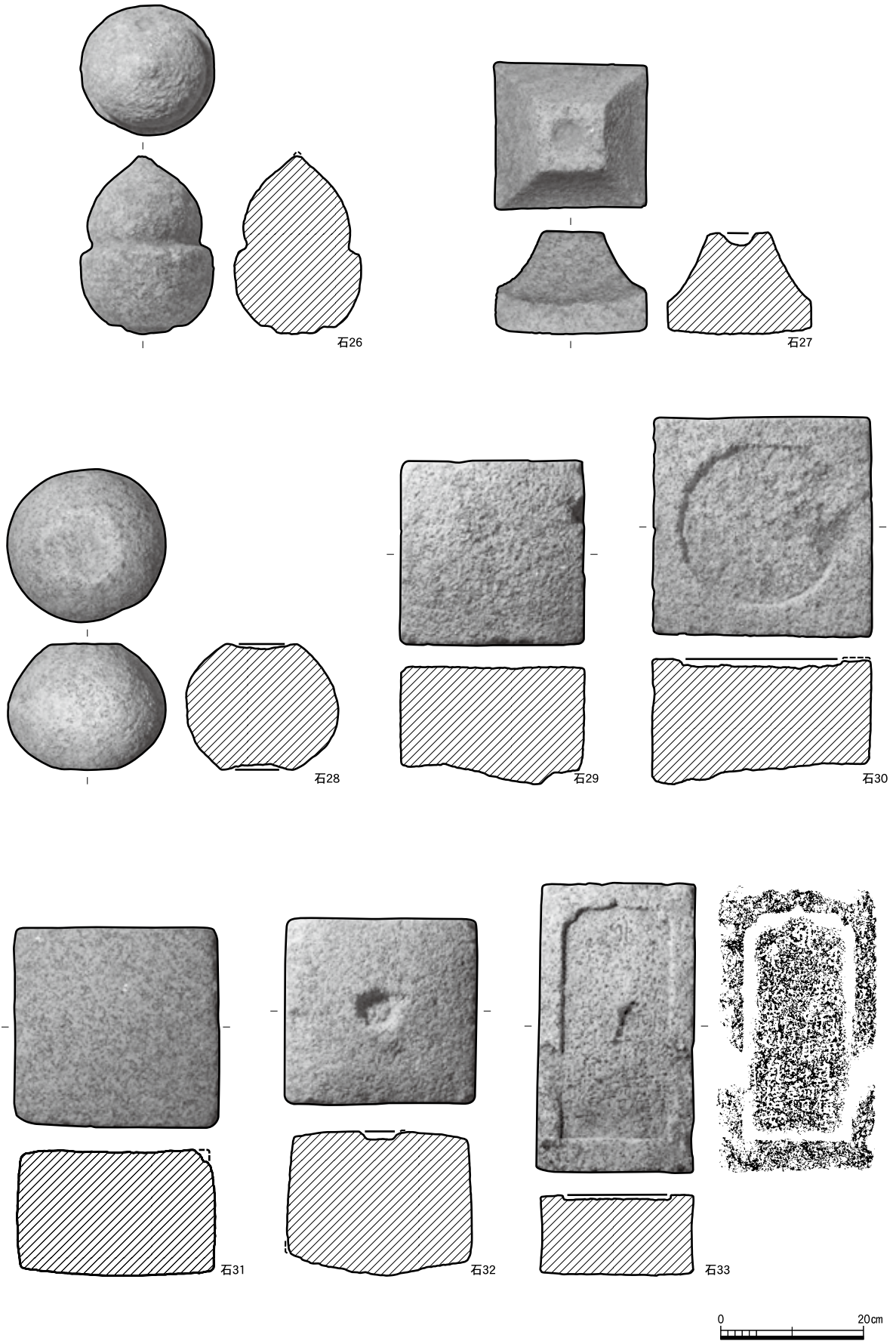


图 44 石製品実測図 2 (1 : 8)

色の流紋岩で、糸魚川や天竜川流域で産する火成岩の1種である。石23は下部が欠損する。表と側面が滑らかで磨滅する。石材はオリブがかかった灰色の砂岩である。石13・石18・石22は堀135、石14・石16・石19・石20・石23は整地層、石15は門2の柱穴180、石17は溝134、石21は土坑242から出土した。いずれも室町時代に属する。

軽石（石24）半分欠損する。多孔質で軽い。火山の噴出物である。地方から運ばれた搬入品である。垢摺りに使用されたものか。整地層から出土した。室町時代に属する。

石臼（石25）茶臼の下石である。石材は花崗岩で、上面に8方向の摺り溝があり、1面に8本の摺り溝を刻む。側面と挽いたお茶を受ける部分の表・裏面に赤褐色の顔料とその上に塗布した黒漆状の塗膜が少量残存する。このことから目に映る部分に漆状の塗料を塗っていた可能性がある。柱穴230から出土した。柱の礎石に転用されたものである。室町時代に属する。

五輪塔（石26～石32）積み上げ五輪塔の一部である。石26は空・風輪で、風輪下端には組み合わせの突起を作る。石27は火輪で、上端に風輪と組み合わせる窪みを作る。石28は水輪である。上端に火輪と、下端には地輪と組み合わせる窪みがある。石29～石31は地輪である。石30は上端を円形に彫り窪める。石29・石30とも下部は欠損する。石32は上下面が膨らみ、上面中央に直径5.6cmの窪みを作る。石26は堀135、石27・石28・石32は整地層、石29・石30は落込210、石31は柱穴118から出土した。いずれも室町時代に属する。

墓標（石33）前面を彫り窪め中央頭に梵字、その下縦2列に梵字と名前を、名前の中央・左右には年号を彫り込む。左は「梵字 松岩妙貞信女」、右は「梵字 瑞翁浄喜信士」、中央左「寛文十一年（1667）」、中央右「十月十四日」と刻む。東区の攪乱1から出土した。江戸時代に属する。

## （6）木製品（図45）

木製品には箸、曲物底板、折敷などの生活用品や、漆製品・井戸杵などがある。すべて井戸255から出土したもので、鎌倉時代に属する。

箸（木1～木6）面取りを施し、断面形は楕円である。すべて一端が欠損する。木2の樹種はスギで、木2以外はすべてヒノキである。

付木（木7）先端が焦げ、使用痕が残る。箸の転用で、樹種はヒノキである。

板状製品（木8～12）断面は方形で、一端または両端が欠損する。樹種は木8・木10・木11がヒノキ、木9・木12はスギである。

折敷（木13）角は丸く削られ、上部に直径0.2cmの穿孔がある。樹種はヒノキである。

底板（木14）曲物などの底板を俎板に転用したもので、両面に刃物痕が付く。樹種はヒノキである。

井戸杵（木15～木19）長さ69.3cm以上、幅9.8～10.5cm、厚さ1.9～2.9cmある。側面の両側に臍穴を開け、削った竹を差し込んで円形に繋ぐ。臍穴は4箇所、長さ3.0～4.6cm、幅約1.5cmある。臍の位置は揃っていない。樹種はスギである。

漆製品 透明感のある織布に黒色の漆を塗ったもので、布は絹の可能性もある。容器にしては

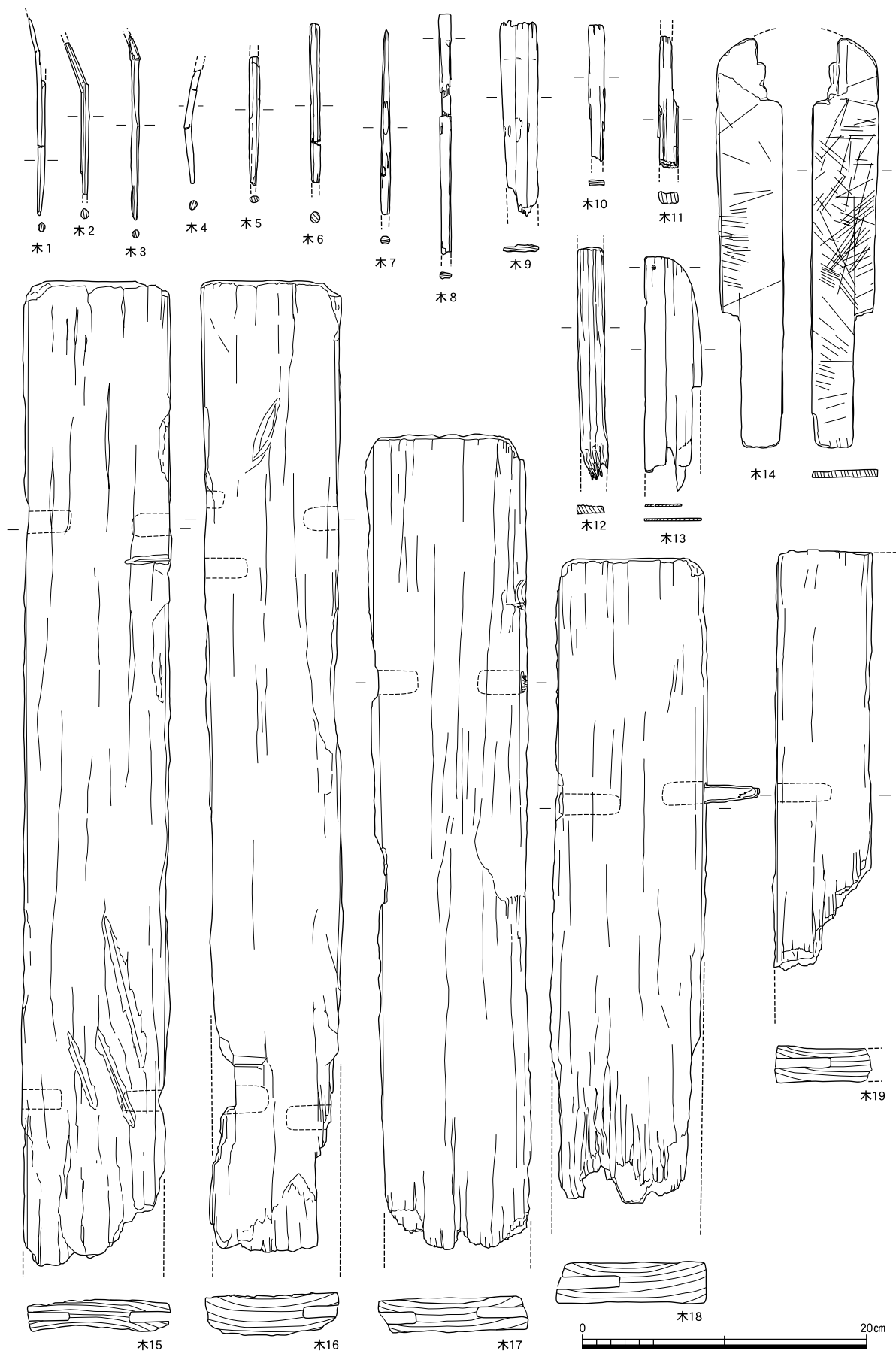


图 45 木製品実測図 (1 : 4)

薄く、用途は不明である。烏帽子の可能性もある。

### (7) 土製品 (図 46、図版 12)

土製円盤 (土 1 ~ 土 3) 土 1 は平面形が円形で、直径 2.1 cm、厚さ 0.4 ~ 0.6 cm と小さい。色調は褐色 ~ 灰色を呈し、焼成は良好である。表面を磨いた丁寧な作りである。溝 134 から出土した。室町時代に属する。土 2 は瓦を、土 3 は土師質土器を円盤状に加工したものである。土 2 の胎土は長石や石英を多く含む粗い土で、土 3 は雲母をわずかに含む精良な土である。ともに整地層から出土した。室町時代に属する。

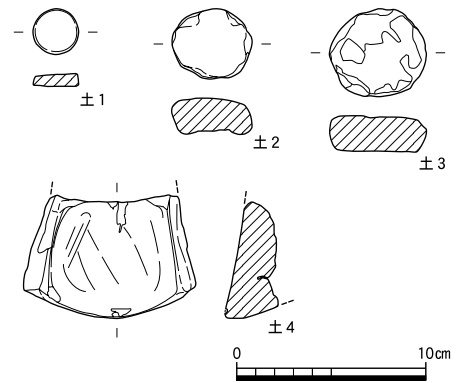


図 46 土製品実測図 (1 : 4)

硯 (土 4) 瓦質の硯である。海部は欠損する。陸部後方は弧を描き海部に向かって幅が狭くなる。表面は滑らかで、側面はミガキ調整を施す。裏面は剥離する。粗雑な作りである。整地層から出土した。室町時代に属する。

### (8) その他の遺物

焼土 室町時代の整地層や土坑などから出土した。浅黄橙色を主体とする色を呈する。10 cm 程の塊で、片面が黒褐色に変色し、炭や鋳滓が付着する。鑄造関係の鑄型か炉壁の可能性はある。

鋳滓 3.0 ~ 5.0 cm の塊で、整地層から少量出土した。

炭片 各時代の遺構から出土した。小片が多く樹種の同定は実施していない。

自然遺物 動物遺体・植物遺体・昆虫遺体・貝などが土器・土坑・溝・井戸・整地層などから出土した。土坑 114・溝 134 の瓦器羽釜・茶釜から焼骨の小片と焼けた大麦 1 粒が対で出土した。羽釜などを蔵骨器として転用し、埋葬したものである。落込 210 からは昆虫の部位 2 体とスベリヒユが、堀 135 からはスベリヒユのみが出土した。井戸 255 は上層から土器と一緒に梅の種が出土している。また、中層の土壌をサンプリングして洗浄した結果、出土した種子にはタデ、ヒユ、アブラナ、カタバミ、トウダイグサがある。これらの種子は埋土として運ばれた土に含まれていたものとする。溝 134 からは動物の骨小片が出土した。動物の種類は不明である。整地層からは巻貝が出土した。食用にした後捨てられたものであろう。

#### 註

- 1) 『六波羅蜜寺の研究』(財)元興寺仏教民族資料研究所 1979 年
- 2) 『木村捷三郎収集瓦図録』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996 年 969 と同文

## 5. ま と め

今回の調査によって、室町時代の六波羅蜜寺境内の様相、また、立地する旧地形や土地の利用状況などを明らかにすることができた。また、弥生時代から奈良時代の自然流路や平安時代前期の埋葬遺構を検出したこと、室町時代後期の六波羅蜜寺境内南西隅の様子が判明するなど大きな成果が得られた。今回の調査で判明した成果について各時代ごとに述べる。

### 弥生時代から奈良時代

調査区の旧地形は東から西に斜面となり、西端 Y=-20,761 付近で平地となる。この斜面の中央付近で、南東から北西に流れる自然流路を検出した。流路からは弥生時代後期を中心に奈良時代までの土器が出土した。この地域で遺跡は確認されていないが、ここより南東にある今熊野南日吉町と東福寺裏の本町（月の輪遺跡）では弥生時代中・後期の土器が出土している。月の輪遺跡では溝が検出され、土器の出土状況から集落遺跡が存在した可能性が指摘されている。このことから、出土した弥生時代の遺物は流路上流周辺に遺跡があることを示すものといえる。また、今回出土した古墳時代の円筒埴輪や土器の破片は、昭和 56 年度の六波羅蜜寺境内の発掘調査で流路から出土した円筒埴輪や土器と考え合わせると、この付近に古墳が築かれていた可能性がある。これは、調査地北東には高台寺境内にある八坂古墳や將軍塚山頂の將軍塚古墳群があることのほか、六波羅蜜寺境内にある阿古屋塚の土台に家型石棺の蓋が転用されている例などからも、その可能性が高い<sup>1)</sup>。

### 平安時代

平安時代前期では、流路上面で検出した土坑から木目のついた鉄釘や口縁部を打ち欠いた壺が出土した。板木や骨の痕跡は確認できなかったが、木棺墓に使用された釘と考えられる。また、流路の埋土からも同じような木目のついた鉄釘が出土しており、他にもこのような土坑があった可能性がある。この地は愛宕郡条里によると鳥部郷三条野振里の北東部にあたり、鳥辺野という地名からも葬送の地であったことがわかる。なお、愛宕郡条里は北で東に 5～10 度振れることが判明している<sup>2)</sup>。

また、この地の北は平安京の五条大路（現在の松原通）の東延長上にあって、珍皇寺、清水寺への参詣路として民衆が集まる場所であった。この地に応和三年（963）、空也上人が六波羅蜜寺の前身である西光寺を建立したのも、このような理由があったものと思われる。

### 鎌倉時代

鎌倉時代の遺構は、調査区中央以西で検出した石組井戸や、土坑などがある。これらの遺構が六波羅蜜寺に関連するものなのか、六波羅政庁関係のものかは不明である。

『続南行雜録祐茂記抄』によると、安貞二年（1228）「七月二日鴨川出水により、当寺西門傾倒す。」とあり、少なくともこの時期の六波羅蜜寺に西門が存在したこと、また、鴨川の水が押し寄せたことから、寺域は今より西に広がっていたことがわかる。



## 室町時代

今回の調査によって、室町時代にこの周辺は、膨大な量の土を使って斜面を整地、平坦面を造り出し、大々的に造成されていたことが判明した。また、東区では検出した門跡や内溝から六波羅蜜寺の北限が確認できた。西区東側では薬研堀の堀 135 や、その東で検出した多くの柱穴から、南北に細長い建物が建つこと、建物の北に取り付く門や北に延びる柵が並ぶことが判明した。建物はおそらく物見櫓と考えられ、その北隣りにある脇門や柵と薬研堀の堀を合わせて、当時の防御施設が作られていた様子も判明した。ここより西で検出した南北溝 204 は、堀を築く直前までの六波羅蜜寺の西限であったと考えられる。また、溝 134 は東から続く東西溝 133 と合流することが確認できた。この溝の埋土や整地層から多量の瓦器鍋羽釜が出土し、鍋釜の中に焼骨が残存しているものもあることから、鍋釜は埋葬時に蔵骨器として使用されたものである。これらのことから、室町時代のこの地域は堀などが造成されるまでは墓域であったと考えられる。

防御施設などの遺構の時期は、大半が室町時代後期（16 世紀中頃）に属し、天文法華の乱などの時期と重なる。しかし、争乱が収まる 16 世紀後半には堀も埋められ、その上に墓などがたてられるようになり、江戸時代には墓地となっていたようである。

ところで、溝や建物などが北で東に振れるのは、前述した愛宕郡の条里がやはり東に 5～10 度振れることから、条里の南北筋を踏襲したものであると考えたが、検出した遺構の振りは約 20 度であるにもかかわらず、六波羅蜜寺は正方位にある。これは地理的なものが関係しているとも考えられる。

いずれにせよ、今回の調査では、中世期のこの地域の様子が判明するなど大きな成果があった。今後、この周辺での調査が進めば、六波羅蜜寺境内・六波羅政庁跡の変遷の様子が詳しく解明されることが期待される。

## 註

- 1) 『史料 京都の歴史 10 東山区』平凡社 1987 年
- 2) 高橋昌明「平正盛と六波羅蜜堂」『京都地域史の研究』国書刊行会 1979 年



# 版 图



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	ろくはらみつじけいだい・ろくはらせいちょうあと							
書名	六波羅蜜寺境内・六波羅政庁跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2011-6							
編著者名	田中利津子							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2012年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ろくはらみつじけいだい 六波羅蜜寺境内 ろくはらせいちょうあと 六波羅政庁跡	きょうとしひがしやまく 京都市東山区 まつぼらどおりやまとおお 松原通大和 じみがしいるにちようめ 路東入2丁目 ろくろちよう 轆轤町82	26100	536  540	34度 59分 51秒	135度 46分 22秒	2011年6月 13日～2011 年9月13日	451m <sup>2</sup>	校舎新築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
六波羅蜜寺境内  六波羅政庁跡	寺院跡  都城跡 邸宅跡	弥生時代 ～奈良時代  平安時代  鎌倉時代  室町時代  近世以降	流路  土坑  井戸、土坑、柱穴  建物、門、柵、柱 穴列、堀、溝、土 坑、柱穴、落込、 埋納銭  窯、土坑、柱穴	弥生土器、土師器、須 恵器、円筒埴輪  土師器、須恵器、緑釉 陶器、灰釉陶器、白色 土器、瓦、金属製品  土師器、白色土器、須 恵器、灰釉陶器、瓦器、 焼締陶器、輸入陶磁器、 瓦、石製品、木製品  土師器、瓦器、焼締陶 器、施釉陶器、輸入陶 磁器、瓦、金属製品、 銭貨、石製品、土製品  土師器、焼締陶器、施 釉陶器、磁器、瓦、金 属製品、銭貨、石製品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2011-6  
六波羅蜜寺境内・六波羅政庁跡

発行日 2012年3月30日

編集  
発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1  
〒 602-8435 TEL 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地  
〒 604-0093 TEL 075-256-0961